上峰町文化財調査報告書第18集

堤六本谷遺跡II
屋形原遺跡III

平成2・6年度佐賀県農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000年3月

上峰町教育委員会

上峰町文化財調査報告書第18集

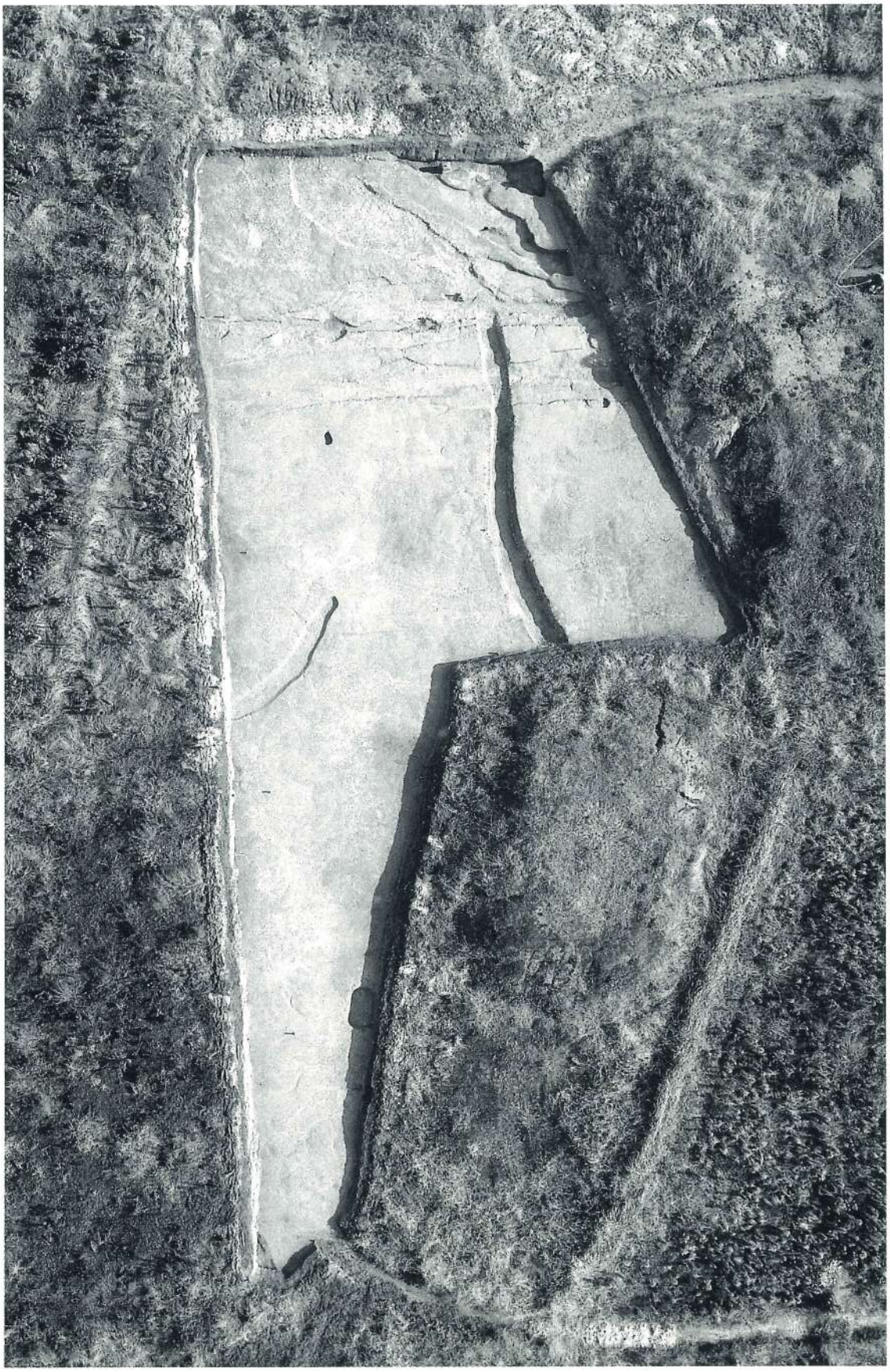
堤六本谷遺跡Ⅱ
（つつみろっぽんだに）

屋形原遺跡Ⅲ
（やかたばる）

平成２・６年度佐賀県農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

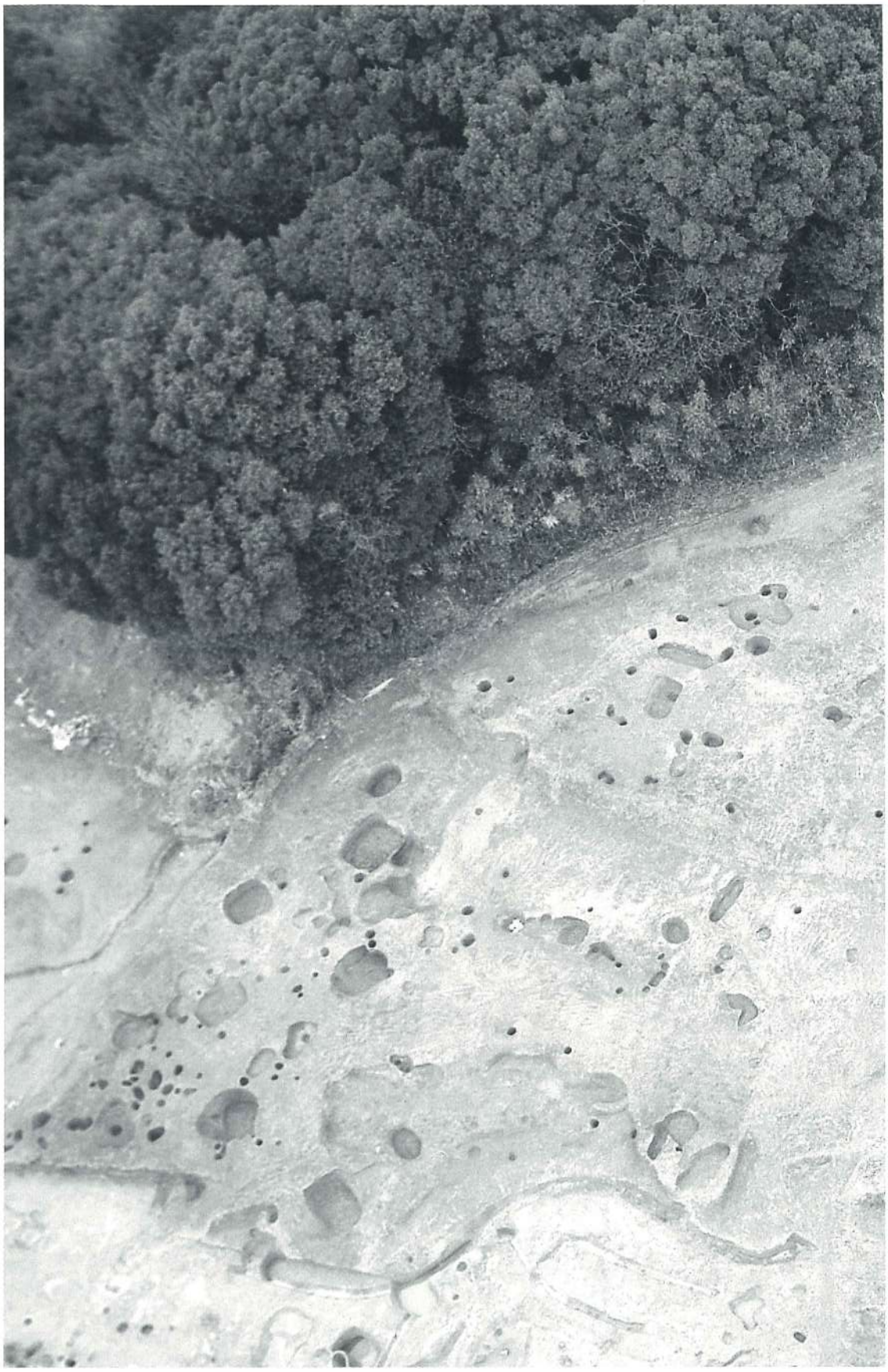
2000年３月

上峰町教育委員会



平成２年度 堤六本谷遺跡４区全景（写真左が北）

平成２年度 堤六本谷遺跡５・６区全景（写真上方が北）



平成２年度 堤六本谷遺跡５区　土壙集中部（写真上方が北）

平成２年度 堤六本谷遺跡６区全景（写真上方が北）

平成６年度 堤六本谷遺跡８区全景（写真上方が北）

平成６年度 堤六本谷遺跡９区全景（写真上方が北東）

平成６年度 屋形原遺跡２区全景（南上空より）

平成６年度 屋形原遺跡２区全景（写真上方が北）

序

従来、上峰町は「遺跡の宝庫」と言われてきました。北部の脊振山系、その南麓から派生し南北に延びる洪積世丘陵と開析谷、さらに有明海へと続く沖積平野と変化に富んだ地形を含む町域には、いたるところに先人たちの暮らしの足跡が刻み込まれています。教育委員会では、こうした人々の暮らしの足跡、歴史的資産を保存活用し、将来へ継承していくために、開発と文化財の保護との調整に努めてまいりました。

上峰町では、町北部の大字堤地区を対象とした上峰北部県営農業基盤整備事業が昭和60年度より開始され、これに伴う埋蔵文化財発掘調査を進めてまいりました。

この報告書は、平成２年度及び平成６年度に実施した堤六本谷遺跡と屋形原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であります。両遺跡の調査では、奈良時代の遺構や遺物を中心に縄文時代から近世に及ぶ人々の暮らしの跡が発掘されました。堤六本谷遺跡では、近世の遺構・遺物がまとまって検出され、かつてこの辺りにあったと言われている「大鳥井」集落の存在が確認されました。また、屋形原遺跡では、縄文時代の土壙から石錘が出土し、比較的資料の少ない漁猟の分野の解明に欠かせない貴重な資料を得ることができました。

この報告書を学術資料として、また住民の共有の財産としての文化財を大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

なお、今回の調査にあたって、ご指導、ご協力をいただきました文化庁、佐賀県教育委員会文化財課、佐賀県農林部をはじめ、地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成12年３月

上峰町教育委員会

教育長　古　賀　一　守

例　言

1．本書は、平成２年度及び平成６年度の佐賀県農業基盤整備事業に伴い、上峰町教育委員会が佐賀県農林部の委託事業により発掘調査を実施した、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字六本谷、字一本柳に所在する堤六本谷遺跡及び佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本松に所在する屋形原遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書は、平成11年度佐賀県営農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査事業として、佐賀県農林部の委託事業により上峰町教育委員会が作成、刊行したものである。

3．発掘調査は、平成２年度及び平成６年度の農業基盤整備事業の施工により地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ部分についてそれぞれ便宜的な調査区域を設定し、上峰町教育委員会が実施した。

4．各年度の調査遺跡名・調査地区名・調査面積・調査期間は、以下のとおりである

年　度	遺　跡　名	調査地区名	調査面積	調　査　期　間
平成２年度	堤六本谷遺跡	４区 ５区 ６区	510㎡ 1,420㎡ 870㎡	平成２年６月21日 ～ 平成３年３月 ７日
平成６年度	堤六本谷遺跡	８区 ９区	700㎡ 1,300㎡	平成６年７月20日 ～ 平成７年１月31日
	屋形原遺跡	２区	3,250㎡	

5．現場での遺構実測作業は、各年度とも、有限会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

6．遺構の個別写真及び出土遺物の写真撮影は、調査員が行った。また、気球による遺跡の全景などの空中写真撮影については、有限会社空中写真企画に委託した。

7．調査後の出土遺物、記録類の整理作業は、随時、上峰町文化財整理事務所にて実施した。

8．本書中の挿図・実測図作成、拓本、トレース作業などは、調査員の指示により、製図作業員が行った。

9．本書の執筆・編集は、原田大介が行った。

10．本報告書に係る発掘調査で出土した全ての遺物、及び図面・写真・その他の記録類は、上峰町教育委員会で保管している。

凡　例

1．堤六本谷遺跡及び屋形原遺跡の略号は、それぞれ「TTR」、「YKT」であり、調査区略号は、堤六本谷遺跡4区を「TTR－４」、屋形原遺跡２区を「YKT－２」とした。

2．遺構番号は、遺構の種別を表す２文字のアルファベットに続き、調査区の番号に01、02などの２桁の番号を組み合わせて表記した。

SH……竪穴式住居址　SB……掘立柱建物址　SK……土壙　SD……溝跡・溝状遺構

SX……性格不明遺構・その他

例）SH101　1区の1号竪穴式住居址　　SK215　2区の15号土壙

3．平成２年度調査の堤六本谷遺跡の遺構について、調査員のミスによって、遺構番号を記した記録を紛失し、５区の遺構の１部（報告書遺構番号551以降）について、調査時に現地で各遺構に付した遺構番号と実際の遺構、出土遺物との照合ができない事態となった。当事者の不手際により、貴重な資料を失ったことについて、深く反省し、お詫びいたします。

4．前記により、堤六本谷遺跡５区のSK－502～SK－515を除く遺構番号不明となった遺構については、551から始まる仮の遺構番号（調査時の遺構番号とは一致しない）を付して報告することとし、出土遺物については、調査時の遺構番号により遺構ごとに報告することとさせていただきたい。

5．挿図中の方位について、平成２年度の堤六本谷遺跡調査に係る挿図のうち、既成の地形図などを用いたものは特記のないかぎり図上方が座標北、現地で作成した遺構図などは図中方位が磁北を表している。また、平成６年度の堤六本谷遺跡及び屋形原遺跡に係る挿図は、全て座標北を基準としている。

6．表中の数値に付した記号について、（　）は推定値を、※は部分値・残存部値をそれぞれ表している。

7．土器実測図の縮尺は、原則として１／４であるが、土器拓影など、同一図版内で縮尺が異なるものについては、遺物報告番号の後に続けてその縮尺を特記している。

8．土器実測図中のスクリーン部分は、赤色塗彩を表す。同図中のヘラ削り調整痕に付した「↑」印は、調整に用いたヘラ状工具の器面に対する相対的な移動方向を表している。

9．遺物実測図の遺物報告番号は、各年度、遺跡ごとに一連の番号を付した。また、この番号は、遺物写真図版に付した遺物報告番号と一致する。

調 査 組 織

平成２年度

調査事務局	総　　括	松　田　末　治	上峰町教育委員会	教育長
	事務主任	馬　場　英　孝	〃	教育課長
	経費執行	吉　田　　忠	〃	社会教育係長
		鶴　田　浩　二	〃	社会教育係
		原　田　大　介	〃	〃
調 査 組 織	調 査 員	鶴　田　浩　二	上峰町教育委員会	社会教育係
		原　田　大　介	〃	〃
調 査 指 導		佐賀県教育委員会文化財課		

平成６年度

調査事務局	総　　括	松　田　末　治	上峰町教育委員会	教育長
	事務主任	馬　場　英　孝	〃	教育課長
	経費執行	白　濱　博　巳	〃	社会教育係長
		鶴　田　浩　二	〃	社会教育係
		原　田　大　介	〃	〃
調 査 組 織	調 査 員	鶴　田　浩　二	上峰町教育委員会	社会教育係
		原　田　大　介	〃	〃
調 査 指 導		佐賀県教育委員会文化財課		

発掘作業参加者

平成２年度

秋山　巖、秋山ユキエ、石橋ツタエ、石橋テル、石丸ミチエ、江頭晴次、江口正弘、大坪光代、緒方ツタエ、緒方　中、小田鈴江、小田　強、川原ツヤ、川原　等、川原ミヨ、川原ヨシエ、北島八重子、黒石光利、古賀敬治、鴫山静江、執行ミハル、高島　昇、田中　巧、田中ミスエ、堤　イシ、堤　　一、鶴田久子、鶴田八重子、中原百合、中村初一、納富ヌイ子、福島一雄、古川シマ子、松尾トシエ、三好スエ、矢動丸茂利、矢動丸信子、矢動丸ミツエ、柳　和義、山口ミヨ子、和佐治夫（発掘作業員）
荒木和代、江頭洋子、海良田順子、島　美保子、馬原喜美子、矢動丸五十三（実測作業員）

平成６年度

秋山キミ、秋山ユキエ、石橋テル、石丸富男、石丸ミチエ、稲員シヅ子、稲員トシエ、稲員春雄、稲員博敏、岩下貴子、江越栄子、江越　晋、江越清太、江崎秋子、江崎オシノ、大石貞義、大坪光代、大坪ミヨコ、緒方ツタエ、小田八重子、川原ツヤ、川原　等、川原ミヨ、後藤セツ子、最所和子、執行一水、島　四郎、高尾マツヨ、高島　昇、武廣ハル子、田中ミスエ、鶴田キヨ子、鶴田竹次、鶴田久子、鶴田八重子、豊福政子、納富ヌイ子、福島一雄、福島チヨノ、福島ツタエ、藤井妙子、藤戸道子、松尾キミエ、松尾トシエ、三好スエ、矢動丸五十三、矢動丸喜三、矢動丸信子、山下保子、（発掘作業員）

整理作業参加者（過年度の整理作業分を含む）

大隈弓子、岩下貴子、坂本恵子、島　美保子、田尻祐子、中尾美千恵、馬原喜美子、矢動丸洋子（製図作業員）

目　次

序
例言・凡例
調査組織・発掘作業参加者・整理作業参加者

Ⅰ．遺跡の位置と環境 ……1
　1．堤六本谷遺跡及び屋形原遺跡の位置 ……1
　2．歴史的環境 ……1

Ⅱ．調査に至る経緯 ……8

Ⅲ．平成２年度堤六本谷遺跡４～６区の調査 ……11
　1．堤六本谷遺跡と調査区の概要 ……11
　2．調査の経過 ……13
　3．堤六本谷遺跡４区の調査 ……13
　　(1)遺構 ……13
　　(2)遺物 ……15
　4．堤六本谷遺跡５区の調査 ……15
　　(1)遺構 ……15
　　(2)遺物 ……22
　5．堤六本谷遺跡６区の調査 ……27
　　(1)遺構 ……27
　　(2)遺物 ……31

Ⅳ．平成６年度堤六本谷遺跡８・９区の調査 ……33
　1．堤六本谷遺跡８・９区の概要 ……33
　2．調査の経過 ……33
　3．堤六本谷遺跡８・９区の調査 ……33
　　(1)遺構 ……33
　　(2)遺物 ……34

Ⅴ．平成６年度屋形原遺跡２区の調査 ……37
　1．屋形原遺跡と調査区の概要 ……37
　2．調査の経過 ……37
　3．遺構 ……38
　　(1)竪穴式住居址 ……38
　　(2)掘立柱建物址 ……44
　　(3)土壙 ……48
　4．遺物 ……54

Ⅵ．まとめ ……68

挿図目次

Fig. 1 上峰町北部地形概略図（1/10,000）……2
2 堤六本谷遺跡・屋形原遺跡の位置及び周辺遺跡（1/50,000）……3
3 堤六本谷遺跡・屋形原遺跡周辺地形図及び調査区位置図（1/5,000）……12
4 堤六本谷遺跡4区 遺構配置図（1/400）……14
5 堤六本谷遺跡4区 土壙実測図SK-407・SK-408（1/60）……14
6 堤六本谷遺跡4区 出土遺物実測図（1/4）……15
7 堤六本谷遺跡5区 遺構配置図（1/400）……17・18
8 堤六本谷遺跡5区 土壙実測図（1）SK-502～SK-511（1/60）……19
9 堤六本谷遺跡5区 土壙実測図（2）SK-512～SK-515・SK-551～SK-555（1/60）……20
10 堤六本谷遺跡5区 土壙実測図（3）SK-556～SK-559・SK-567～SK-573（1/60）……21
11 堤六本谷遺跡5区 出土遺物実測図（1）（1/4）……23
12 堤六本谷遺跡5区 出土遺物実測図（2）（1/4）……25
13 堤六本谷遺跡5区 出土遺物実測図（3）（1/4）……26
14 堤六本谷遺跡5区 出土遺物実測図（4）（1/4）……27
15 堤六本谷遺跡6区 遺構配置図（1/400）……28
16 堤六本谷遺跡6区 竪穴式住居址実測図SH-616・SH-617（1/80）……29
17 堤六本谷遺跡6区 土壙実測図（1）SK-601～SK-603・SK-605～SK-610・SK-614・SK-615（1/60）……30
18 堤六本谷遺跡6区 土壙実測図（2）SK-618～SK-622（1/60）……31
19 堤六本谷遺跡6区 出土遺物実測図（1/4）……31
20 堤六本谷遺跡8区 遺構配置図（1/400）……34
21 堤六本谷遺跡9区 遺構配置図（1/400）……35
22 堤六本谷遺跡8・9区 土壙実測図SK-801～SK-804・SK-901～SK-903（1/60）……36
23 屋形原遺跡2区 遺構配置図（1/500）……39・40
24 屋形原遺跡2区 竪穴式住居址実測図（1）SH-203・SH-204・SH-206（1/80）……42
25 屋形原遺跡2区 竪穴式住居址実測図（2）SH-217・SH-229・SH-231（1/80）……43
26 屋形原遺跡2区 竪穴式住居址実測図（3）SH-237・SH-238・SH-241（1/80）……44
27 屋形原遺跡2区 掘立柱建物址実測図（1）SB-208・SB-225（1/80）……46
28 屋形原遺跡2区 掘立柱建物址実測図（2）SB-261・SB-262（1/80）……47
29 屋形原遺跡2区 掘立柱建物址実測図（3）SB-263（1/80）……48
30 屋形原遺跡2区 土壙実測図（1）SK-205・SK-207・SK-209・SK-211～SK-213（1/60）……50
31 屋形原遺跡2区 土壙実測図（2）SK-214～SK-216・SK-223・SK-224・SK-230・SK-232（1/60）…51
32 屋形原遺跡2区 土壙実測図（3）SK-233～SK-236・SK-240・SK-242～SK-247（1/60）……52
33 屋形原遺跡2区 土壙実測図（4）SK-248～SK-251・SK-254～SK-257・SK-259（1/60）……53
34 屋形原遺跡2区 出土遺物実測図（1）（1/4）……60
35 屋形原遺跡2区 出土遺物実測図（2）（1/4）……61
36 屋形原遺跡2区 出土遺物実測図（3）（1/4）……62
37 屋形原遺跡2区 出土遺物実測図（4）（1/4）……63
38 屋形原遺跡2区 出土遺物実測図（5）（1/4）……64
39 屋形原遺跡2区 出土遺物実測図（6）（1/4）……65
40 屋形原遺跡2区 出土遺物実測図（7）（1/4）……66

41　屋形原遺跡2区 出土遺物実測図（8）（1/4）……67

表　目　次

Tab. 1　堤六本谷遺跡5区 出土土壙一覧表 ……16
2　堤六本谷遺跡6区 出土土壙一覧表 ……29
3　堤六本谷遺跡8・9区 出土土壙一覧表……34
4　屋形原遺跡2区 出土竪穴式住居址一覧表 ……41
5　屋形原遺跡2区 出土土壙一覧表 ……48
6　屋形原遺跡2区 出土石器等一覧表 ……59
報告書抄録

図 版 目 次

巻頭図版
PL. 1　堤六本谷遺跡4区　全景
2　堤六本谷遺跡5・6区　全景
3　堤六本谷遺跡5区　土壙集中部
4　堤六本谷遺跡6区　全景
5　堤六本谷遺跡8区　全景
6　堤六本谷遺跡９区　全景
7　屋形原遺跡2区　全景
8　屋形原遺跡2区　全景
図　版
9　堤六本谷遺跡4区　遺構
10　堤六本谷遺跡5区　遺物（1）
11　堤六本谷遺跡5区　遺物（2）
12　堤六本谷遺跡6区　遺物・9区　遺構
13　屋形原遺跡2区　遺構（1）
14　屋形原遺跡2区　遺構（2）
PL.15　屋形原遺跡2区　遺構（3）
16　屋形原遺跡2区　遺構（4）
17　屋形原遺跡2区　遺構（5）
18　屋形原遺跡2区　遺構（6）
19　屋形原遺跡2区　遺構（7）
20　屋形原遺跡2区　遺構（8）
21　屋形原遺跡2区　遺構（9）・遺物（1）
22　屋形原遺跡2区　遺物（2）
23　屋形原遺跡2区　遺物（3）
24　屋形原遺跡2区　遺物（4）
25　屋形原遺跡2区　遺物（5）
26　屋形原遺跡2区　遺物（6）
27　屋形原遺跡2区　遺物（7）
28　屋形原遺跡2区　遺物（8）
29　屋形原遺跡2区　遺物（9）

Ⅰ．遺跡の位置と環境

1．堤六本谷遺跡及び屋形原遺跡の位置（Fig. 1・2）

堤六本谷遺跡及び屋形原遺跡が所在する佐賀県三養基郡上峰町は、佐賀県東部の穀倉地帯である佐賀平野のほぼ中央、三養基郡の西端に位置しており、東部は同郡中原町・北茂安町と、南部は同郡三根町と、西部は神埼郡東脊振村・三田川町と境を接している。また、この神埼郡との境界は、旧来の三根郡との郡界を踏襲しており、現在も町のほぼ中央を東西に横断する国道34号線付近の三田川町と接する地区は郡境と呼称されている。

鳥栖市から佐賀郡大和町に至る佐賀県東部には、北部に背振山地、その南麓に発達する洪積世丘陵、さらに南部には有明海へと続く沖積平野が展開するという、変化に富んだ地形が発達している。なかでも、山麓部から沖積平野部へ移行する部分に発達する洪積世丘陵は、山麓部に源を発し有明海へと南流する大小の河川によって開析され北から南へ延びる舌状を呈した段丘を数多く形成している。そして、これらの段丘は古くから人々の生活の場として利用され、段丘上には数多くの遺跡が分布し、遺跡数、内容ともに県内でも有数の地域となっている。

そのようななか、南北に細長い町域をもつ上峰町においても、北部に山麓部、中央部に洪積世丘陵部、南部に沖積平野部と、この佐賀県東部の特徴的な地形が展開しており、中央部に発達する洪積世丘陵地域を中心に遺跡の分布が知られ、古くから「遺跡の宝庫」と呼ばれてきた。

今回調査を行った堤六本谷遺跡及び屋形原遺跡が所在する町北部の大字堤地区は、中央を北部の鎮西山山麓を源とする切通川本流が小さく蛇行しながら南流し、これに幾条かの小河川が流入し支流を形成している。これら切通川本支流の開析作用によって形成された谷底平野を境界として、堤地区には、大小の南北に延びる舌状丘陵が発達している。

平成２年度及び平成６年度の県営農業基盤整備事業に伴い調査を実施した堤六本谷遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字六本谷、一本柳に所在し、切通側東岸の標高24m～40m付近の洪積世丘陵上に位置している。遺跡が立地する丘陵は、鎮西山南麓から南西へ派生する丘陵（以下、青柳丘陵と呼称する。）で、東方の八藤遺跡、新立古墳群が立地する八藤丘陵とは切通川支流の大鳥井川によって、西方の屋形原遺跡が立地する丘陵（以下、屋形原丘陵と呼称する。）とは切通川本流によってそれぞれ分かたれている。この丘陵の高位段丘面には青柳古墳群が立地しており、丘陵周辺部の低位段丘面に本遺跡は広がっている。

一方、平成６年度の県営農業基盤整備事業に伴い調査を実施した屋形原遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本松に所在し、切通川西岸の標高25m～27m付近の洪積世丘陵上に位置している。遺跡が立地する屋形原丘陵は、鎮西山西方の神埼郡東脊振村との境界付近に位置する標高約70mの独立小丘から南東へ派生する丘陵で、東方の堤六本谷遺跡、青柳古墳群が立地する青柳丘陵とは切通川本流によって、西南方の二塚山遺跡群が立地する二塚山丘陵とは切通川支流の屋形原川よってそれぞれ分かたれている。この丘陵の高位段丘面には屋形原古墳群などが立地しており、丘陵先端部の低位段丘面に本遺跡は広がっている。

2. 歴史的環境（Fig. 2）

上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観すると、前述のとおり、山麓部から洪積世丘陵部におよぶ一帯が古くから人々の生活の舞台となっており、山麓部及び各段丘上には、現在、遺跡の存在が知られ、県内においてもとくに弥生時代遺跡を中心に遺跡の分布密度が高い地域となっている。沖積地を望む丘陵部のほとんどが、各時代の集落あるいは墓域として占有され、とりわけ、弥生時代以降の遺跡を縄文時代以前の遺跡と比較すると、量的

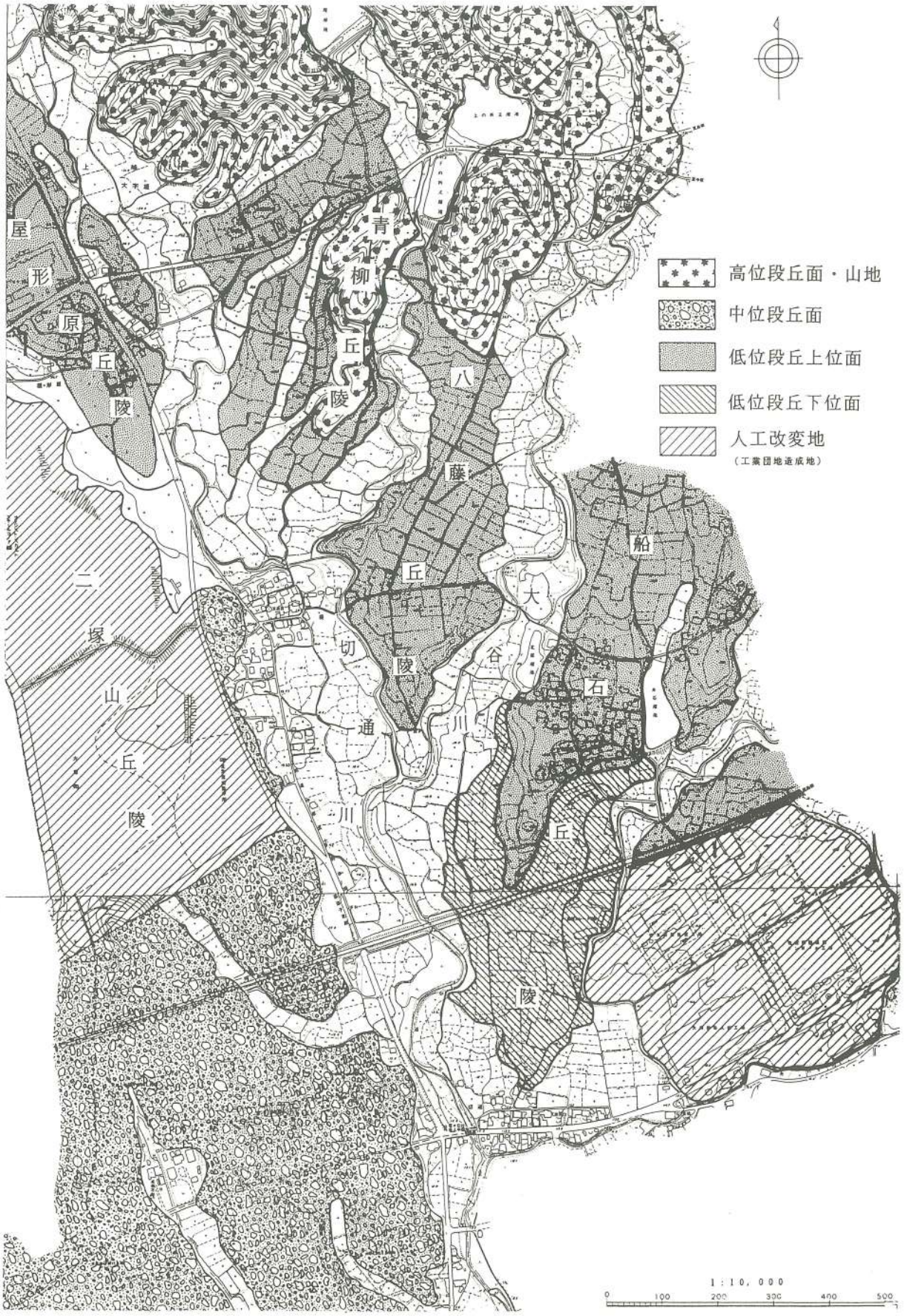


Fig. 1　上峰町北部地形概略図（1/10,000）

上峰町
1 奥の院古墳群
2 鎮西山山城
3 二本柳古墳群
4 鎮西山南麓古墳群
5 堤三本松遺跡
6 屋形原古墳群
7 谷渡古墳群
8 堤三本柳遺跡
9 青柳古墳群
10 新立古墳群
11 **屋形原遺跡**
12 **堤六本谷遺跡**
13 堤土塁跡
14 八藤遺跡
15 二塚山遺跡
16 五本谷遺跡
17 船石遺跡
18 船石南遺跡
19 切通遺跡
20 一本谷遺跡
21 坊所一本谷遺跡
22 上のびゅう塚古墳
23 目達原古墳群
24 坊所城跡
25 樫寺遺跡
26 杉寺遺跡
27 坊所二本松遺跡
28 坊所三本松遺跡
29 塔の塚廃寺跡
30 上米多貝塚
31 米多城跡
32 前牟田城跡
33 加茂環濠集落跡
34 江迎城跡
35 一ノ橋環濠集落跡
中原町
36 山田蔵骨器出土地
37 山田古墳群
38 大塚古墳
39 八幡社遺跡
40 簑原遺跡
41 姫方遺跡
42 姫方前方後円墳
43 姫方原遺跡
44 ドンドン落遺跡
45 町南遺跡
46 天神遺跡
47 西寒水遺跡
北茂安町
48 宝満谷遺跡
49 宝満宮前方後円墳
50 大塚古墳
51 東尾銅剣出土遺跡
三根町
52 本分貝塚
三田川町
53 吉野ヶ里丘陵遺跡群
54 下中杖遺跡
55 下藤貝塚
神埼町
56 志波屋六本松遺跡
57 伊勢塚前方後円墳
58 馬郡遺跡
東脊振村
59 西石動古墳群
60 戦場ヶ谷遺跡
61 三津永田遺跡
62 西石動遺跡
63 松原遺跡
64 辛上廃寺跡
65 横田遺跡

Fig. 2 堤六本谷遺跡・屋形原遺跡の位置及び周辺遺跡（1/50,000）

にも、質的にも爆発的に増加、充実する。銅鐸の鋳型を出土した鳥栖市安永田遺跡[1]、約400基の甕棺墓が検出された中原町姫方遺跡[2]、埋納された12本の銅矛を出土した北茂安町検見谷遺跡[3]、甕棺墓から舶載鏡を出土した神埼郡東脊振村三津永田遺跡[4]、近年の工業団地建設に先立つ調査で貴重な遺構、遺物が検出された神埼郡の神埼・三田川・東脊振の２町１村にまたがる吉野ケ里遺跡[5] など多くの著名な集落遺跡、墳墓群が知られ弥生時代の「クニ」あるいは「ムラ」単位の集団の存在が想定されるに至っている。このようななか、南北約12km、東西約３kmと南北に細長い町域を持つ本町においても同様に、町の北部から中央部を占める洪積世段丘上に弥生時代を中心に各時代の遺跡が分布している。

先土器時代の遺跡についてみると、各段丘で層序が異なる本地域においては本格的な調査がなされていないのが現状で、断片的な遺物の出土、採取にとどまっている。町内では、平成４年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡の調査において細石刃１点とこの時期のものと考えられる石器類が少量出土しているが、これが発掘調査における主な出土例である[6]。周辺地域では、神埼郡三田川町との境界に位置する二塚山丘陵の三田川町側からナイフ形石器の採取例が報告されている[7]。また、平成５年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡下層における阿蘇４火砕流跡と埋没林に係る調査において、先土器時代の年代示標となっている姶良－Tn火山灰（AT）の含有ピークが、通常の丘陵上の埋蔵文化財調査において遺構検出面としている「地山」の表層を構成する黄褐色風積土層の最上部付近のアカホヤ含有層のやや下部にて検出されている[8]。

縄文時代になると、中原町香田遺跡[9] や東脊振村戦場ヶ谷遺跡[10] などが出現する。町内においても、これまでも町北部の丘陵部から土器や石器が、耕作や先覚者の遺跡の表面観察などによって断片的に出土、採取されていたが、この度の上峰北部農業基盤整備事業に伴う発掘調査の結果、平成元年度の船石遺跡11区[11]、平成２年度から５年度にわたり実施した八藤丘陵の調査[12] において、遺構や遺物がまとまって検出されており、今後の調査例の増加が期待されている。

弥生時代になると、遺跡の数や規模、その内容が飛躍的に増加、充実することは先に触れたが、早くから『魏志倭人伝』の「弥奴国」の所在地を佐賀平野東部、なかでも三養基郡西部の旧三根郡にあてる論考が行われてきたことは周知のことである。旧三根郡に所属する上峰町においても、丘陵部のほとんどにこの時期の遺跡が展開している。しかし、町の南部や中央部の米多地区、坊所地区の丘陵部は、中世以降集落として発達し、早くから宅地化が進み、本格的な発掘調査の例に乏しく、わずかに再開発に伴い部分的に小規模の発掘調査が行われているに過ぎず、遺跡の詳細について把握できていないのが現状である。これに対して、町北部の大字堤地区では、近年の工業団地建設や農業基盤整備事業など大型開発に伴い広範囲かつ大規模な発掘調査が実施され、各遺跡から当時の社会の様子を知るうえで貴重な資料が得られている。町内の代表的な遺跡としては、甕棺墓から細形銅剣や貝釧を出土した切通遺跡[13]、神埼郡東脊振村、三田川町にまたがる、佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い甕棺墓、土壙墓など約300基が調査され、舶載鏡、小型仿製鏡をはじめとする貴重な副葬品を出土した二塚山遺跡[14]、佐賀県住宅供給公社の宅地造成に伴う調査で一集団の集落部分の全容が明らかになった一本谷遺跡[15]、地区運動公園整備に伴う調査で５世紀代の古墳とともに支石墓はじめ多数の甕棺墓が検出された船石遺跡[16] などが知られている。また、この度の県営農業基盤整備事業に伴う調査においても、船石遺跡[17]、船石南遺跡[18]、八藤遺跡[19] から住居址や甕棺墓などが多数検出されている。

古墳時代になると、この地域にも首長墓が出現する。初頭の時期には中原町姫方原遺跡[20]、上峰町五本谷遺跡[21] などにおいて方形周溝墓が営まれ、やがて中期にかけて鳥栖市から佐賀郡大和町に至る山麓や丘陵部に大型の前方後円墳が出現する。鳥栖市剣塚古墳[22]、中原町姫方古墳[23]、上峰町西南部から神埼郡三田川町にまたがる目達

原古墳群[24]、神埼郡神埼町伊勢塚古墳[25]、佐賀市銚子塚古墳[26]、佐賀郡大和町船塚古墳[27] など佐賀県東部の代表的な古墳が築かれるようになる。さらに後期になると、現在長崎自動車道や県道佐賀川久保－鳥栖線が通る山麓部から丘陵部にまたがる一帯に小円墳を中心とした古墳が多数築かれ、それぞれが山麓部の尾根や谷あるいは丘陵を単位として後期古墳群を形成している。

後の『肥前風土記』にみえる三根郡綾部（あやべ）・米多（めた）郷に属する当時の上峰町一帯は、『古事記』、『国造本紀』などの記事によれば応神天皇の曾孫にあた「都紀女加（つきめか）」なる人物が初代の米多国造として中央より下向した地域に比定され、その中心は、町南西部の米多地区から神埼郡三田川町東部の目達原（めたばる）一帯にあったと推定されている。町内の主要な古墳としては、都紀女加を始祖とする米多国造一族の墳墓として、５世紀代後半に形成されたと考えられる上のびゅう塚（現在、陵墓参考地「都紀女加王墓」宮内庁管轄）はじめ無名塚、大塚、稲荷塚などの前方後円墳６基ほか古稲荷塚など円墳数基からなる目達原古墳群[28] が知られていたが、戦前の陸軍飛行場建設の際に、唯一上のびゅう塚を残し他の古墳は簡単な発掘調査後破壊されている。また町の北部の古墳としては、同じく５世紀代の古墳で、蛇行状鉄剣、蛇行状鉄矛を出土した船石天神宮境内の船石古墳１～３号墳[29] が知られている。古墳時代後期の古墳としては、町北部の鎮西山の周辺山麓部から高位段丘上にかけて、小円墳を主体とする谷渡、青柳、新立、奥の院、鎮西山南麓、屋形原などの古墳群が点在している。

一方、この時期の集落は、神埼郡三田川町下中杖遺跡[30]、同郡東脊振村下石動遺跡[31] などが知られているが、弥生時代集落に比べ、遺跡そのものの数も少なく、調査例も少なくいまだに実態が明らかになっていないのが現状である。町内の遺跡をみても、当時の政治的中心であったと考えられる町南部の米多地区周辺における本格的な発掘調査の例がなく、今後の大きな課題といえる。

奈良・平安時代遺跡としては、三田川町下中杖遺跡、東脊振村辛上廃寺跡[32]、霊仙寺跡[33] などが著名であるが、この時期の遺跡についてもまとまった調査例が少なく、実態はあまり解明されていない。当時の遺構として大規模なものは、佐賀平野に敷かれた条里制の遺構が上げられ、早くから地名などから条里の復元が試みられ、現在ではほとんどの条里が復元されている。また、大宰府から肥前国府へ通じる官道の調査も進み、近年部分的な発掘調査が行われている。

町内では堤土塁跡[34] や塔の塚廃寺跡[35] などが奈良時代の遺跡として戦前から注目されている。町北部の堤地区の八藤丘陵と二塚山丘陵の間の谷底平野を遮断する形で築かれた堤土塁跡は、版築工法により築かれた福岡県の水城に似た施設＝「小水城」で、その築造目的が、大宰府の防衛施設であるとする説、灌漑用水確保のための溜池の堤防であるとする説など議論がなされてきたが、平成２年度からの土塁の東方に接する八藤丘陵の調査において、土塁東端から一直線に八藤丘陵を東方へ横断する道路側溝状の遺構が検出され[36]、その性格付けにあらたに古代道の存在が想定されることとなった。また町南西部を占める目達原丘陵の南端部に位置する塔の塚廃寺跡は、百済系単弁軒丸瓦が発見され、戦前までは基壇、礎石の存在が知られていた奈良時代中期の寺院址で、目達原古墳群を営んだ米多国造一族の流れをくむ三根郡の郡司層が建立したものと推定されている。また、町内における奈良・平安時代の集落は、農業基盤整備事業に伴う調査や近年の大規模小売店舗建設に先立つ坊所一本谷遺跡[37] の調査などでまとまった調査がなされたのみで、今後の調査例の増加が期待される。

中世になると、北部の山麓部の小峰に山城が築かれ、沖積平野部には環濠を伴う平城や集落が出現する。町内の中世城館址としては、北部の鎮西山山城、上峰町中央部の平野を臨む丘陵部に坊所城跡、町南部の平野部には米多城跡、前牟田城跡、江迎城跡、一の橋環濠集落、加茂環濠集落などが知られていた[38]。しかし、昭和40年代後半からの圃場整備事業によって、これら平野部の遺構は、原状がほとんど失われてしまった。そのようななか

で、町の親水公園として整備された江迎城跡では13世紀後半代の龍泉窯系の青磁碗が建物跡ともに出土し、また、坊所城跡では16世紀後半代の青花がそれぞれ出土している[39]。

以上、上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観したが、まさにこの地域は遺跡の密度、その内容ともに高く、遺跡の宝庫と呼ぶにふさわしい地域といえる。

註

1) 藤瀬禎博・石橋新次　『柚比遺跡群範囲確認調査第3年次概要報告書』　鳥栖市文化財調査報告書第30集　鳥栖市教育委員会　1980
2) 木下巧・天本洋一　『姫方遺跡』　佐賀県文化財調査報告書第30集　佐賀県教育委員会　1974
3) 七田忠昭　『検見谷遺跡』　北茂安町文化財調査報告書第2集　北茂安町教育委員会　1986
4) 金関丈夫・坪井清足・金関恕　「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』　日本考古学協会　1961
5) 七田忠昭他　『吉野ヶ里』　佐賀県文化財調査報告書第113集　佐賀県教育委員会　1992
6) 原田大介　『八藤遺跡Ⅲ』　上峰町文化財調査報告書第16集　上峰町教育委員会　1999
7) 七田忠志　「原始」『上峰村史』　上峰村　1979
8) 下山正一・西田民雄　「Ⅱ．佐賀県上峰町周辺の地形と地質」『佐賀平野の阿蘇4火砕流と埋没林』　上峰町文化財調査報告書第11集　上峰町教育委員会　1994
9) 高瀬哲郎・堤安信・久保伸洋　「香田遺跡」『香田遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書2　佐賀県文化財調査報告書第57集　佐賀県教育委員会　1981
10) 七田忠志　「佐賀県戦場ケ谷遺跡」『史前学雑誌』　6－2・4　1934
11) 原田大介　『船石遺跡Ⅴ』　上峰町文化財調査報告書第12集　上峰町教育委員会　1995
12) 原田大介　『八藤遺跡Ⅱ・堤土塁跡Ⅱ』　上峰町文化財調査報告書第14集　上峰町教育委員会　1998
前出（6）
13) 金関丈夫・金関恕・原口正三　「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』　日本考古学協会　1961
14) 高島忠平・七田忠昭他　「二塚山遺跡」『二塚山』　佐賀県文化財調査報告書第46集　佐賀県教育委員会　1979
15) 七田忠昭　『一本谷遺跡』　上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1983
16) 七田忠昭　『船石遺跡』　上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1983
17) 鶴田浩二・原田大介　『船石遺跡Ⅱ図録編』　上峰村文化財調査報告書第6集　上峰村教育委員会　1988
鶴田浩二・原田大介　『船石遺跡Ⅱ本文編』　上峰村文化財調査報告書第7集　上峰村教育委員会　1989
18) 昭和60、62年度、上峰村教育委員会調査、整理中
19) 原田大介　『八藤遺跡Ⅰ』　上峰町文化財調査報告書第13集　上峰町教育委員会　1997
20) 木下巧他　『姫方原遺跡』　佐賀県文化財調査報告書第33集　佐賀県教育委員会　1976
21) 木下　巧・七田忠昭　「五本谷遺跡」『二塚山』　佐賀県文化財調査報告書第46集　佐賀県教育委員会　1979
22) 石橋新次　『剣塚前方後円墳』　鳥栖市文化財調査報告書第22集　鳥栖市教育委員会　1984
23) 前出（2）
24) 松尾禎作　「目達原古墳群調査報告」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』　第9輯　佐賀県教育委員会　1950
25) 木下之治　「古代国家の形成」『佐賀県史』佐賀県　1968
26) 木下之治編　『銚子塚』　佐賀市教育委員会　1976

27) 松尾禎作　『佐賀県考古大観』　祐徳博物館　1959
28) 前出（24）
29) 前出（16）
30) 七田忠昭・高山久美子・西田和己　『下中杖遺跡』　佐賀県文化財調査報告書第54集　佐賀県教育委員会　1980
31) 高瀬哲郎他　「下石動遺跡」『下石動遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（6）　佐賀県文化財調査報告書第86集　佐賀県教育委員会　1987
32) 松尾禎作　「東脊振村辛上廃寺跡の調査」　『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第5輯　佐賀県　1936
33) 田平徳栄他　『雲仙寺跡』　東脊振村文化財調査報告書第4集　東脊振村教育委員会　1980
34) 高島忠平・柾一義　『堤土塁跡』　上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1978
35) 松尾禎作　「塔の塚廃寺址」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』　第7輯　佐賀県　1940
36) 前出（12）
原田大介　『八藤遺跡Ⅲ』　上峰町文化財調査報告書第16集　上峰町教育委員会　1999
37) 平成5、6年度、上峰町教育委員会調査、整理中
38) 米倉二郎　「中世」『上峰村史』　上峰村　1979
39) 原田大介　『坊所城跡』　上峰町文化財調査報告書第10集　上峰町教育委員会　1992

II．調査に至る経緯

上峰町では、昭和30年代までは純農村として、近世以来の水田耕作を主とした農業経営が連綿として行われてきた。しかし、戦後の激変する社会・産業の構造は、労働力の都市部への流出などを招き、旧来の農業経営による農家経済を圧迫する事態となった。この農家経済の行き詰まりを打開するためには、近代的な大型圃場と農地の集団化を併せ行い、高度の農業生産技術と大型機械の一貫作業体系の導入により、労働生産性の向上と農業経営の合理化による農家所得の増大を図る必要があった。

佐賀県では、昭和38年度より県営農業基盤整備事業の計画が策定され、昭和41年度より事業が開始された。上峰町においても、昭和42年度にモデル事業として町南部の碇地区を対象に事業が実施され、昭和46年度以降、町の中央部を東西に横断する国道34号線以南の沖積平野に広がる町南部の圃場を対象に昭和58年度まで事業が実施された。

一方、国道34号線以北の大字堤地区の耕地は、洪積世丘陵と切通川本支流の開析谷底平野からなっており、地区の１戸当たりの平均耕地面積は約0.6haと県平均を下回り、用水源には河川、溜池があてられていたが、いずれも用水確保が不十分であり、慢性的な用水不足を来していた。また、圃場は不整形で散在し、道路は狭く未整備で機械導入も困難で圃場条件は極めて悪かった。このため、昭和58年度より、堤地区を対象とした上峰北部農業基盤整備事業の実施に向けた調査計画が開始され、昭和60年度より事業が実施されるに至った。

しかし、地形的制約の上に成り立ってきた従来の耕地の集団化、道路・用排水路の整備を目的とした農業基盤整備事業の実施は、一方では土地の大規模な改変を必要とし、ひいては地下の埋蔵文化財に工事の影響を及ぼすことが予想され、今日的要求と埋蔵文化財の保護との調整という問題が文化財保護行政の大きな課題となった。

この課題の解決策として、佐賀県においては、農業基盤整備事業とこれに伴う埋蔵文化財の保護との調整について、県農林部と県教育委員会との間で「農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する確認事項」（昭和53年４月締結、昭和59年４月一部改正。）という覚書を交わし、現在この確認事項に基づき、県農林部、県教育委員会、市町村土地改良担当課、市町村教育委員会の関係機関四者による協議が行われ、事業の実施面積の調整、工事の設計変更などによる埋蔵文化財発掘調査面積の縮小など、文化財の保護に関する調整が行われてきた。

この調整は、「農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する協議会」にて実施されており、具体的には、例年以下の手続きを踏んでいる。

(1)「第１回協議会」（毎年10月中旬）

次年度の農業基盤整備事業実施計画が提示され、当該区域内の埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い、埋蔵文化財確認調査の要不要を確認する。

(2) 確認調査（10月中旬～12月上旬）

次年度の農業基盤整備事業実施計画地区内について遺構の有無・密度・内容、遺構面までの表土の深度等を把握する。

(3)「第２回協議会」（毎年12月中旬）

確認調査の結果を基に、事業計画の設計変更など本調査面積の縮小につとめ、必要最小限の部分を次年度埋蔵文化財本調査区域とする。

上峰町における上峰北部農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する協議調整は、昭和59年９月に、県農業基盤整備事業担当部局から県教育委員会に昭和60年度農業基盤整備事業施工計画が提出され、国道34号線以北、JR長崎本線以南の耕地について農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて協議をもったことに始まる。以後、毎年この協議を経て農業基盤整備事業と埋蔵文化財の保護との調整を行っている。

今回報告する堤六本谷遺跡・屋形原遺跡を含む地域について協議がもたれたのは、屋形原遺跡が昭和63年度、堤六本谷遺跡が平成元年度のことであった。

平成６年度屋形原遺跡

昭和63年10月18日、「昭和64年度農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第１回協議会」が開催された。その席上、昭和64年度農業基盤整備事業として、大字堤屋形原地区一帯の事業計画が提示された。当時屋形原遺跡は集落が立地する段丘高位面のみが埋蔵文化財包蔵地として周知されていたが、事業計画区域は、県道富士・中原停車場線以西の屋形原集落南部の段丘高位面から低位面にかけての水田一帯を包含しており、事業計画区域内について埋蔵文化財の確認調査を実施することとなった。

確認調査は、農業基盤整備事業施工予定地内の田面、耕地約３haを対象に、稲刈り終了をまって実施した。調査は、２m×２mの試掘溝を約20m間隔で設定し、実施した。その結果、試掘溝10カ所による調査で弥生時代や奈良時代の住居址が検出され、約7,500㎡におよぶ遺跡の広がりが確認された。前述のようにそれまでは、現屋形原集落部分のみが周知の埋蔵文化財包蔵地として県遺跡地図に登録されていたが、周知の埋蔵文化財包蔵地外であった南部の田面下にも遺構が検出され、段丘全体が屋形原遺跡として登録されることとなった。

昭和63年12月20日、確認調査の結果に基づいて「第２回協議会」が開催された。本席上では、確認調査で新に検出された約7,500㎡に及ぶ遺跡の取扱について協議をもったが、農業基盤整備事業の実施設計が終了しておらず、設計変更等による調査面積の縮小など文化財の保護に関する調整は果たせなかった。その後個別の協議を重ねたものの、最終的に、事業予定地区内の屋形原遺跡7,500㎡全体について、昭和64年度（平成元年度）事業として、事前の記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。

しかし、平成元年４月の時点で、農業基盤整備事業について県農林部と地元農家との調整がつかず、屋形原地区の農業基盤整備事業そのものが先送りとなったため、事業計画が具体化した時点で、工事の設計変更等も含めて再度協議を行うこととなった。その後、上峰北部農業基盤整備事業は平成元年度から平成５年度まで大字堤字迎原地区一帯について事業が実施された。

屋形原地区の農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財の取扱いが再度協議の場に上がったのは、平成５年10月13日に開催された「平成６年度農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第１回協議会」であった。ここで、平成６年度農業基盤整備事業として、屋形原遺跡や堤六本谷遺跡が所在する県道鳥栖川久保佐賀線以南の大字堤地区のうち字一本柳、一本松、二本松地区の5.8haについての事業が提示された。屋形原遺跡については、協議の結果、7,500㎡に及ぶ遺跡の範囲のうち5,000㎡について工事の影響が及ぶことが確認され、さらにその5,000㎡のうちの3,250㎡について平成6年度の佐賀県農林部の委託事業として埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。

平成２年度堤六本谷遺跡

平成元年10月17日、「平成２年農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第１回協議会」が開催された。

その席上、平成２年度農業基盤整備事業として、堤地区北部一帯の事業計画が提示された。事業計画区域は、西は県道富士・中原停車場線以東の堤集落北部一帯から、東は中原町との境界までの広大な区域にわたり、当時周知の埋蔵文化財包蔵地外であった字迎原地区の八藤丘陵も含まれていた。協議の結果、堤地区一帯におよぶ事業計画区域内について埋蔵文化財の確認調査を実施することとなった。

確認調査は、農業基盤整備事業施工予定地内の町道堤・船石線の北部一帯の田面、耕地を対象に、稲刈り終了をまって実施した。調査は、２m×２mの試掘溝を約20m間隔で設定し、実施した。その結果、試掘溝136カ所による調査で約40,000㎡におよぶ遺跡の広がりを確認した。確認調査の結果、鎮西山山麓から県道佐賀川久保鳥栖線の南へ舌状に延び、高位段丘面には青柳古墳群が立地する青柳丘陵の先端部において約20,000㎡に及ぶ弥生時代、奈良時代の遺跡の広がりが確認され、堤六本谷遺跡として、新たに周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されることなった。

平成元年12月26日、確認調査の結果に基づいて「第2回協議会」が開催された。本席上では、確認調査で検出された約40,000㎡に及ぶ遺跡の取扱について協議が行われ、事業の設計変更による調査面積の縮小など文化財の保護に関する調整を進めていった。その後個別協議を繰り返し、最終的に、堤集落北方に位置し堤土塁跡の後背地にあたる堤六本谷遺跡のうち、水田基盤造成工事、水路掘削工事などで地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲2,800㎡について、事前の記録保存を目的とし、佐賀県農林部の委託事業として平成2年度の佐賀県農林部の委託事業として埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。

平成６年度堤六本谷遺跡

平成３年度から平成５年度までは、農業基盤整備事業は、大字堤字迎原地区を対象に事業が実施され、堤六本谷遺跡が所在する大字堤字六本谷及び一本柳地区を対象とした農業基盤整備事業について、文化財保護に関する協議がもたれたのは、平成５年10月13日に開催された「平成６年度農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第１回協議会」の席上であった。ここで、平成６年度農業基盤整備事業として、屋形原遺跡や堤六本谷遺跡が所在する県道鳥栖川久保佐賀線以南の大字堤地区のうち字一本柳、一本松、二本松地区の5.8haについての事業が提示された。堤六本谷遺跡については、協議の結果、40,000㎡に及ぶ遺跡の範囲のうち2,000㎡について工事の影響が及ぶことが確認され、平成6年度の佐賀県農林部の委託事業として埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。

Ⅲ．平成２年度堤六本谷遺跡４～６区の調査

１．堤六本谷遺跡と調査区の概要（Fig. １、３・PL. １～６）

堤六本谷遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本柳、六本谷の「青柳丘陵」と呼称する洪積世段丘の先端部（標高25m～35m付近）に位置している。青柳丘陵は、鎮西山南麓から派生し、九州自動車道を横断し、さらに県道佐賀川久保鳥栖線の南へと舌状に延びる丘陵となっており、東方の八藤丘陵、西方の屋形原丘陵とは、それぞれ、東は切通川支流の大鳥居川、西は切通川本流によって分たれている。

本丘陵上には、県道以南の高位段丘（標高30m～45m付近）上に小円墳が点在しており、青柳古墳群の名称で周知の埋蔵文化財包蔵地として知られていたものの、高位段丘面の周辺に広がる低位段丘上位面については、これまで埋蔵文化財の所在の有無については不明であった。

しかし、農業基盤整備事業施工予定地区を対象とし、平成元年度に実施した埋蔵文化財確認調査によって、この低位段丘部分において弥生時代、奈良時代、近世の遺構・遺物が検出され、全体で20,000㎡ほどの集落遺跡が所在していることが判明し、堤六本谷遺跡の名称で新たに周知の埋蔵文化財包蔵地として取り扱うこととなった。また同時に、本遺跡の南方約200m付近には、東の八藤丘陵と西の二塚山丘陵の間の谷部を東西に遮断する形で堤土塁跡が築かれており、遺跡がこの後背地にあたることから、堤土塁の築造目的解明につながるような遺構の存在も期待された。

遺跡が立地する大字堤字一本柳、六本谷地区の青柳丘陵先端部にあたる低位段丘上位面は、前述のように高位段丘面の周辺に発達しているが、小水路によって開析された小谷によりいくつかの支丘に分かれヤツデの葉状を呈している。現在は、主に水田として利用されている。

堤六本谷遺跡のうち、平成２年度の埋蔵文化財発掘調査の対象となった区域は、大字堤字六本谷地区、現堤集落北方に延びる丘陵の南端及び東側の低位段丘面で、農業基盤整備事業の施工によって削平が予想される2,800㎡部分について、４～６区の調査区に分けて調査を実施した。各調査区の位置及び面積は、最も南に位置する調査区４区が堤集落の北方約150m、切通川の東方約200m付近標高24m部分の510㎡、堤土塁跡のほぼ真北50m付近にあたる。５区及び６区は、青柳丘陵東斜面の標高30m付近に位置し、大鳥居川が流れる谷を挟んで、東方約100mには八藤遺跡が立地する八藤丘陵が南北に延びている。今回の農業基盤整備事業によって設置が予定されている南北に走る農道の西側一帯の1,420㎡を５区、農道の東側一帯の870㎡を６区として調査を実施した。

今回の調査では、４区から６区の全域にまたがる部分に磁北を基準とする10m×10mグリッドを設定した。グリッドは、４区が、南北列北から１～４の４列、東西列東からA～Eの５列を、５区・６区には連続するグリッドを設定し、５区が、南北列北から４～12の９列、東西列東からE～Mの９列を、６区が、南北列北から１～５の５列、東西列東からA～Eの５列を、それぞれ設定し調査を実施した。

調査区域の土層は、後世の耕作などによって各時代の遺物包含層は失われ、耕作土あるいは水田底土の直下が洪積世丘陵を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

堤六本谷遺跡の今回の調査では、４区で、近世の溝跡や土壙などが検出された。５区で、奈良時代の土壙、中近世の土壙などが検出された。６区で、奈良時代の住居址や土壙、中世の土壙、溝跡などが検出されている。

Fig. 3　堤六本谷遺跡・屋形原遺跡周辺地形図及び調査区位置図（1/5,000）

２．調査の経過

平成２年度の佐賀県営農業基盤整備事業に伴う発掘調査は、圃場基盤造成工事により面的に削平が予定される部分2,800㎡を便宜的に４区～６区の３区域に分割し、実施した。調査は平成２年６月に着手し、翌平成３年３月７日まで作業を行った。以下簡略に調査経過を記す。

堤六本谷遺跡４区の調査経過

６月21日～25日、堤六本谷遺跡４区について、重機による表土剥ぎを実施した。

その後、発掘作業は、同時に実施していた八藤丘陵における八藤遺跡の埋蔵文化財調査に主力を注ぎ、同遺跡の調査が一段落した８月27日より再開した。

８月27日、調査区に測量杭打設後、発掘機材の搬入など準備を行った。

８月29日より、作業員の人力による遺構検出作業を開始。以後、調査区に設定した10m×10mのグリッドごとに遺構検出作業を行い、検出された遺構については逐次掘下げを行い、９月12日に遺構の掘下げ作業を終了した。

９月４日から、掘下げが終了した遺構から写真撮影を行い、実測作業に着手。

12月12日、気球写真による調査区全体の写真撮影を行い全ての作業を終了した。

堤六本谷遺跡５・６区の調査経過

12月７日、５区の南部より重機による表土剥ぎを開始、12月19日、６区までの表土剥ぎ作業を終了した。

12月28日より平成３年１月６日まで作業休止。

平成３年１月７日、５区の南部より作業員による遺構検出、掘下げ作業を開始。４区と同様手順での作業を５区から６区へと調査を進めていった。

１月９日、10日の両日、調査区に測量杭打設。

２月19日より、委託した遺構実測作業開始。３月１日、実測作業終了。

３月２日、出土遺物の取上げ作業を実施。

３月５日、６日調査区の全体清掃を行ない、７日に気球写真による調査区全体の写真撮影を行い全ての作業を終了した。

その後、出土遺物、記録類を文化財整理事務所へ移し、年度末の３月26日まで、遺物の水洗い、実測図、写真類の整理などを同事務所にて実施し、平成２年度の作業を終了した。

３．堤六本谷遺跡４区の調査

(1)遺構（Fig. ４～５・PL. １、９）

４区の調査で検出された遺構は、近世の所産と考えられる溝跡６条・土壙状の遺構２基であった。

溝跡（Fig. ４・PL. １、９）

検出された６条の溝跡は、いずれも井堰と考えられる施設などもなく、素掘りのU字溝で、出土遺物、覆土の状態などから全て近世以降の水田耕作に伴い開削された用水路などの遺構と考えられる。SD－401、SD－402、SD－405からは、縄文式土器片、弥生式土器片、土師器片が出土しているが、いずれも他からの流れ込みと考え

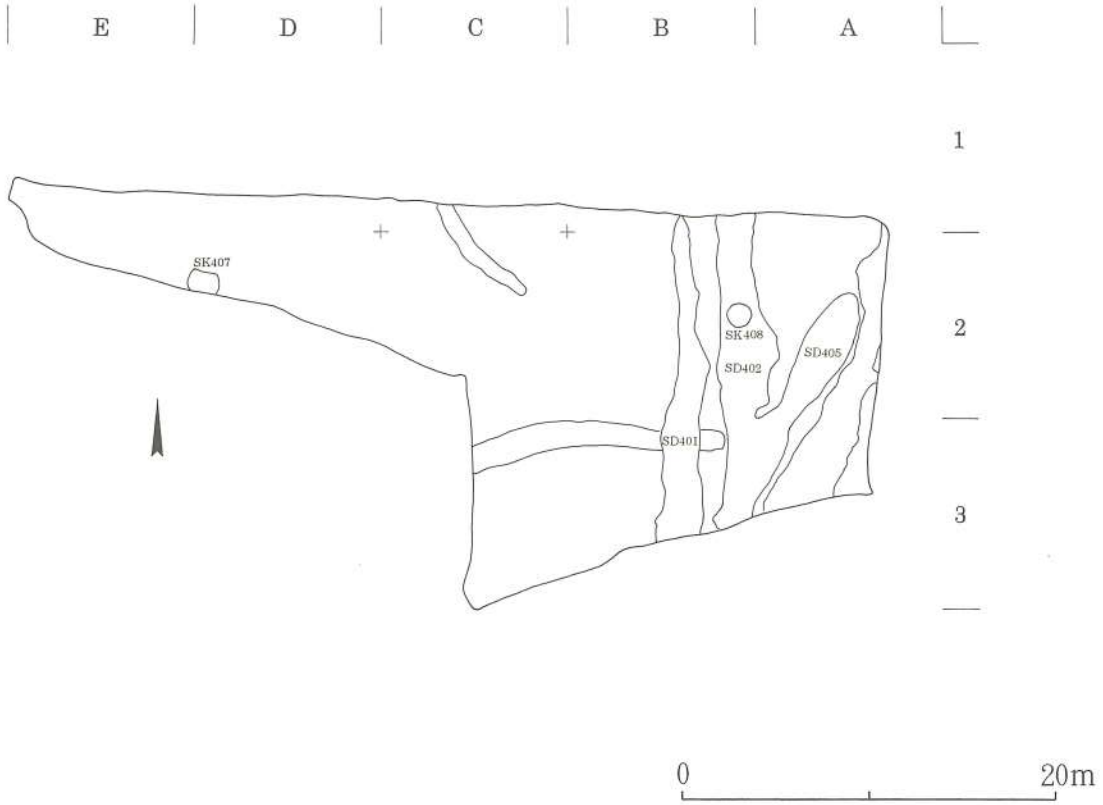


Fig. 4　堤六本谷遺跡４区 遺構配置図（1/400）

られる。

土壙（Fig. 5・PL. 9）

検出された2の土壙状の遺構についても、近世以降の所産と考えられる。遺物もなくここでは形態、規模を報告するにとどめたい。

SK-407は、長辺1.68m、幅は調査区内で1.1mのやや不整方形を呈す、深さ20cmの浅い土壙。

SK-408は、長径1.58m、短径約1.2mの不整円形を呈す、深さ41cm。

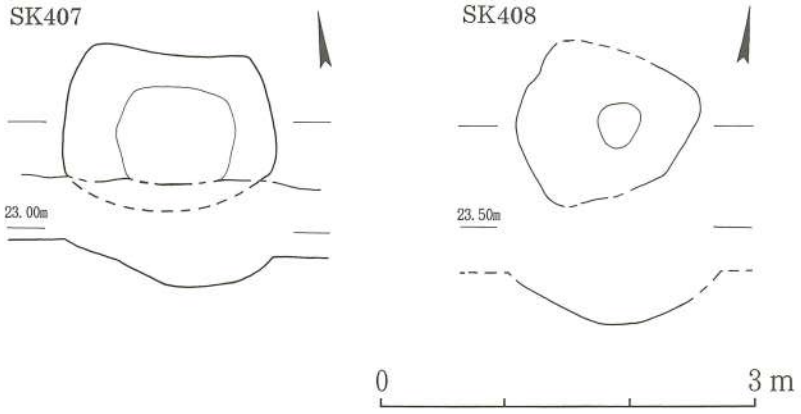


Fig. 5　堤六本谷遺跡4区 土壙実測図　SK-407・SK-408（1/60）

(2) 遺物 (Fig. 6)

４区の調査で出土した遺物は、近世の遺物を除くと少量で、前述のように、いずれも近世以降の耕作に伴う用水路と考えられる溝跡から出土しており、他からの流れ込みと考えられ、そのほとんどが図示に耐えないような小片であった。ここでは、図示できる遺物４点について報告する。

１、２は、SD－401出土。１は、弥生式土器の甕で、口縁部がやや外反しながら逆L字型に開き口唇部がやや肥厚する。２は、土師器の坏。平底の底部に直線的に大きく開く短い口縁がつく。３は、須恵器の高台坏。小ぶりで丸みを帯びた腰の体部をもつ。SD－402出土。４は、縄文式土器。後期の粗製深鉢の口縁部で、外面に横位の条痕が施されている。SD－405出土。

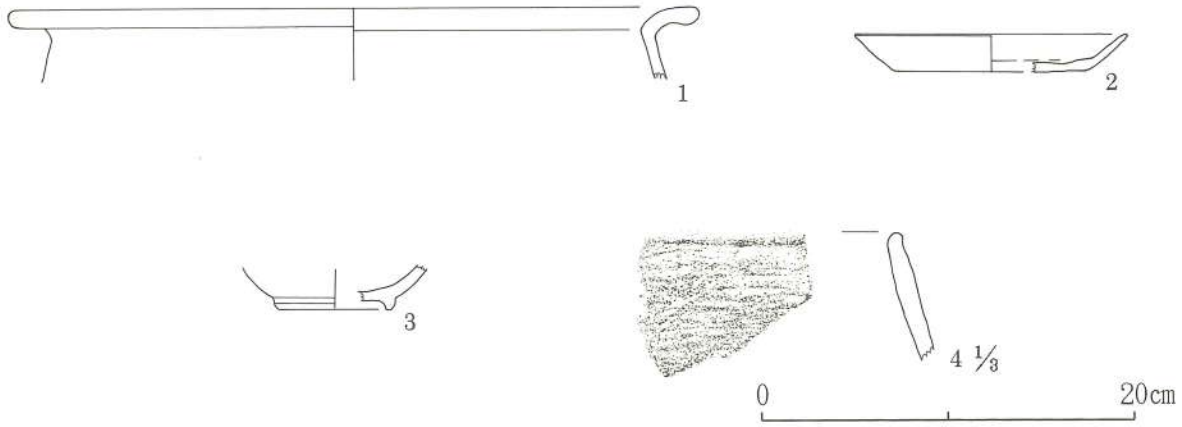


Fig. 6　堤六本谷遺跡4区 出土遺物実測図 (1/4)

4. 堤六本谷遺跡５区の調査

(1) 遺構 (Fig. 7～10・PL. 2、3・Tab. 1)

５区の調査で遺構番号を付して調査した遺構は、土壙30基であった。

土壙 (Fig. 8～10・PL. 3・Tab. 1)

５区の調査で土壙として取り扱った貯蔵穴などの遺構は30基であった。この中で、出土遺物などから時期が特定できる土壙は、弥生時代中期のSK－512、奈良時代後半の土師器や須恵器をもつSK－502、SK－515、中世の土鍋などを出土したSK－507、SK－508、SK－509、SK－513等がある。しかし、その他の土壙については遺物をもたないものもあるが、出土遺物をもちながらSK－532、SK－533（いずれも遺物取上げの際の遺構番号）などは調査員のミスにより時期を特定できなかった[註]。

註)「凡例」にも記したが、５区で検出された遺構の一部について、調査員のミスによって、遺構番号を記した記録を紛失し、調査時に現地で各遺構に付した遺構番号と実際の遺構との照合ができない事態となった。SK－502～515については、実際の遺構番号と出土遺物は一致するが、SK－551以降の以降番号付した土壙については、仮の遺構番号で報告することをお断わりしたい。

Tab. 1　堤六本谷遺跡５区 出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規模（上段：上面、下段：底面、単位：m・㎡）				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-502	不整形	4.58 3.96	3.20 3.00	0.59	3.9		縄文式土器・須恵器坏・土師器甕	
SK-503	不整形	3.06 2.93	2.42 2.30	0.21	3.1			
SK-504	不整円形	2.37 2.22	19.6 1.83	0.59	0.5			
SK-505	隅丸長方形	2.34 2.24	0.70 0.54	0.31	1.1			
SK-506	不整方形	1.70 1.59	0.79 0.58	0.41	1.3			
SK-507	不整形	1.60 1.50	1.00 0.86	0.13	0.9		中世土器土鍋・陶器皿	
SK-508	不整円形	1.22 0.98	1.19 0.62	0.53	0.5		中世土器土鍋	
SK-509	不整方形	1.54 1.31	1.15 0.96	0.47	1.1		中世土器土鍋	
SK-510	不整方形	(1.2) 1.07	1.07 0.54	0.34	0.5			
SK-511	不整形	2.58 1.57	1.68 1.28	0.38	1.6			
SK-512	不整円形	2.08 1.54	1.94 1.80	0.69	2.5		弥生式土器甕・壺	
SK-513	不整方形	1.94 1.75	1.52 1.34	0.27	2.2		中世土器鉢	
SK-514	不整形	1.91 1.75	1.41 1.15	0.56	1.7			
SK-515	不整 隅丸長方形	1.92 1.80	0.93 0.49	0.36	0.7		弥生式土器甕・壺 土師器甕・坏 須恵器甕・坏・蓋	
SK-551	不整形	2.06 1.75.	1.15 0.75	0.23	1.3			
SK-552	不整方形	3.30 2.98	1.95 2.55	0.35	6.7			
SK-553	楕円形?	(1.7) (1.5)	1.29 1.15	0.19	(1.5)			
SK-554	不整楕円形?	1.90 1.63	1.33 1.08	0.26	1.5			
SK-555	不整楕円形?	1.66 1.42	1.132 0.72	0.62	0.9			
SK-556	不整方形	1.22 1.10	0.74 0.63	0.16	0.6			
SK-557	不整方形	2.10 1.85	1.53 1.25	0.53	2.0			
SK-558	不整方形	(1.8) (1.3)	1.40 1.03	0.32	(1.3)			
SK-559	不整円形	2.05 1.43	1.97 1.28	0.93	1.5			
SK-567	不整円形	1.10 0.74	1.00 0.56	0.39	0.4			
SK-568	不整方形	2.10 1.84	2.06 1.78	0.40	3.0			
SK-569	隅丸方形	1.72 1.44	1.63 1.42	0.45	1.7			
SK-570	円形	0.96 0.58	0.91 0.52	0.54	0.2			
SK-571	不整円形	1.20 1.00	1.06 0.80	0.33	0.6			
SK-572	不整方形	0.93 0.68	0.68 0.48	0.20	0.3			
SK-573	不整形	1.64 1.39	1.16 0.98	0.17	0.9			

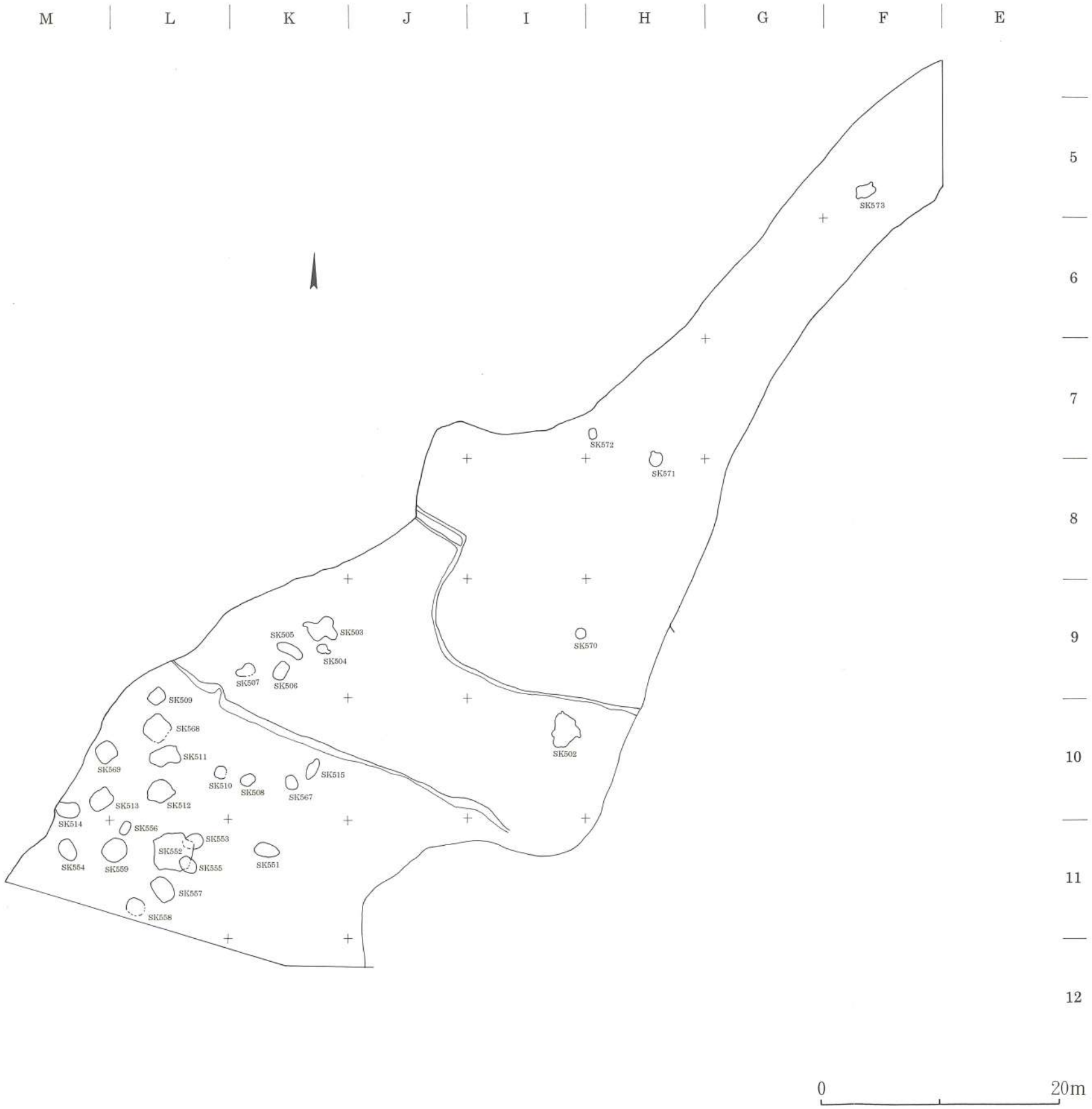


Fig. 7　堤六本谷遺跡5区 遺構配置図（1/400）

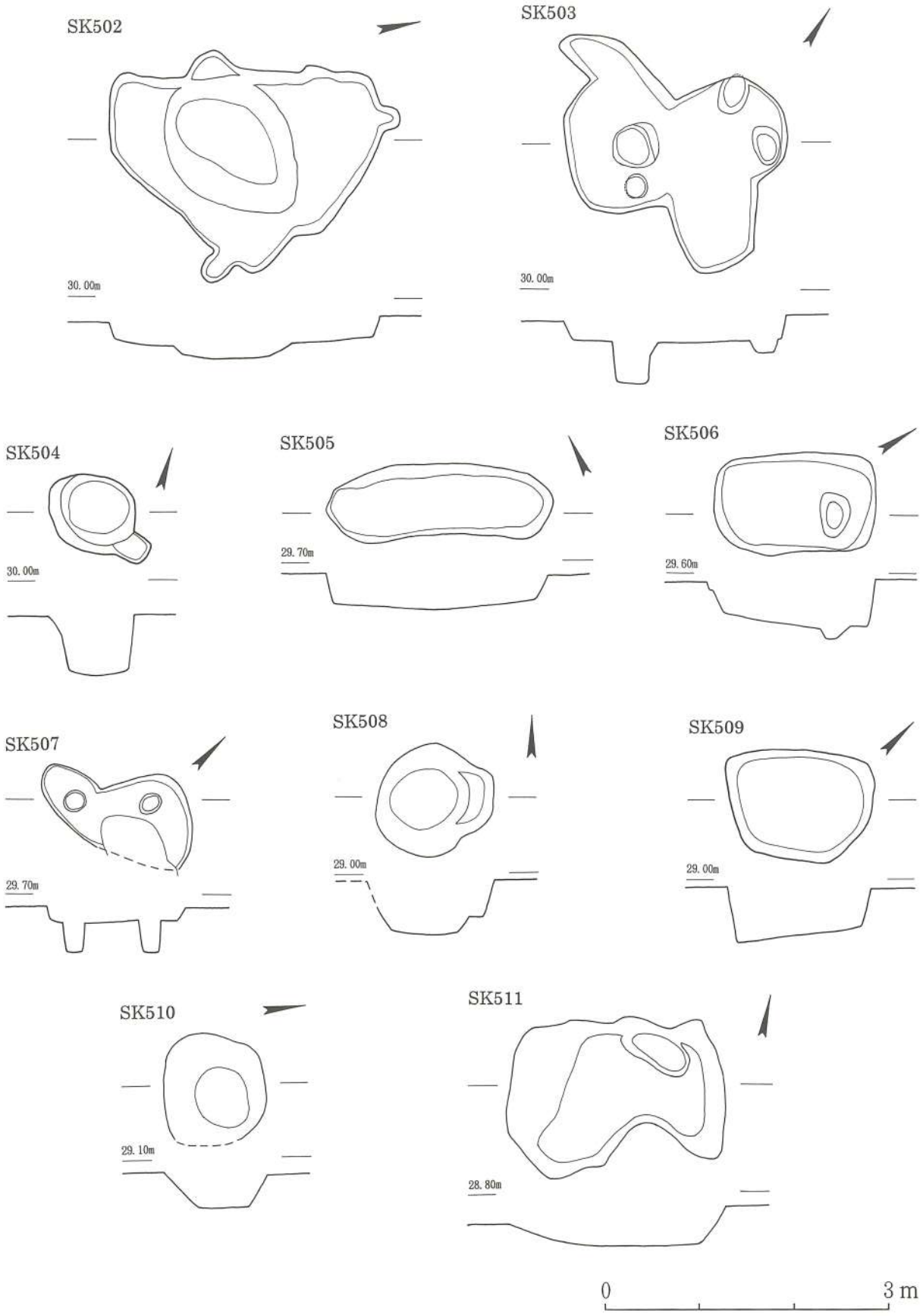


Fig. 8　堤六本谷遺跡5区 土壙実測図（1）SK-502～SK-511（1/60）

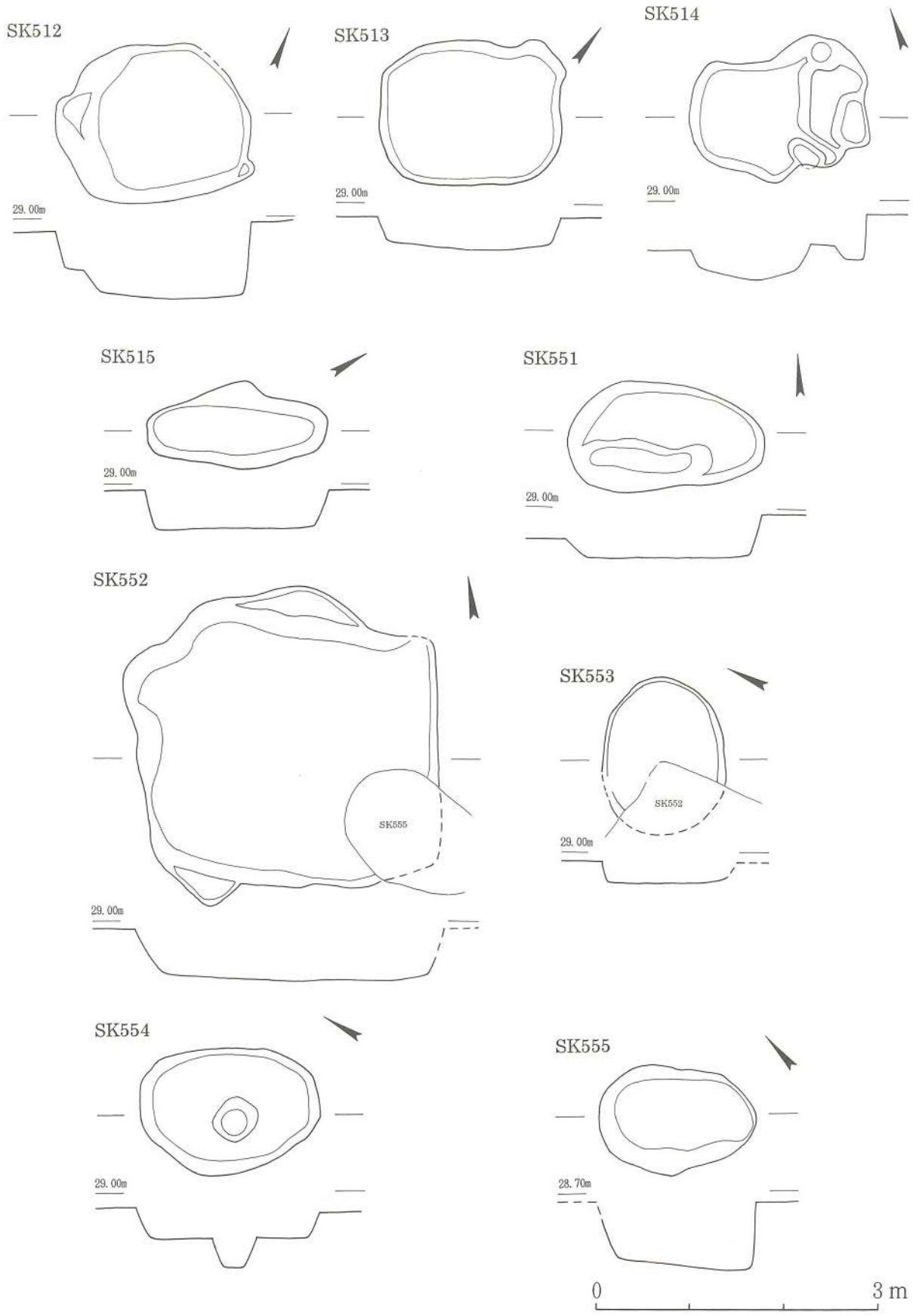


Fig. 9　堤六本谷遺跡5区 土壙実測図（2）SK-512～SK-515・SK-551～SK-555（1/60）

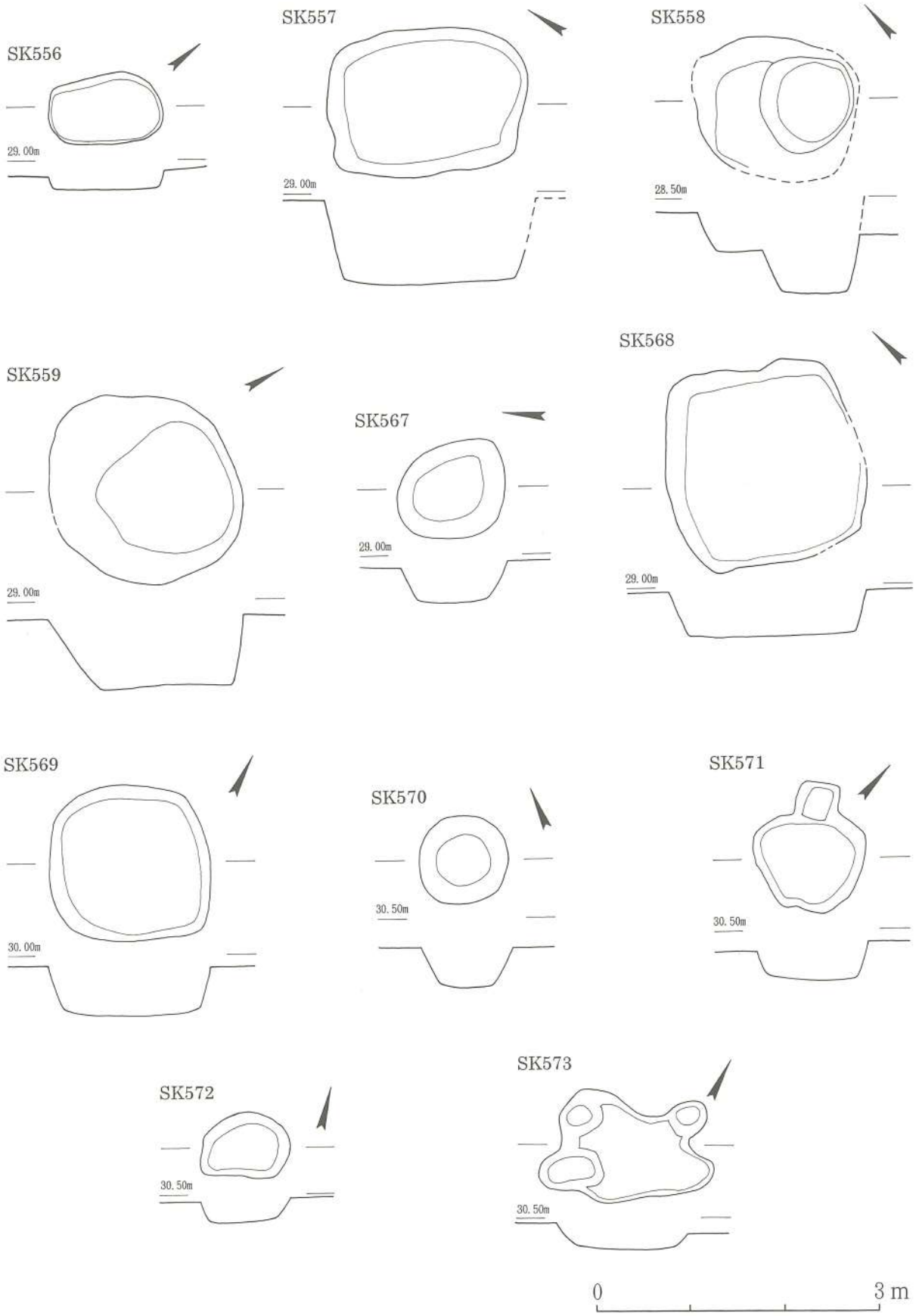


Fig. 10　堤六本谷遺跡5区 土壙実測図（3）SK-556～SK-559・SK-567～SK-573（1/60）

(2) 遺物 (Fig. 11～14・PL. 10、11)

５区の調査では、各土壙から縄文時代から近世までの遺物が出土している。ここでは、出土した遺物のうち近世の遺物を除く土器類・土製品について代表的なものを遺構ごとに報告したい。なお、先の「(1) 遺構」の項では一部遺構番号が不明となった土壙についてSK-551以降の仮の遺構番号で報告したが、出土遺物については、一遺構出土の一括遺物ということから、本項では調査当時の遺構番号のまま報告させていただきたい。

SK-502出土土器 (Fig. 11・PL. 10)

１は、焼成不良の須恵器と思われる坏。底部周辺は灰色を呈すが、体部は明赤褐色を呈す。平底の底部に直線的に開きながら立ち上がる体部をもつ。

２、４、５は、土師器坏。２は、平底の底部にやや外反しながら開く体部をもち、口縁部が肥厚する。４は、平底の底部に外反しながら開く薄い体部をもち、体部外面にはロクロ目を明瞭に残す。５は、やや大振りの平底の坏で、体部は薄く直線的に開きながら立ち上がる。体部外面にはロクロ目を明瞭に残す。

３は須恵器坏。平底の底部に直線的に開きながら立ち上がる体部をもつ。

６は、須恵器皿。平底の底部に短い口縁が立ち上がる。７は須恵器高坏の坏部。体部と口縁の境界は「く」の字形に屈折し、短い口縁が外反しながら開く。

８、９は、土師器甕。８は、丸味を帯びた胴部に外反しながら開く口縁がつく。胴部内面ナデ、外面ハケ目。９は、口縁は逆Ｌ字型に開きさらに端部が小さく内湾しゆるいS字型を呈す。胴部内面上部はヘラケズリ、外面縦位のハケ目。10は、土師器鉢？内湾しながら立ち上がる体部に断面三角形につままれた口縁がつく。内面ヘラケズリ、外面ナデ。

11は、縄文式土器。後期の粗製深鉢の口縁。口唇部は肥厚し、外面に横位の条痕が施されている。

SK-507出土土器 (Fig. 11)

12は、中世土器の擂鉢。直線的に開く体部に肥厚した口縁がつく。内面横位のハケ目、外面ナデ、口縁上面にもハケ目を施す。遺存部の一部に擂り目が残る。13は、見込みに鉄絵の文様をもつ唐津系の陶器皿。赤褐色の緻密な胎土で、高台回りを除き透明釉が施釉されている。

SK-508出土土器 (Fig. 11)

14は、中世土器の土鍋。浅い丸底の底部と直線的に開く体部の境界は「く」の字形に屈折し、口縁は粘土帯を積み上げ玉縁状の口縁を作り出している。内面は丁寧なナデ、体部外面は粗いナデ、底面に粗いハケ目。

SK-509出土土器 (Fig. 12)

15は、中世土器の擂鉢。直線的に開く体部に肥厚した口縁がつく。内面横位のハケ目、外面ナデ。遺存部の一部に擂り目が残る。16は、中世瓦質土器の鉢。内湾しながら立ち上がる口縁部で、口縁下部に箍状の断面半円形の凸帯が2条めぐる。口縁と凸帯の間には花菱の陰花文が押捺されている。内面横位のハケ目。17は、上面観楕円形を呈す手捏ねの中世土器。楕円形の底部の周囲に直立する粘土板を貼り付け体部を成形している。体部内面横位、外面縦位のハケ目。

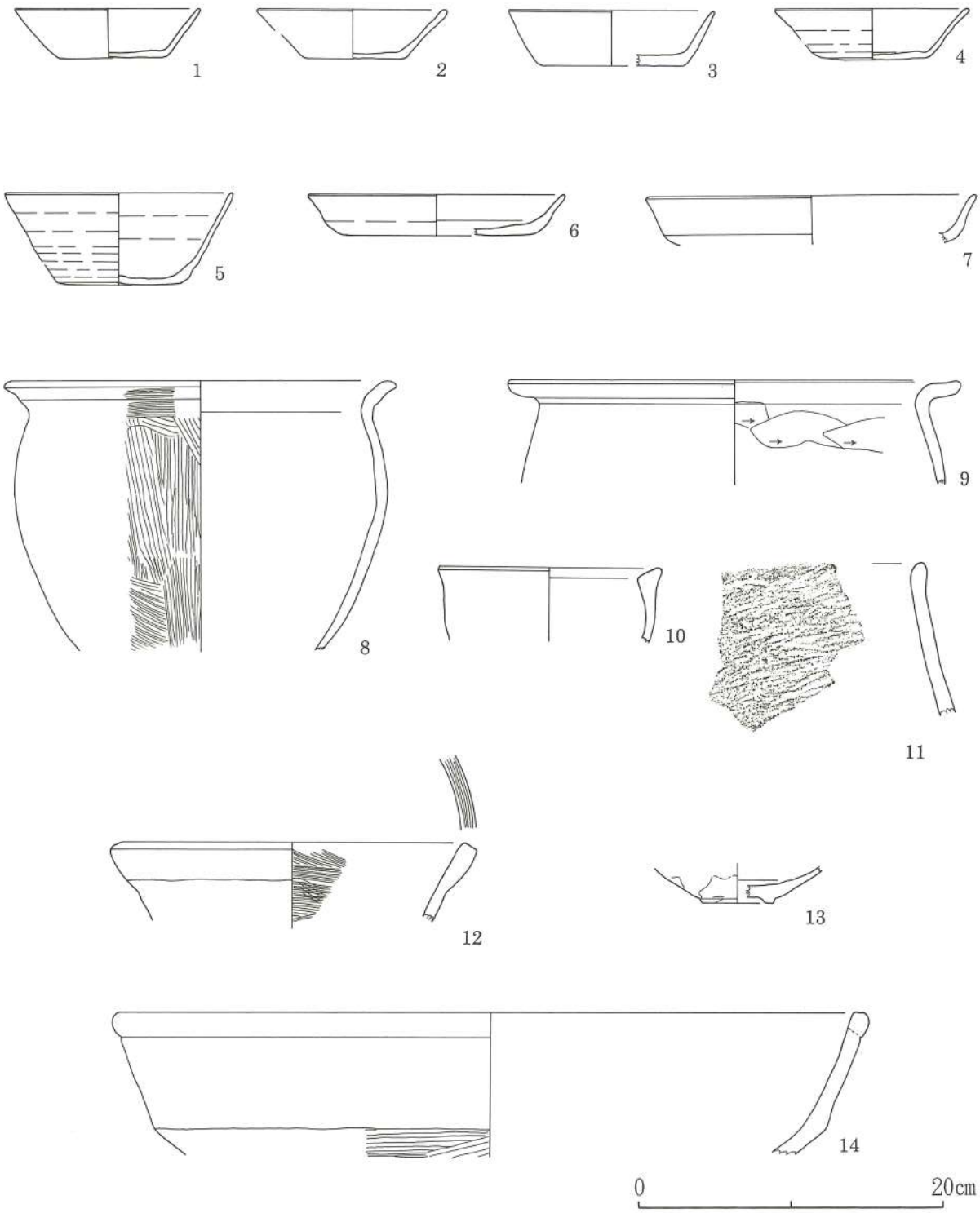


Fig. 11　堤六本谷遺跡5区 出土遺物実測図（1）（1/4）

SK-512出土土器（Fig. 12）

18、19は、弥生式土器。18は、逆L字型口縁の甕。内面ナデ、外面ハケ目。19は、壺の口縁部。朝顔状にゆるく開き、口縁内側が短く張り出し鈍い鋤先状を呈す。

SK-515出土土器（Fig. 12～14・PL. 10、11）

21、22は、弥生式土器。21は、甕。肩が張った胴部に外反しながら開く短い口縁がつく。口縁内面には二重口縁状の段をもつ。22は、鋤形口縁をもつ大型の壺。遺存部は内外面ともに赤色塗彩されている。

23～33は、土師器の甕。23は、長胴甕と思われ、頸部が緩やかにくびれ、口縁は外反しながら大きく開く。内面縦位のヘラケズリ、外面縦位のハケ目。24は、胴部中位に最大径をもち、頸部が分厚く肥厚し短く外反する小さな口縁がつく。内面ヘラケズリ外面ナデ。25は、頸部が「く」の字形にくびれ、口縁は直線的に開く。頸部内面に横位のハケ目、胴部は内面縦位のヘラケズリ、外面縦位のハケ目。26は、頸部が緩やかにくびれ、口縁は外反しながら大きく開く。口唇端部は折り返され玉縁状を呈す。内面縦位のヘラケズリ、外面ナデ。27は、球形に近い胴部の甕と思われ、頸部は「く」の字形にくびれ、短く外反する小さな口縁がつく。内面ヘラケズリ、外面ナデ。28～31はいずれも小型の甕で、頸部はほとんどくびれをもたず「く」の字形に屈折し開く短い口縁がつく。28は、内面横位のハケ目、外面ナデ。29、31は、内外面ともにナデ。30は、内面ヘラケズリ、外面ナデ。32は、土師器の壺。肩に張りをもつ胴部が頸部ですぼまり外反しながら開く短い口縁がつく。頸部内面にはヘラ状工具の先端を連続押圧した工具痕を残す。内外面ともにナデ。33は土師器の壺あるいは甕の胴部と思われる破片。遺存部外面に「藥」のヘラ描き文字が見える。

34は、土師器の鉢。浅い体部は内湾しながら立ち上がり、分厚く肥厚した口縁の端部が外に小さく玉縁状につまみ出されている。内面ヘラケズリ、外面粗いナデ。

35は、土師器の甕または甑。胴部はやや張りをもち、頸部は「く」の字形に屈折し直線的に開く短い口縁がつく。胴部の最大径部分に先端が上方に屈折した把手がつく。内外面ともに粗いナデ。

36～47は、土師器または土師質の坏、皿類。36は、浅い丸底の皿。底部と体部の境界は「く」の字形に屈折し、体部は外反しながら開き口縁に至る。37は、皿。内湾しながら立ち上がる体部に肥厚し小さく外反する口縁がつく。38、39は、平底の皿。38は、体部が直線的に開き口縁に至る。底面はヘラ切りの後粗いナデ。39は、体部は内湾しながら開く。底面は丁寧にナデられ、中央に「藥」のヘラ描き文字をもつ。40は、小振りの坏。体部は直線的に立ち上がり口縁が小さく外反する。41は、丸底気味の底部の坏。体部は直線的に開き口唇端部は小さく鋭く外反する。底面は丁寧なナデ。42は、坏。厚手の体部が直線的に開き口唇端部は小さく外反する。43は、高坏の坏部。体部は腰が張り、内湾しながら口縁に至る。44は、分厚い作りの平底の坏。体部は直線的に開き、口縁が小さく外反する。底面はナデ。45、皿。45は、体部が直線的に開き口唇端部は小さくつままれ玉縁状を呈す。47は、体部が直線的に開き口縁部は小さく外反する。46は、中世のかわらけ。

48～51は、須恵器坏。48は、やや丸底気味の底部をもつ坏。体部は外反しながら立ち上がり口縁に至る。底面はナデ。49～51は、高台坏。49は、底部外周よりやや内側に鈍く「ハ」の字形に開く低い高台がめぐる。体部は直線的に開き口縁がやや外反する。50は、底部外周に「ハ」の字形に開く低い高台がめぐる。体部は腰が張りやや外反しながら口縁に至る。51は、底部外周に「ハ」の字形に開く高台がめぐる。体部は腰に張りがなく直線的に開き口縁に至る。

52、53は須恵器の坏蓋。52は、天井部が扁平で、口縁端部は下方に小さくつまみ出されている。扁平な擬宝珠状のつまみをもつ。天井部外面はナデ。53は、体部がやや深めの蓋で、口縁端部は下方に丸くつまみ出されている。天井部外面はナデられているが、一部に回転ヘラ切り痕を残す。口縁の一部は焼成時に大きく歪み、つまみは坏部との接合部分から失われている。

54は、須恵器高杯の坏部。体部は浅く、口縁は上方に「く」の字形に屈折し、短く外字反しながら開く。55は、須恵器甕。口縁部は外反しながら開き、口唇端部は上方につまみ出されている。口縁外面に斜位のハケ目。

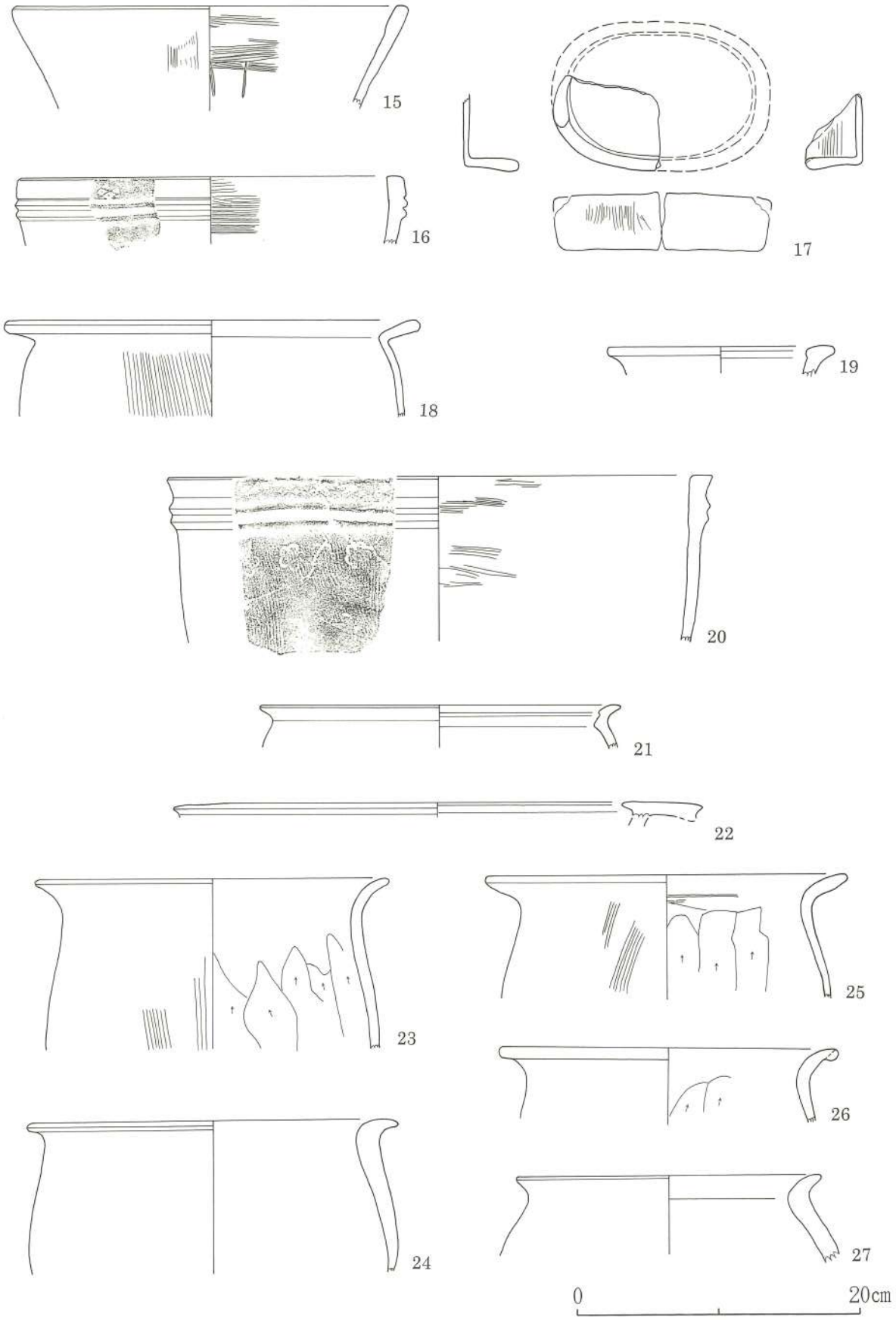


Fig. 12　堤六本谷遺跡5区 出土遺物実測図（2）（1/4）

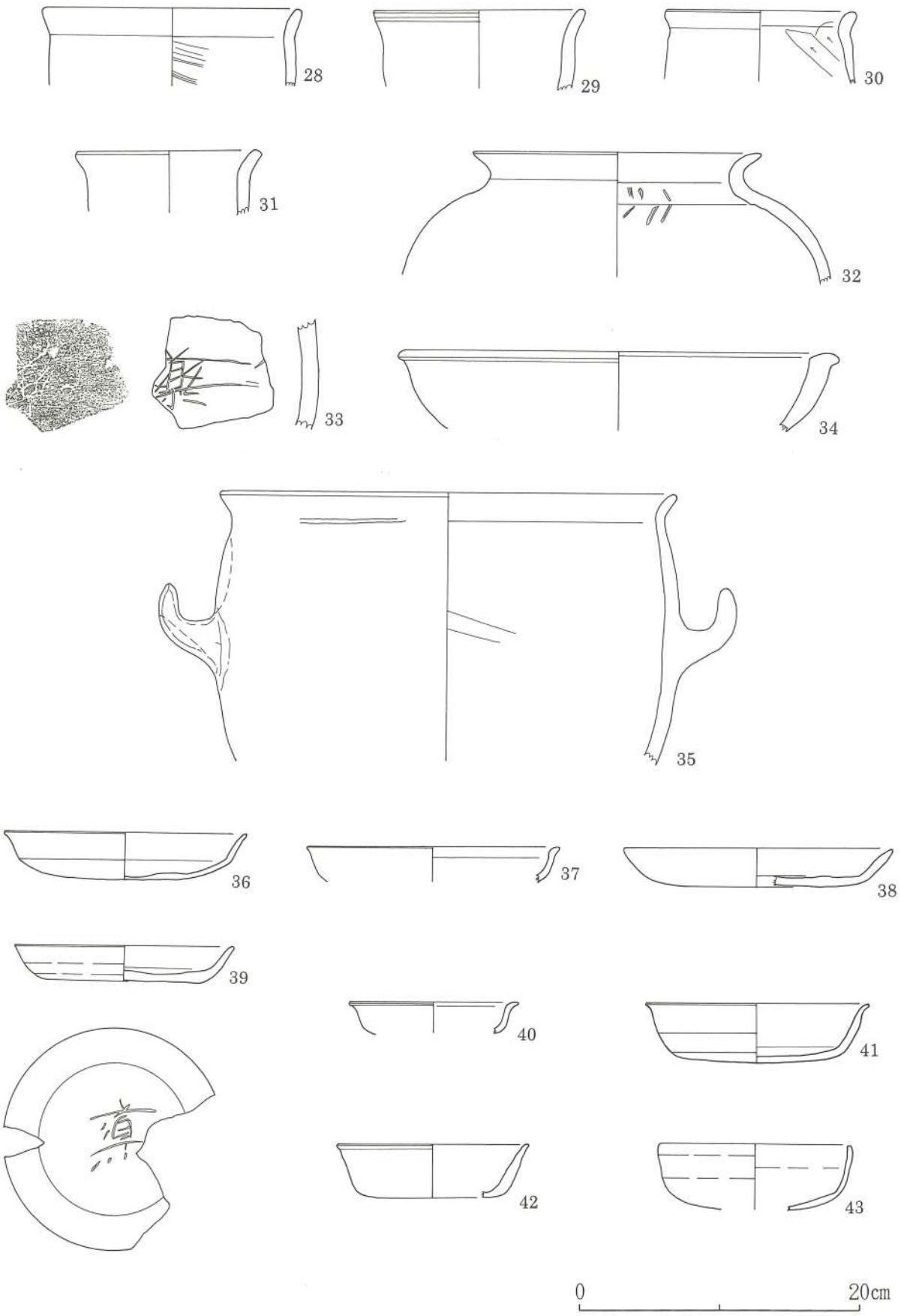


Fig. 13　堤六本谷遺跡5区 出土遺物実測図 (3) (1/4)

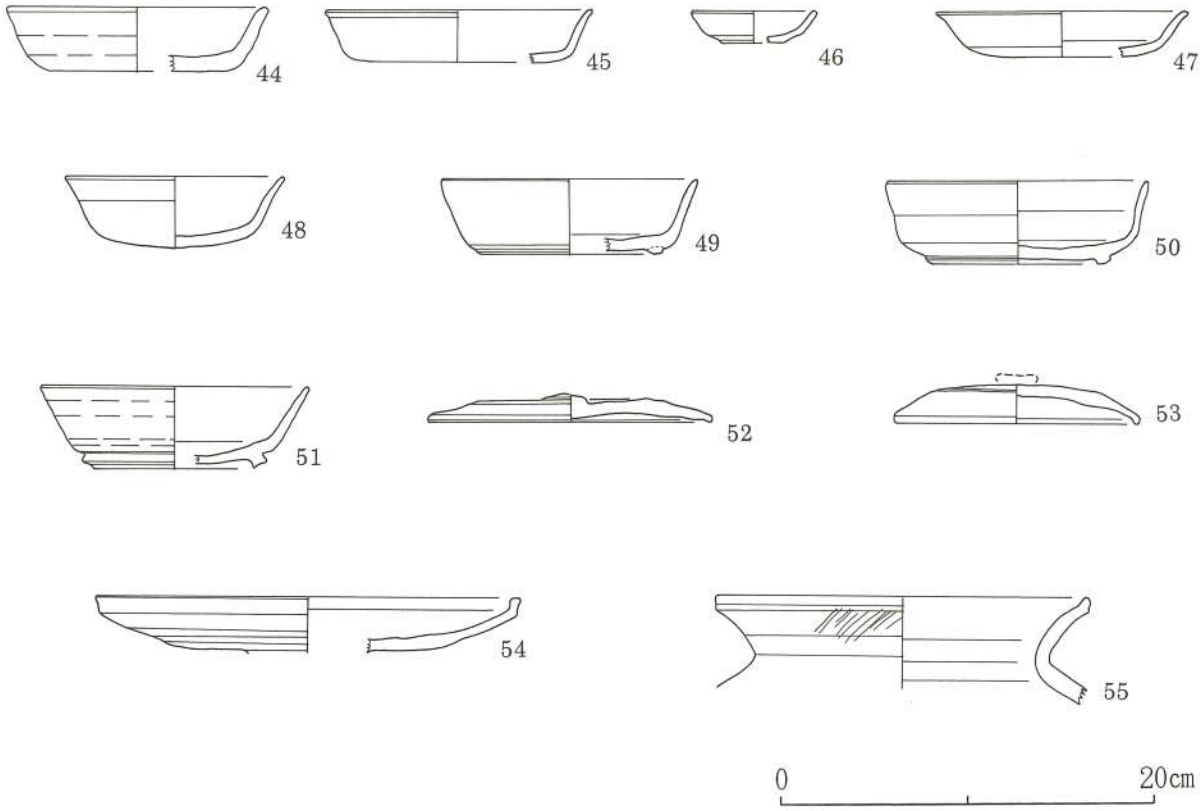


Fig. 14　堤六本谷遺跡5区 出土遺物実測図（4）（1/4）

5．堤六本谷遺跡６区の調査

(1) 遺構（Fig. 15～18・PL. 2、4・Tab. 2）

６区の調査で遺構番号を付して調査した遺構は、22遺構であった。また、本調査区は、全域にわたり後世の耕作による削平が著しく、概して、遺構の遺存状態が悪く、図示できるような遺物をもたない遺構も多かった。また、５Gr.以南の区域は調査対象範囲であったが、表土剥ぎの結果、地山が南に向かって急激に傾斜し、遺構も検出されなかった。

ここでは、これらの遺構のうち、出土遺物、覆土の状態などから明らかに近世以降の所産と考えられる土壙や溝跡などを除く、竪穴式住居址２軒、土壙16基について報告したい。

竪穴式住居址（Fig. 16・PL. 4）

６区の調査で竪穴式住居址として取り扱った遺構は、SH-616、SH-617の２軒であった。いずれも後世の耕作などに取る削平を受け僅かに床面を残すのみで、まとまった遺物ももたないような状態で検出されている。時期的には住居址の規模や形状から、奈良時代後半以降の小型の方形住居址と考えられる。

SH-616（Fig. 16・PL. 4）

SH-616は、調査区北辺のC-1Gr.付近で検出された竪穴式住居址で、住居の北半部は、調査区域外にあり耕地の段によって失われている。遺存部で一辺3.7mの方形を呈す住居址で、柱穴等は不明。床面積は、遺存部で5.1㎡。床面までの掘り込みの深さは10cm弱。主軸は、西壁を基準とすると、N－2°－W。出土遺物はない。

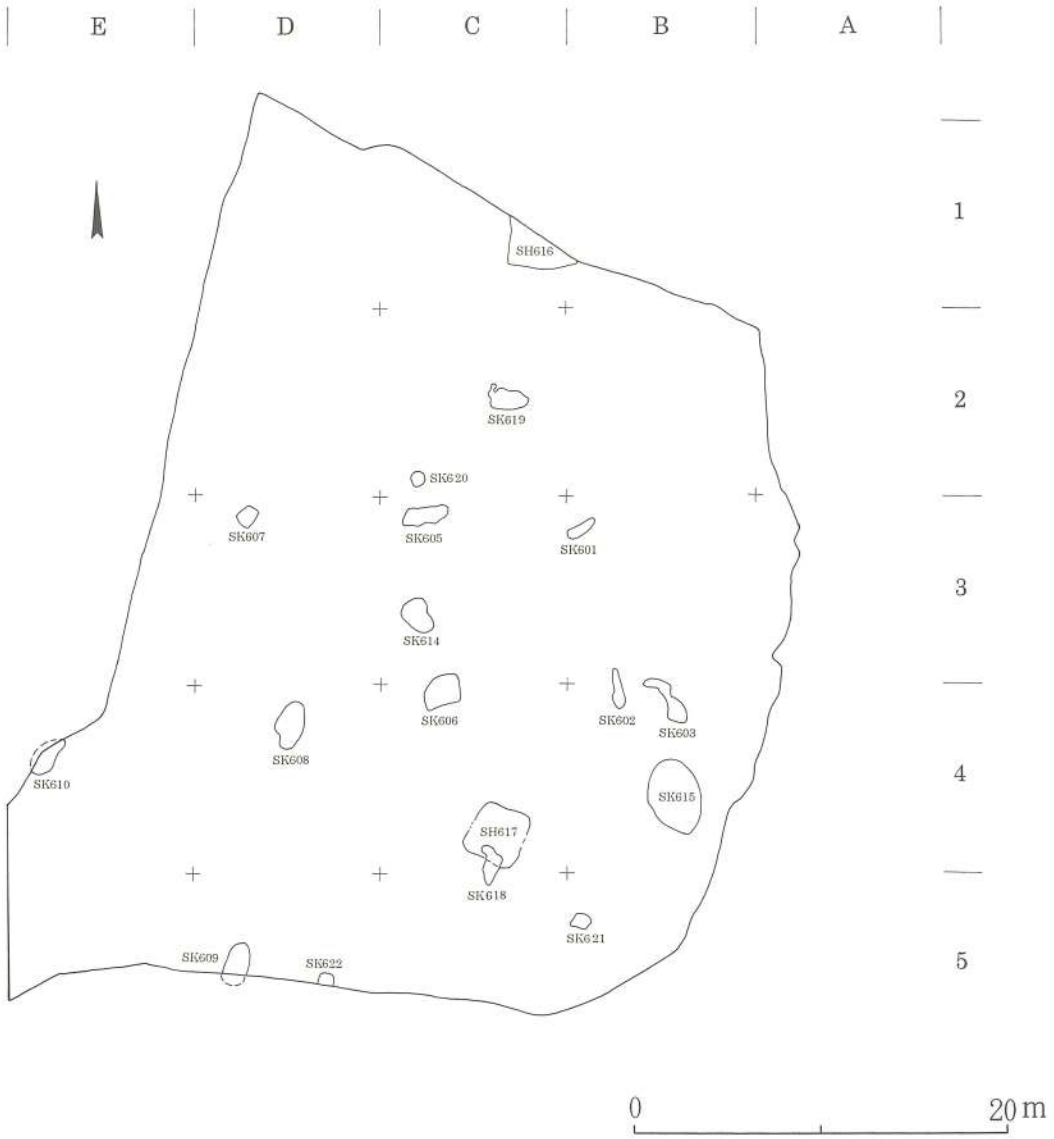


Fig. 15　堤六本谷遺跡6区 遺構配置図（1/400）

SH-617（Fig. 16・PL. 4）

SH-617は、C-4Gr.付近で検出された竪穴式住居址で、長辺3.0m、短辺2.8mのやや不整な隅丸方形を呈す。床面積は、7.3㎡。床面までの掘り込みの深さは10cm強。柱穴等は不明。住居東南隅と南壁中央よりやや西に寄った部分に土壙状の掘り込みをもつ。主軸は、N－28°－E。出土遺物はない。

土壙（Fig. 17、18・PL. 3・Tab. 2）

6区の調査で土壙として取り扱った貯蔵穴などの遺構は、16基であった。この中で、出土遺物などから時期が特定できる土壙は、土師器や須恵器をもつSK-607、SK-608などが奈良時代後半の所産と考えられる。しかし、その他の土壙については、遺物をもたず時期を特定できなかった。

以下、一覧表に形態、規模等をまとめ報告に代える。

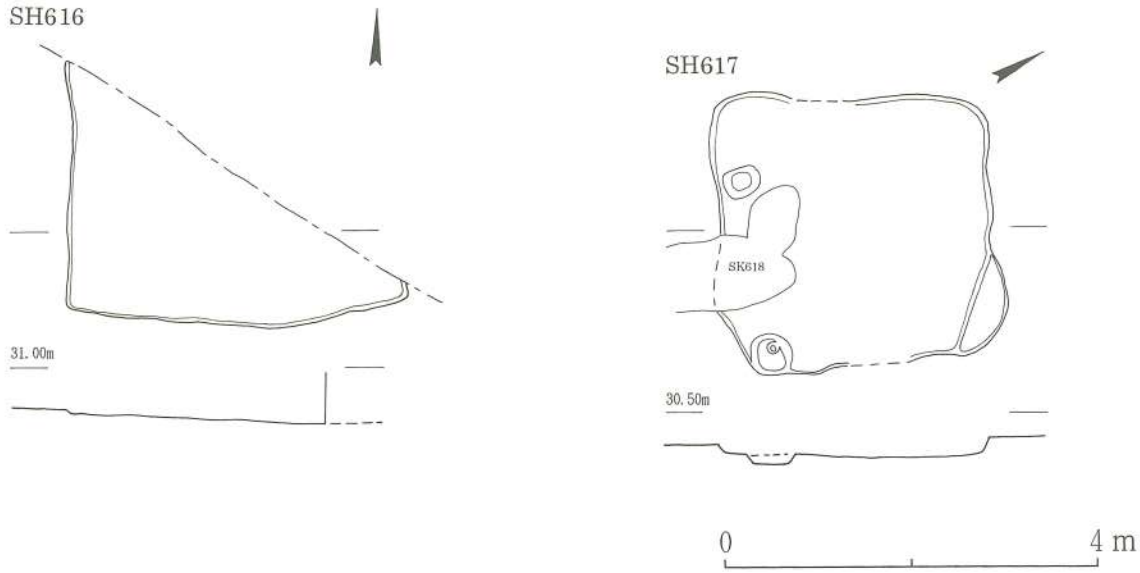


Fig. 16　堤六本谷遺跡6区 竪穴式住居址実測図SH-616・SH-617（1/80）

Tab. 2　堤六本谷遺跡６区 出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規模（上段：上面、下段：底面、単位：m・㎡）				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-601	不整形	1.66 1.36	0.60 0.54	0.52	0.6			
SK-602	不整形	2.27 2.20	0.69 0.54	0.16	0.8			
SK-603	不整形	2.84 2.62	1.08 0.82	0.20	1.3			
SK-605	不整形	2.50 2.22	0.88 0.59	0.18	1.2			
SK-606	不整形	1.94 1.86	1.46 1.37	0.05	2.4			
SK-607	不整形	1.18 1.08	0.95 0.87	0.19	0.8	中央に浅い窪み	土師器甕	
SK-608	不整形	2.64 2.54	1.50 1.43	0.12	2.6		土師器甕、坏・須恵器坏	
SK-609	楕円形	(2.2) (2.1)	1.23 1.14	0.18	(2.1)			
SK-610	不整楕円形	2.46 1.74	(1.3) (0.8)	0.37	(1.2)			
SK-614	不整形	1.74 1.68	1.59 1.21	0.44	1.5			
SK-615	不整形	4.05 3.84	2.66 2.54	0.09	7.3			
SK-618	不整形	1.98 1.68	0.76 0.60	0.31	1.0			
SK-619	不整形	2.20 2.02	1.14 0.98	0.19	1.4			
SK-620	円形	0.90 0.66	0.87 0.64	0.33	0.3			
SK-621	不整方形	0.94 0.76	0.72 0.54	0.24	0.3			
SK-622	方形	0.80 0.53	※0.6 ※0.5	0.28	※0.2			

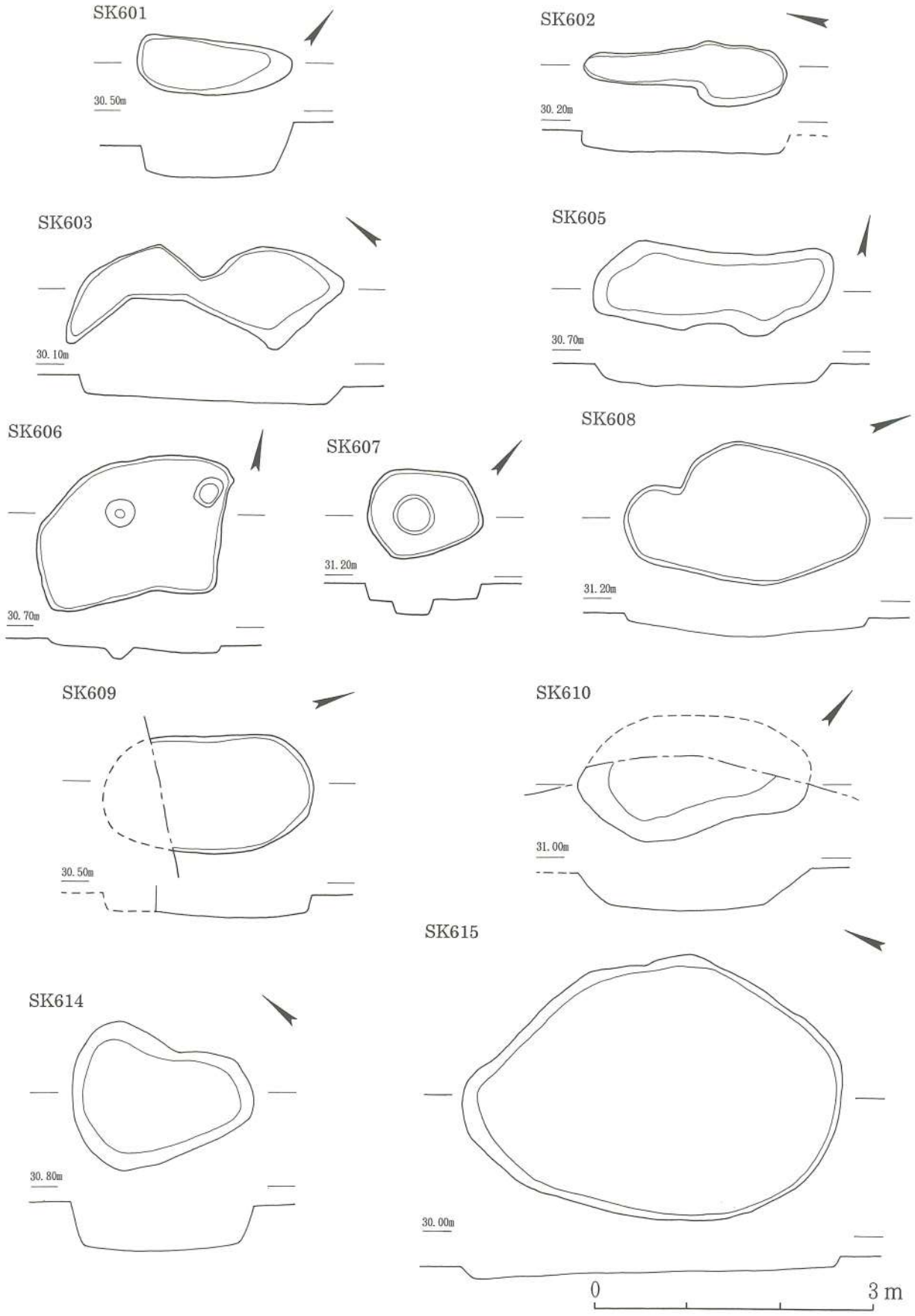


Fig. 17　堤六本谷遺跡6区 土壙実測図 (1) SK-601～SK-603・SK-605～SK-610・SK-614・SK-615 (1/60)

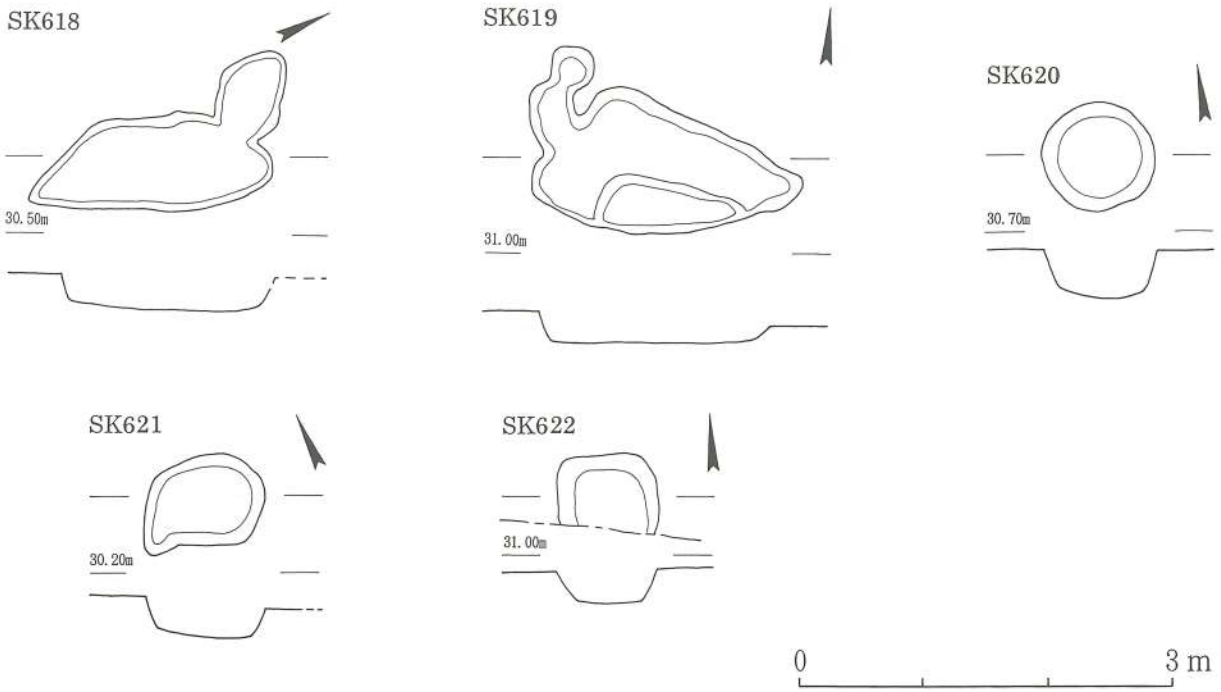


Fig. 18　堤六本谷遺跡6区 土壙実測図（2）SK-618～SK-622（1/60）

(2) 遺物（Fig. 19・PL. 12）

６区の調査では、出土遺物は、少なく、わずかにSK-607、SK-608より奈良時代の土師器、須恵器類が出土したにとどまった。ここでは、出土した遺物のうち近世の遺物を除く土器類・土製品について、代表的なものを遺構ごとに報告したい。

SK-607出土土器（Fig. 19・PL. 12）

１は、土師器の甕（遺存部に穿孔が見られないことから甕と考えられる）。胴部下部は半球形に近い丸底の底部で、胴部上位外面の左右に「く」の字形に上方に屈折した把手がつく。胴部上部は外反しながら直立し、口縁

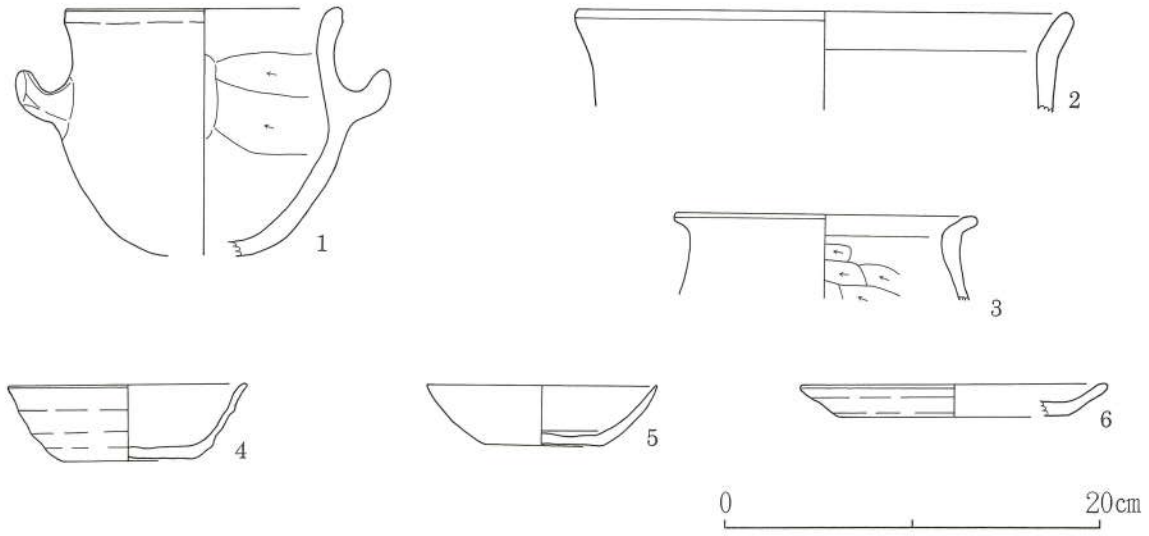


Fig. 19　堤六本谷遺跡6区 出土遺物実測図（1/4）

に至る。胴部内面横位のヘラケズリ、外面粗いナデ。周辺は灰色を呈すが、体部は明赤褐色を呈す。平底の底部に直線的に開きながら立ち上がる体部をもつ。

SK-608出土土器 (Fig. 19・PL. 12)

２、３は、土師器の甕。２は、甕の口縁部。頸部はくびれず、直線的にやや開く短い口縁がつく。３は小振りの甕。頸部は肥厚しややくびれ、外反しながら大きく開く口縁がつく。内面横位のヘラケズリ、外面ナデ。遺存部の内外面に部分的に煤が付着している。

４は、須恵器の坏。平底で、体部は開きながら立ち上がり、口縁端部が小さく外反する。

５は、土師器の坏。平底の底部にやや内湾しながら開く体部をもち、口縁端部は鋭く薄い。胎土は、緻密でほとんど砂粒を含まず、焼成も良好、本遺跡出土の他の土師器とは趣を異にする。

６は、土師器の皿。平底の底部に直線的に開く短い口縁つく。口縁部はやや肥厚する。

Ⅳ．平成6年度堤六本谷遺跡８・９区の調査

１．堤六本谷遺跡８・９区の概要（Fig. 1、3・PL. 5、6）

堤六本谷遺跡のうち、平成６年度の埋蔵文化財発掘調査の対象となった区域は、大字堤字一本柳地区にあって、県道佐賀川久保鳥栖線南側の青柳丘陵より南西方に派生する支丘の基部（標高35mから40m付近）に位置しており、農業基盤整備事業の施工によって削平が予想される2,000㎡部分について、８区・９区の２区に分けて調査を実施した。各調査区の位置及び調査面積は、それぞれ、西に位置する調査区８区が、県道佐賀川久保鳥栖線南方約100m、屋形原集落の東方約300m付近の700㎡、8区の北東に位置する９区が、県道佐賀川久保鳥栖線南方約50m、屋形原集落の東方約400m付近の1,300㎡であった。

今回の調査は、調査対象地区に磁北を基準とする10m×10mグリッドを設定し行った。各調査区のグリッドは、８区が、南北列北から１～３の３列、東西列東からA～Cの３列、９区は、南北列北から１～８の８列、東西列東からA～Eの５列をそれぞれ設定した。

調査区域は、現在主に畑として利用されており、土層は、後世の耕作などによって各時代の遺物包含層は失われ、耕作土あるいは底土の直下が洪積世丘陵を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

堤六本谷遺跡の今回の調査では、８・９両区で、耕作に伴う根切り溝と考えられる溝跡や土壙と考えられる遺構などが検出された。遺物は、表土中には、耕作によって原位置を失った土師器や須恵器の小片が散見されたが、土壙状の遺構については、その時期を特定するような出土遺物もないような状況であった。

２．調査の経過

平成６年度の農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、梅雨明けの７月20日より着手した。以下調査の経過を簡略に記す。

７月20日、堤六本谷遺跡８区・９区を含む、平成６年度の農業基盤整備事業に伴う発掘調査区の重機による表土剥ぎを開始。８月13日から16日まで、お盆のため作業休止。

町内坊所地区にて実施していた民間開発に係る発掘調査終了後の、８月22日、現地にて簡単な調査の安全祈願を行い作業員による遺構検出作業に着手した。遺構検出作業は、調査区西部から実施し、ある程度の遺構が検出されたところで逐次遺構の掘下げ作業を行った。掘下げ作業が終了した遺構から必要に応じて写真撮影を行い、調査範囲を調査区西部へと広げていった。

遺構の一応の掘下げ作業が終了した11月18日、遺構の詳細実測作業を開始。

12月24日から平成７年１月８日まで年末年始の休業。以後、遺物の取上げなどを行い、１月27日気球による全体写真を撮影し、１月31日に現地での作業を終了した。

その後、３月28日まで文化財整理事務所にて、出土遺物の水洗い、記録類の整理作業などを行い、平成６年度の調査を終了した。

３．堤六本谷遺跡８・９区の調査

(1) 遺構（Fig. 20～22・PL. 12・Tab. 3）

８区・９区の調査で遺構番号を付して調査した遺構は、出土遺物、覆土の状態などから明らかに近世以降の所産と考えられる土壙や根切り溝と考えられる溝跡などを除くと、８区が土壙４基、９区が土壙３基の合計７遺構

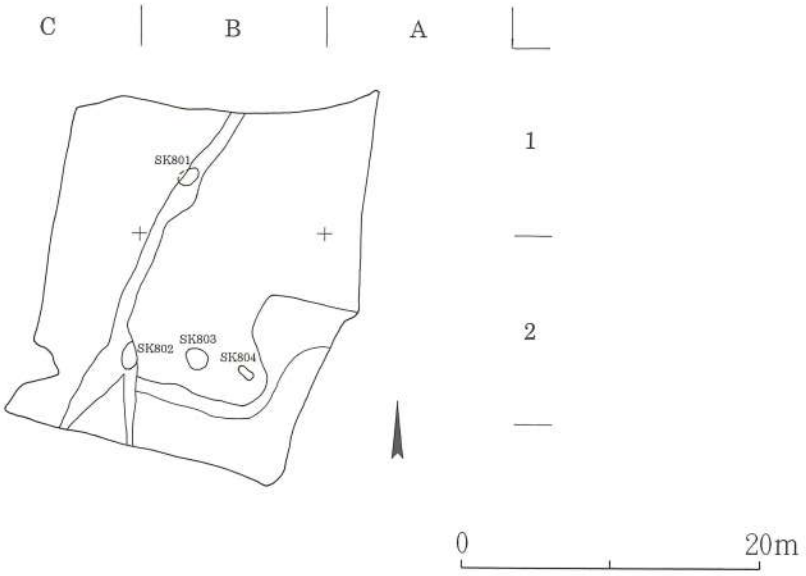


Fig. 20　堤六本谷遺跡8区 遺構配置図（1/400）

であった。ここでは、これら土壙７基について報告したい。

土壙（Fig. 22・PL. 12・Tab. 3）

８区・９区の調査で土壙として取り扱った貯蔵穴などの遺構は、７基であった。しかし、いずれの土壙も時期を特定できるような遺物をもたず、時期は不明である。

以下、一覧表に形態、規模等をまとめ報告に代える。

Tab. 3　堤六本谷遺跡８・９区 出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規模（上段：上面、下段：底面、単位：m・㎡）				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-801	不整楕円形	1.10 0.88	(0.7) 0.45	0.75	0.3			
SK-802	不整楕円形	1.40 1.24	0.85 0.77	0.28	0.7			
SK-803	不整円形	1.37 0.52	1.12 0.49	0.20	0.2			
SK-804	不整楕円形	0.96 0.76	0.54 0.39	0.54	0.2			
SK-901	不整長楕円形	1.78 1.64	0.62 0.52	0.22	0.7			
SK-902	不整楕円形	1.62 1.15	1.11 0.56	0.15	0.6			
SK-903	不整形	5.05 4.34	2.22 1.80	0.21	3.4			

(2) 遺物

８区・９区の調査では、表土や耕作土中には耕作に伴って原位置を失った土師器、須恵器などの小片が散見されたが、近世以降の遺物を除くと、いずれも小片であった。また、土壙などの遺構も遺物をもたないものも多く、僅かに遺構から出土した遺物も、時期が特定できるようなもの、図示できるものは皆無であった。

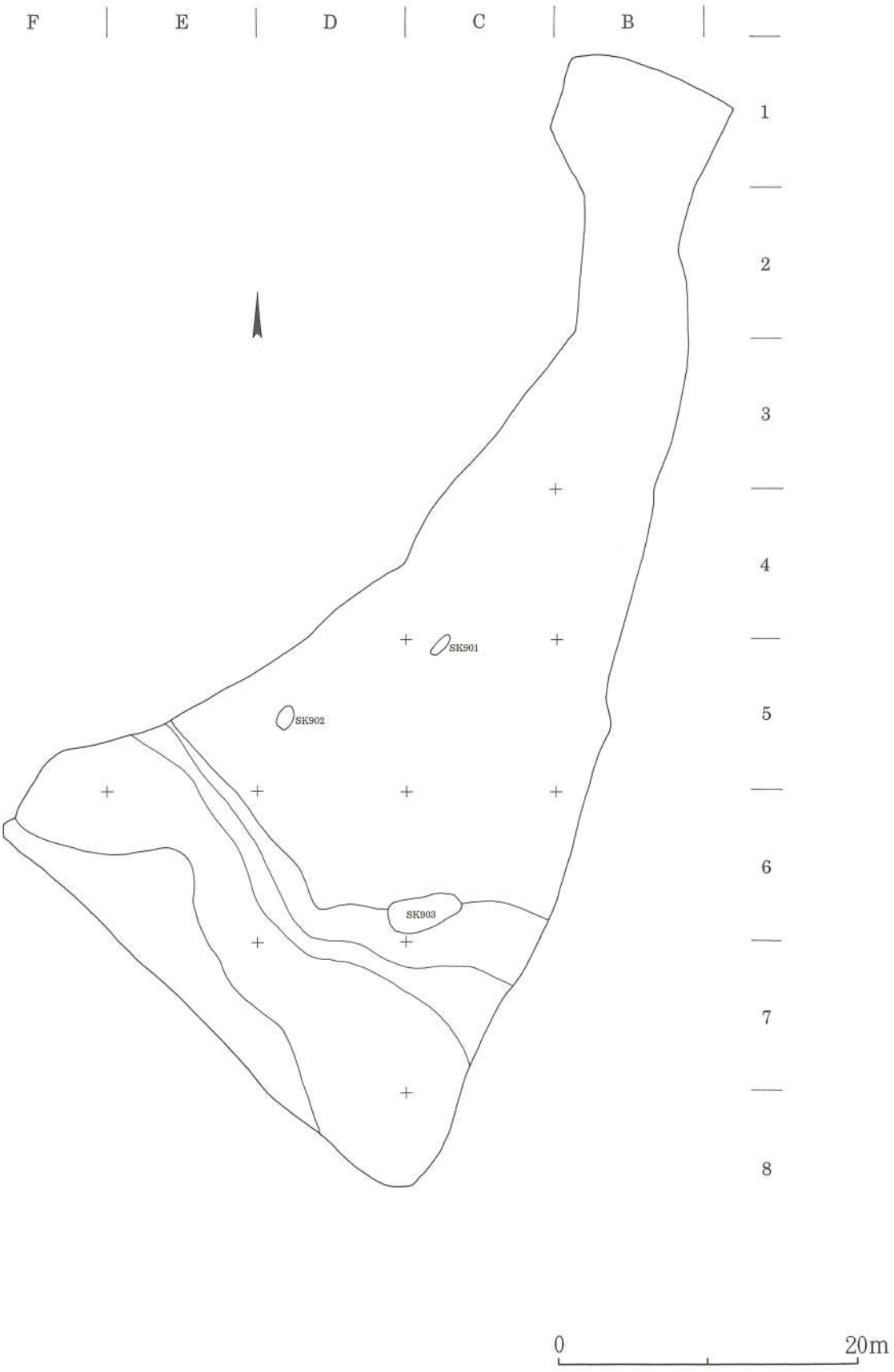


Fig. 21　堤六本谷遺跡9区 遺構配置図（1/400）

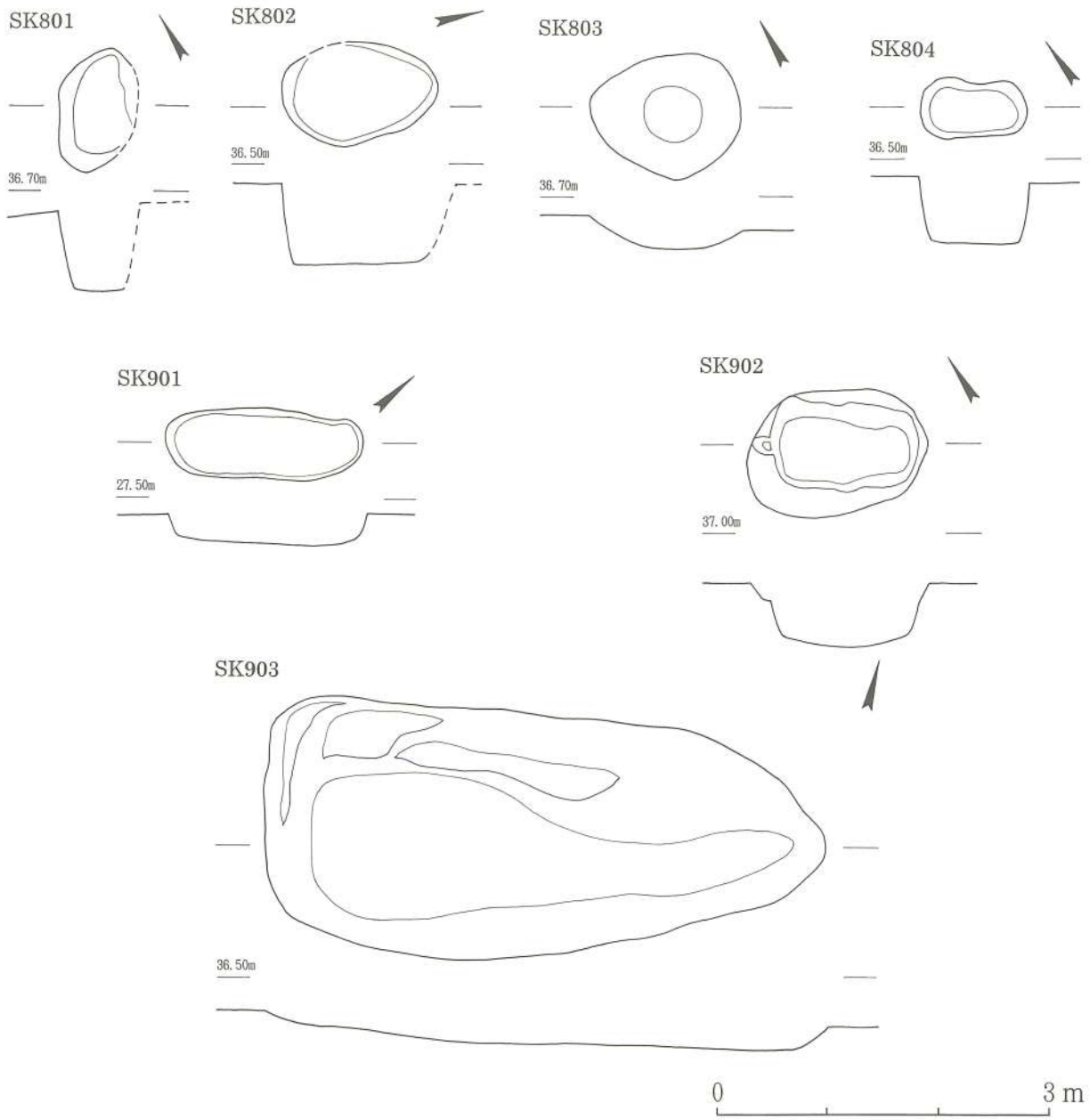


Fig. 22　堤六本谷遺跡8・9区 土壙実測図SK-801～SK-804・SK-901～SK-903（1/60）

Ⅴ．平成６年度屋形原遺跡２区の調査

１．屋形原遺跡と調査区の概要（Fig. １、３・PL. ７、８）

屋形原遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本松の「屋形原丘陵」と呼称する洪積世段丘の先端部（標高25m～27m付近）に位置している。屋形原丘陵は、鎮西山西方の神埼郡東脊振村との境界付近に位置する標高約70mの独立小丘から南東へ派生する丘陵で、県道佐賀川久保鳥栖線の南へと舌状に延びる丘陵となっている。東方の青柳丘陵、西方の二塚山丘陵とは、それぞれ、東は切通川本流、西は切通川支流の屋形原川によって分たれている。

本丘陵は、県道佐賀川久保鳥栖線の屋形原交叉点（標高30m付近）を中心とした一帯が現在屋形原集落として利用されており、この一帯が屋形原遺跡、集落より北側の小丘陵一帯が屋形原古墳群の名称で周知の埋蔵文化財包蔵地として知られており、県道北側に位置するフランスベッド佐賀工場建設の際には、かなりの遺構、遺物が発見されたと言われている。これに対して、現集落南部に広がる低位段丘上については、これまで埋蔵文化財の所在の有無については不明であった。

しかし、農業基盤整備事業施工予定地区を対象とし、昭和63年度に実施した埋蔵文化財確認調査によって、集落の南部の低位段丘部分において弥生時代、奈良時代の遺構・遺物が検出され、新たに7,500㎡ほどの遺跡の広がりが確認され、これまでの屋形原遺跡の範囲を南の田面一帯に拡大し、周知の埋蔵文化財包蔵地として取り扱うこととなった。

屋形原遺跡のうち、平成６年度の埋蔵文化財発掘調査の対象となった区域は、大字堤字一本松に所在する、現屋形原集落南方一帯の低位段丘面で、農業基盤整備事業の施工によって削平が予想される部分3,250㎡部分について、調査区名を２区として発掘調査を実施した。

今回の調査では、調査区全域にまたがる部分に座標北を基準とする10m×10mグリッドを設定した。グリッドは、南北列北から１～11の11列、東西列東からA～Kの11列を設定し調査を実施した。

調査区域は、現在主に水田として利用され、後世の耕作などによって各時代の遺物包含層は失われ、耕作土あるいは水田底土の直下が洪積世丘陵を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

２．調査の経過

平成６年度の農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、梅雨明けの７月20日より着手。以下調査の経過を簡略に記す。

７月20日、屋形原遺跡２区を含む、平成6年度の農業基盤整備事業に伴う屋形原遺跡の重機による表土剥ぎを開始。８月13日から16日まで、お盆のため作業休止。

町内坊所地区にて実施していた民間開発に係る発掘調査終了後の、８月22日、現地にて簡単な調査の安全祈願を行い作業員による遺構検出作業に着手した。遺構検出作業は調査区西部から実施し、ある程度の遺構が検出されたところで逐次遺構の掘下げ作業を行った。掘下げ作業が終了した遺構から必要に応じて写真撮影を行い、調査範囲を調査区西部へと広げていった。

遺構の一応の掘下げ作業が終了した11月18日、遺構の詳細実測作業を開始。

12月24日から平成７年１月８日まで年末年始の休業。以後、遺物の取上げなどを行い、１月27日気球による全体写真を撮影し、１月31日に現地での作業を終了した。

その後、3月28日まで文化財整理事務所にて、出土遺物の水洗い、記録類の整理作業などを行い、平成6年度の調査を終了した。

3．遺構（Fig. 23～33・PL. 7、8、13～21・Tab. 4～6）

屋形原遺跡2区の調査で検出された遺構は、近世以降の所産になると考えられるものを除くと、竪穴式住居址9軒、掘立柱建物址5棟、土壙33基、その他ピットなどであった。これらの遺構は、丘陵の中央部に集中して検出されているが、遺構の密度はそう高くはない。以下、ピットを除く各遺構について簡単に報告する。

(1) 竪穴式住居址（Fig. 23～26・PL. 7、8、13～16・Tab. 4）

竪穴式住居址と考えられる遺構は、9軒が検出された。それらのうち、出土遺物によって時期が特定できる住居址は、縄文式土器がまとまって出土したSH-203が縄文時代後期、土師器、須恵器類を出土した住居址のうちSH-204、SH-206、SH-231、SH-237、SH-238が古墳時代後期、SH-207、SH-217、SH-241が奈良時代の所産と考えられる。

SH-203（Fig. 24・PL. 13）

SH-203は、K-8Gr.で検出された竪穴式住居址である。一辺3.8mほどのやや不整方形の住居址で、東壁は、後世の耕地を拓く際の切土によって失われている。床面までの深さは25cm。主軸は、N－76°－E。縄文時代後期の深鉢や浅鉢などが出土している。

SH-204（Fig. 24・PL. 13）

SH-204は、J-7Gr.付近で検出された竪穴式住居址である。長辺5.0m、短辺4.4mほどの方形の住居址で、床面までの深さは35cm。床面中央に浅いピットをもつが、これが主柱穴と考えられる。また住居内の南西隅には貯蔵穴と考えられる1.0m×0.8mの不整円形の土壙をもつ。主軸は、N－32°－W。土師器の甕、須恵器の坏の他、縄文時代後期の浅鉢などが出土している。

SH-206（Fig. 24・PL. 13、14）

SH-206は、K-6・7Gr.付近で検出された竪穴式住居址である。長辺6.5m、短辺4.5mほどのやや不整方形の住居址で、床面までの深さは35cm。柱穴と考えられるピットはない。主軸は、N－53°－W。土師器の壺、須恵器の坏などの他縄文式土器の深鉢が出土している。

SH-217（Fig. 25・PL. 14）

SH-217は、H-6・I-6Gr.付近で検出された竪穴式住居址である。長辺5.8m、短辺5.4mほどのやや不整方形の住居址で、床面までの深さは25cm弱。主柱穴は不明。住居北東壁の一部に壁周溝状の溝をもつ。主軸は、N－33°－W。土師器の甕、支脚、須恵器の甕などが出土している。SK-216によって住居南隅を失う。

SH-229（Fig. 25・PL. 14）

SH-229は、G-5Gr.付近で検出された竪穴式住居址である。長辺4.6m、短辺4.2mほどの方形の住居址で、

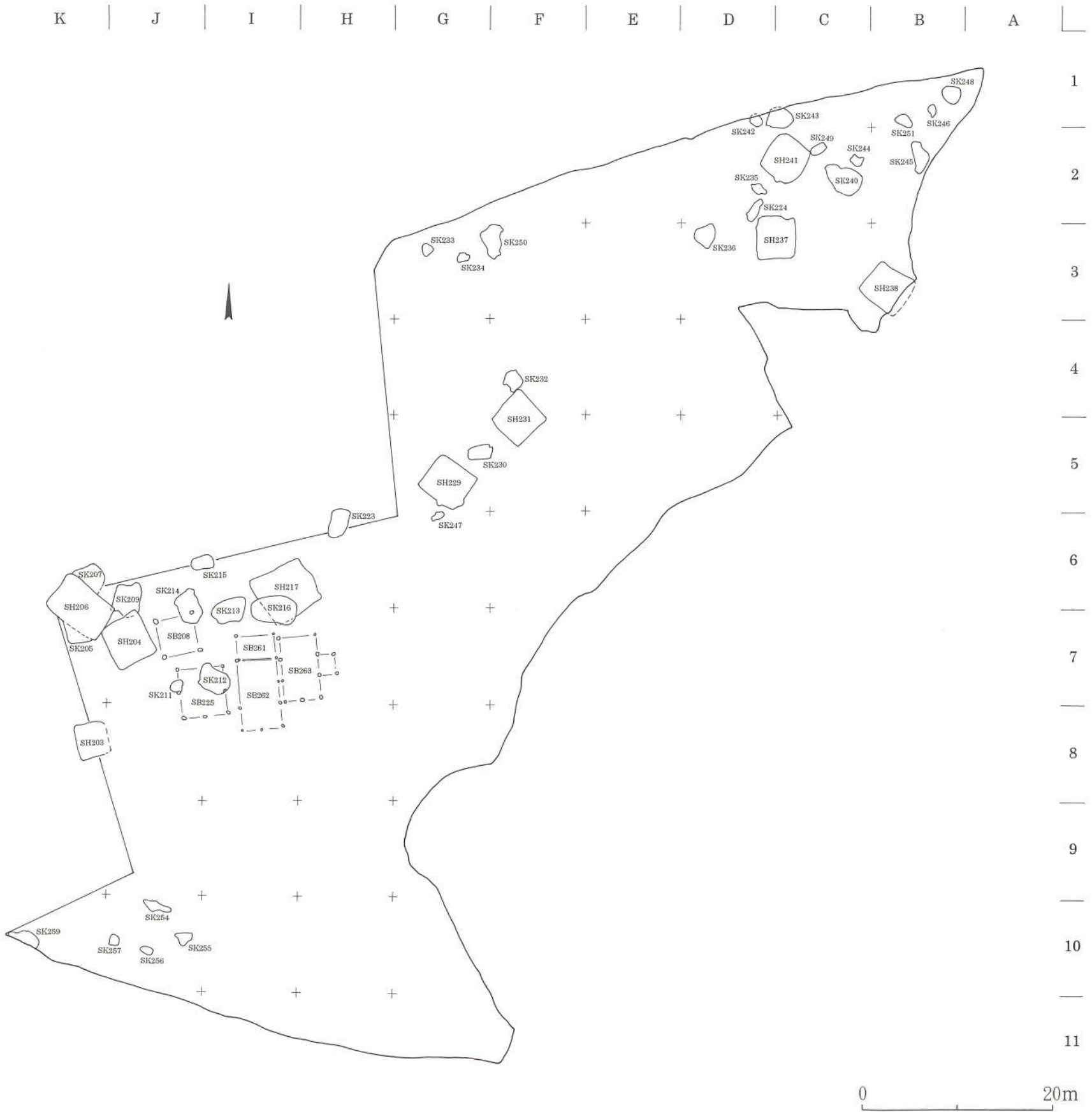


Fig. 23　屋形原遺跡2区 遺構配置図（1/500）

床面までの深さは20cm弱。住居の棟方向からやや北に偏った位置に２本のピットもち、これが主柱穴と考えられる。また、カマドの煙道部分であろうか住居南壁の中央よりやや東側に馬蹄形の突出部をもつ。主軸は、N－57°－W。土師器の甕、須恵器の坏、坏蓋などが出土している。

SH-231 (Fig. 25・PL. 15)

SH-231は、F-４・５Gr.付近で検出された竪穴式住居址である。後世の耕作などによる削平を受け、住居の西側1/3程度を失っている。一辺4.5mほどの方形の住居址と考えられ、床面までの深さは、遺存部で５cm。住居内からピットは検出されたが、全てが住居の施設とは考えがたく、主柱穴は不明。主軸は、N－43°－E。土師器の甕が出土している。

SH-237 (Fig. 26・PL. 15)

SH-237は、C-３・D-３Gr.付近で検出された竪穴式住居址である。長辺4.4m、短辺4.0mほどで住居の北東隅を欠いたような不整方形の住居址で、床面までの深さは15cm強。住居の北東隅には貯蔵穴と考えられる0.7m×0.5m、深さ20cmの不整円形の土壙をもつ。主柱穴は不明。主軸は、N－1°－W。土師器の甑？、須恵器の坏、坏蓋などが出土している。

SH-238 (Fig. 26・PL. 15)

SH-238は、B-３Gr.付近で検出された竪穴式住居址である。後世の耕作などによる削平を受け、住居の南東側1/3程度を失っている。長辺4.4m以上、短辺4.0mほどのやや不整方形の住居址と考えられ、床面までの深さは、遺存部で15cm。主柱穴は不明。主軸は、N－53°－W。土師器の甕、坏、須恵器の甕、坏蓋などが出土している。

SH-241 (Fig. 26・PL.16)

SH-241は、C-２・D-２Gr.付近で検出された竪穴式住居址である。長辺4.4m、短辺4.2mほどの胴張り隅丸方形の住居址で、床面までの深さは25cm強。住居の対角線上に4本のピットもち、これが主柱穴と考えられる。主軸は、N－28°－E。土師器の坏、須恵器の坏蓋、高坏などが出土している。

Tab. 4　屋形原遺跡２区 出土竪穴式住居址一覧表

住居址番号	平面形態	規模 (m・㎡)				棟方向	屋内施設				出土遺物	備考
		長辺	短辺	深さ	床面積		主柱穴	溝	炉・焼土など	その他		
SH-203	不整方形	3.80	(3.4)	0.26	(10.0)	N－76°－E	2本				縄文式土器深鉢、浅鉢	
SH-204	不整方形	5.00	4.00	0.36	19.7	N－32°－W				貯蔵穴	土師器甕・須恵器坏	
SH-206	不整方形	6.50	4.47	0.35	(24.0)	N－53°－W					縄文式土器深鉢・土師器甕・須恵器坏	
SH-217	不整方形	5.82	5.40	0.24	29.0	N－33°－W		一部			土師器甕・須恵器甕・土製支脚・石斧	
SH-229	不整方形	4.60	4.23	0.19	17.5	N－57°－W			カマド煙道状の突出		土師器甕・須恵器坏、坏蓋	
SH-231	不整方形	4.54	※4.3	0.05	※18.0	N－43°－E					土師器甕	
SH-237	不整方形	4.42	3.97	0.17	15.5	N－1°－W				貯蔵穴	土師器甑？・須恵器坏、坏蓋	
SH-238	不整方形	※4.4	3.97	0.17	※16.0	N－53°－E					土師器甕、坏・須恵器甕、坏蓋	
SH-241	不整方形	4.42	4.25	0.27	15.8	N－36°－E					土師器坏・須恵器坏蓋、高坏	

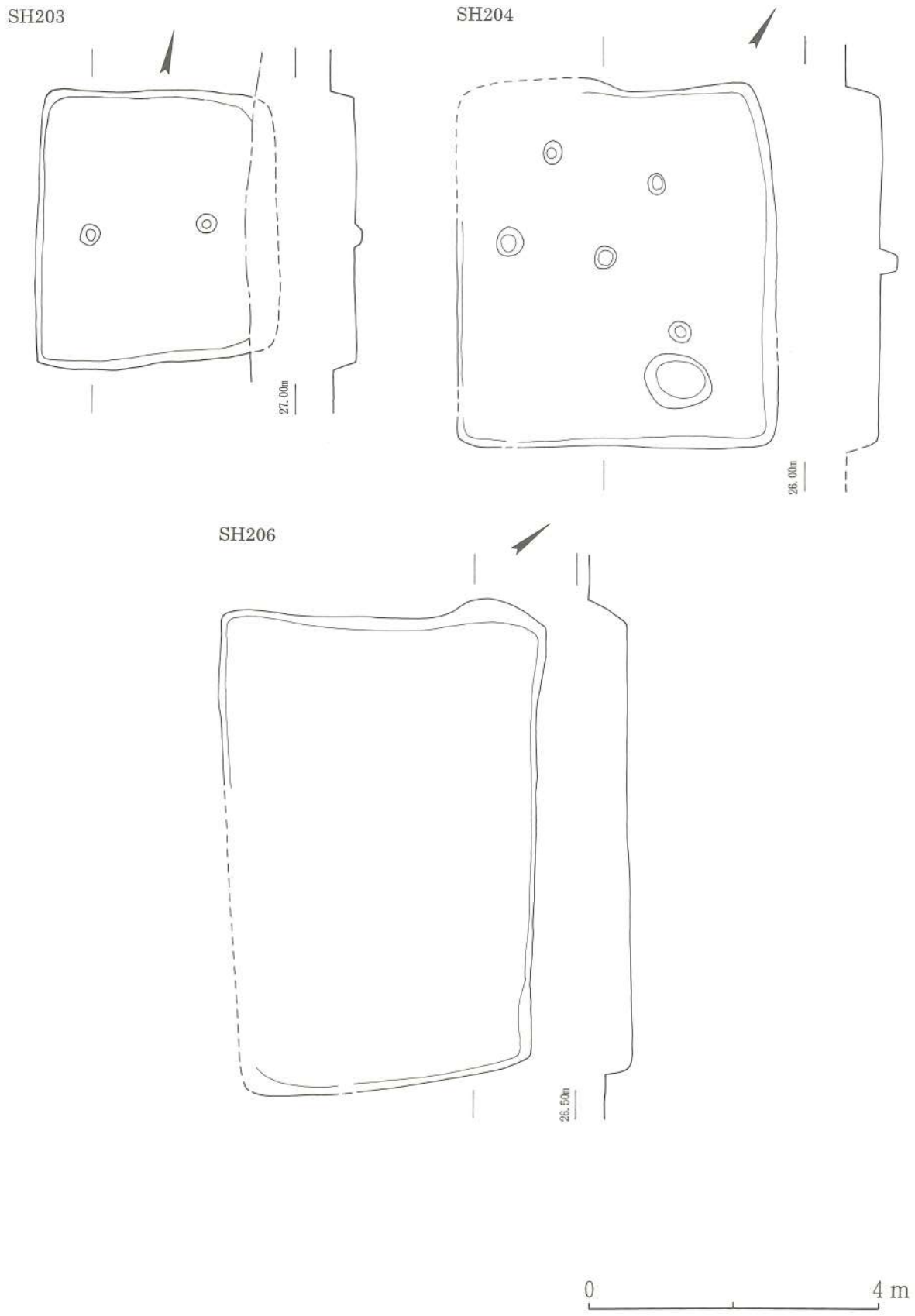


Fig. 24　屋形原遺跡2区 竪穴式住居址実測図（1）SH-203・SH-204・SH-206（1/80）

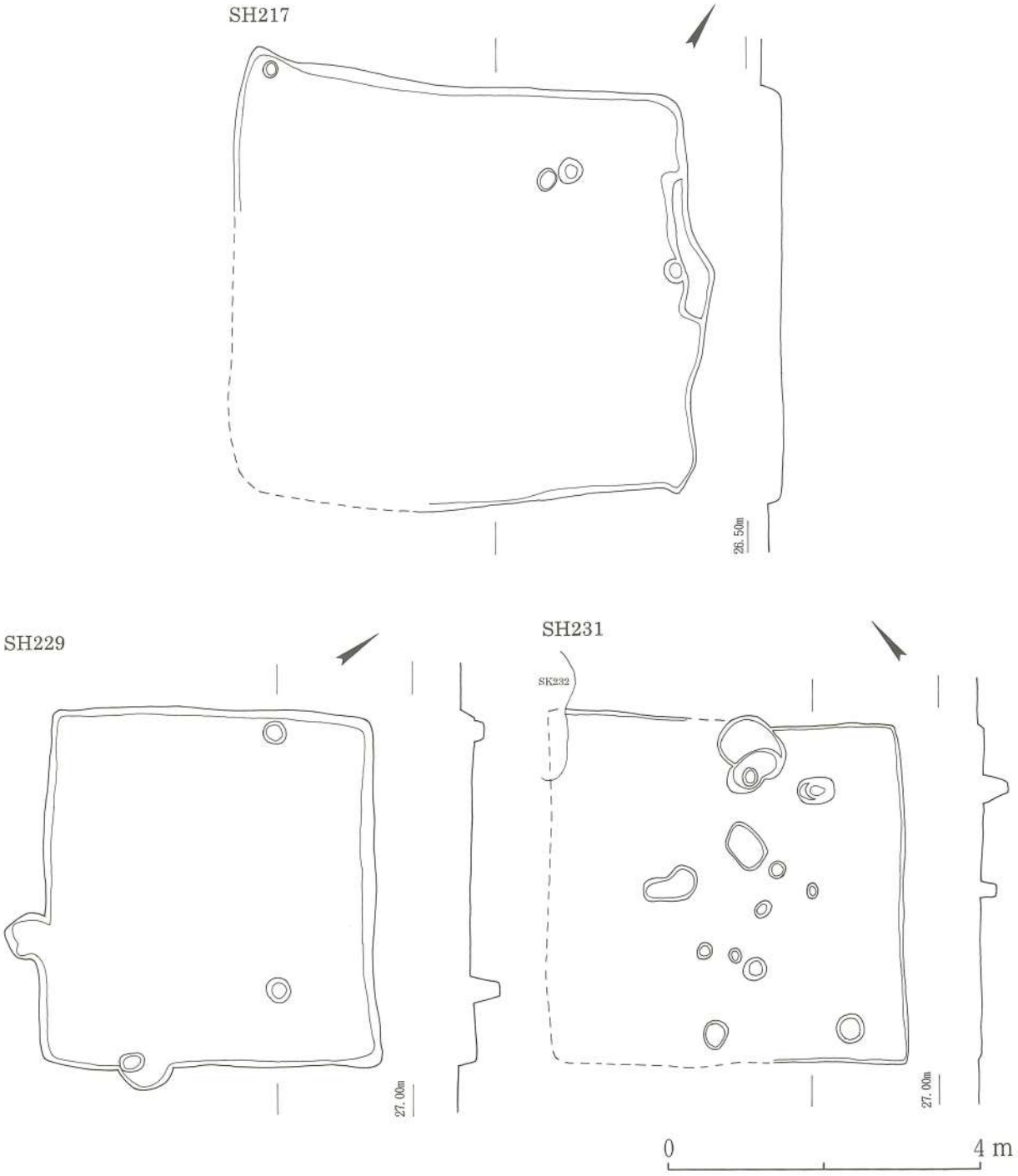


Fig. 25　屋形原遺跡2区 竪穴式住居址実測図（2）SH-217・SH-229・SH-231（1/80）

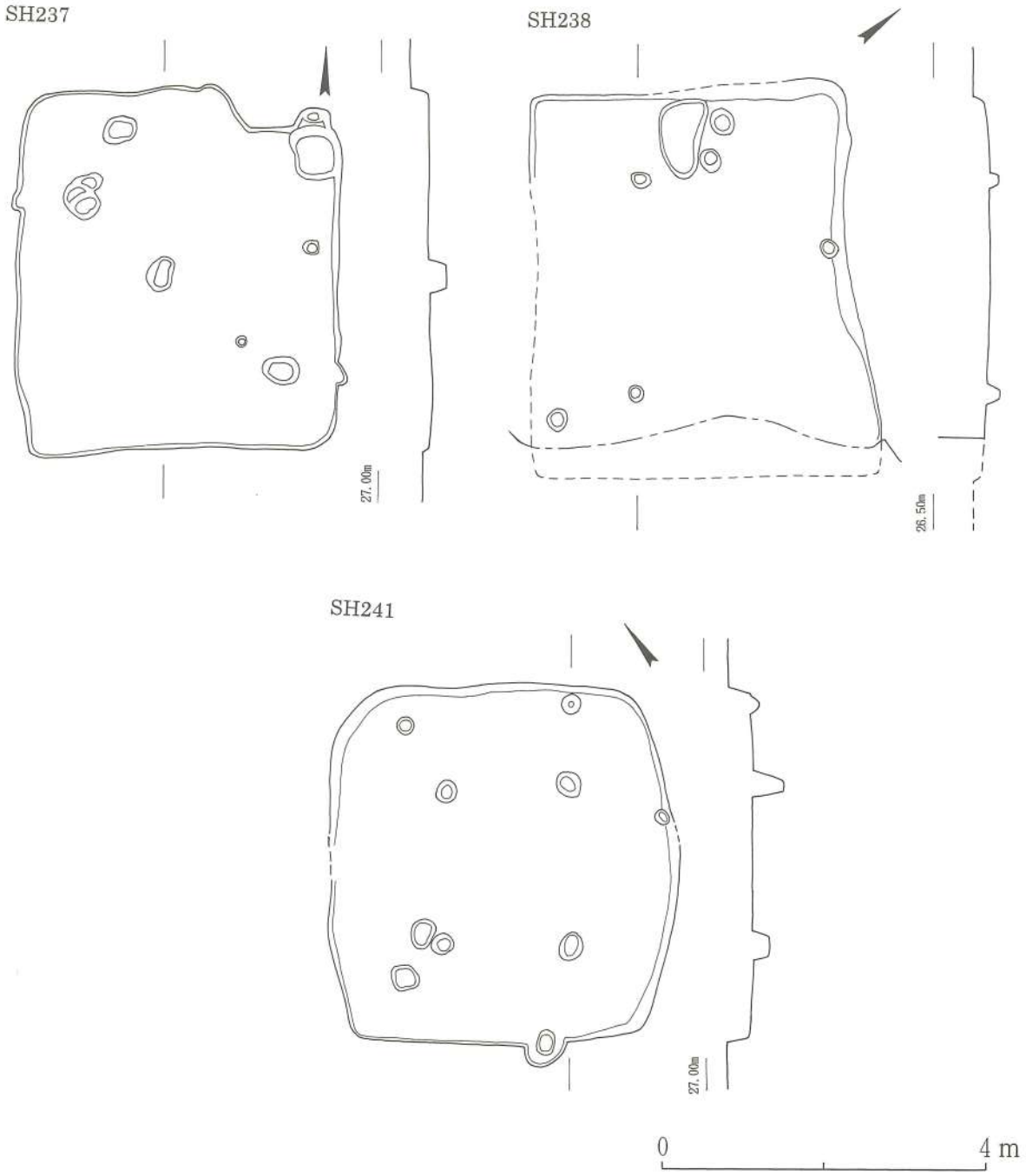


Fig. 26　屋形原遺跡2区 竪穴式住居址実測図（3）SH-237・SH-238・SH-241（1/80）

(2) 掘立柱建物址（Fig. 28～30・PL. 7、8、16・Tab. 5）

掘立柱建物址と考えられる遺構は、SB-208・SB-225・SB-261～SB-263の5棟であった。いずれもI-7Gr.を中心とした20m四方の狭い範囲に集中して検出された。柱穴などからの出土遺物は無く、時期は特定しがたい。また、SB-262、SB-263の隣接した2棟については、主軸をほぼ同じくしており、同一の目的で建設された可能性が高い。

SB-208 (Fig. 28)

SB-208は、J-7Gr.で検出された1間×1間のほぼ正方形の掘立柱建物址。柱穴は、直径30cm～70cm、深さ30cm～60cm程度の不整な楕円形の掘り方。柱間は、桁、梁行ともに約3.9mを計る。床面積15.2㎡。主軸は、N－15°－Wである。

SB-225 (Fig. 28)

SB-225は、I-7・J-7Gr.で検出された2間×2間のほぼ正方形の掘立柱建物址。後世の削平により失われたものか建物北辺の中央の柱が見えない。柱穴は、直径30cm～50cm、深さ30cm～60cm程度の円形の掘り方。柱間は、桁行2.5m、梁行2.4mを計る。床面積23.5㎡。主軸は、N－9°－Wである。

SB-261 (Fig. 29)

SB-261は、I-7Gr.で検出された1間×1間のやや不整な長方形の掘立柱建物址。柱穴の掘り方は、直径20cm～40cmの円形を呈し、深さはSB-261北西隅の柱穴が65cmと極端に深いが、他は15cm～30cm程度と比較的浅い。柱間は、桁行4.0m、梁行2.5mを計る。床面積は、10.0㎡。主軸は、N－83°－Eである。

SB-262 (Fig. 29)

SB-262は、I-7・8Gr.で検出された3間×2間の掘立柱建物址。柱穴の掘り方は、直径20cm～40cmの円形を呈し、深さは15cm～30cm程度と比較的浅い。柱間は、桁行2.4m、梁行2.2mを計る。床面積は、31.0㎡。主軸は、N－6°－Wである。

SB-263 (Fig. 29・PL. 16)

SB-263は、H-7・I-7Gr.でSB-261・SB-262の東に隣接して検出された3間×2間の掘立柱建物址。建物東辺中央部の柱間に入口の庇と考えられる1間四方の突出した施設をもつ。柱穴は、直径20cm～40cm、深さ20cm～50cm程度の円形の掘り方。柱間は、桁行2.3m、梁行1.9m、庇と考えられる突出部の柱間は梁行1.8mを計る。床面積は、建物本体が25.8㎡、庇と考えられる突出部が4.1㎡。主軸は、N－5°－Wである。

Tab. 5　屋形原遺跡2区 出土掘立柱建物址一覧表

建物址番号	平面形態	規模 (m・㎡)				棟方向	備考
		桁行柱間	梁行柱間	長さ×幅	床面積		
SB-208	1×1	3.9		3.9×3.9	18.2	N－15°－W	
SB-225	2×2	2.5	2.4	5.0×4.7	23.5	N－9°－W	
SB-261	1×1	4.0	2.5	4.0×2.5	10.0	N－83°－E	
SB-262	3×2	2.4	2.2	7.2×4.3	31.0	N－6°－W	
SB-263	3×2	2.3	1.9	6.8×3.8	25.8	N－5°－W	建物東側に入口の庇であろうか1間×1間、4.1㎡の突出部あり。

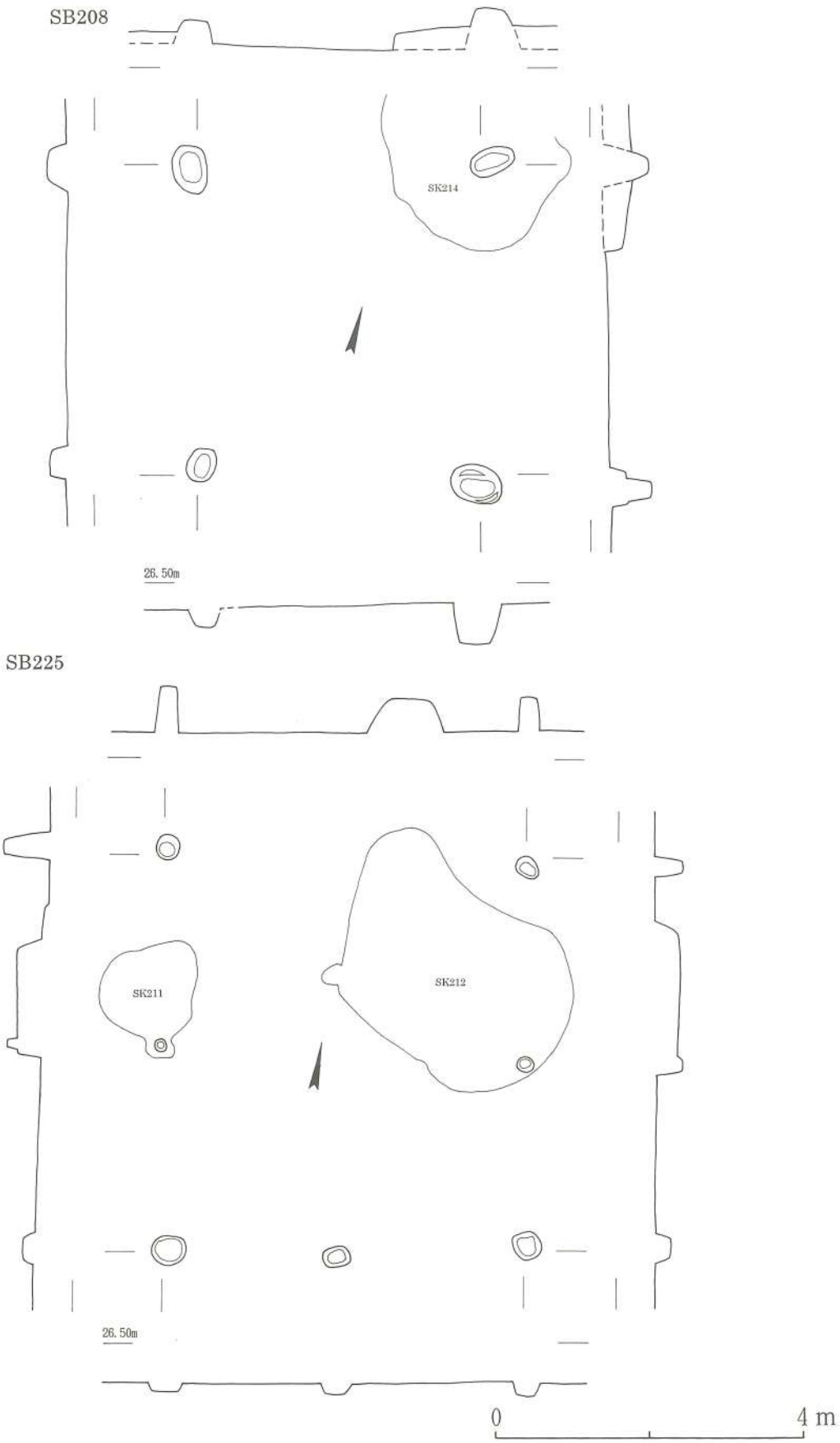


Fig. 27　屋形原遺跡2区 掘立柱建物址実測図（1）SB-208・SB-225（1/80）

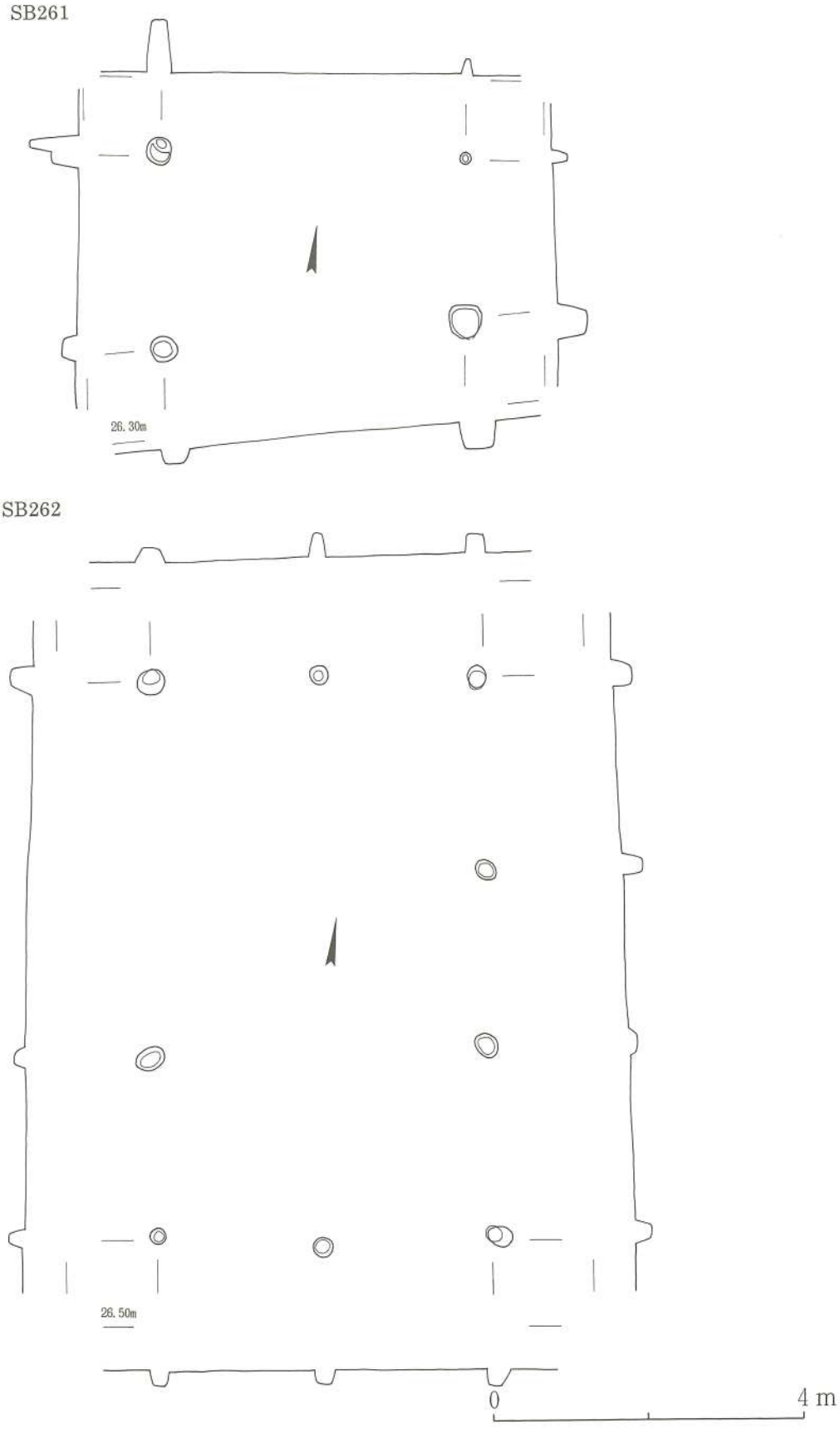


Fig. 28　屋形原遺跡2区 掘立柱建物址実測図（2）SB-261・SB-262（1/80）

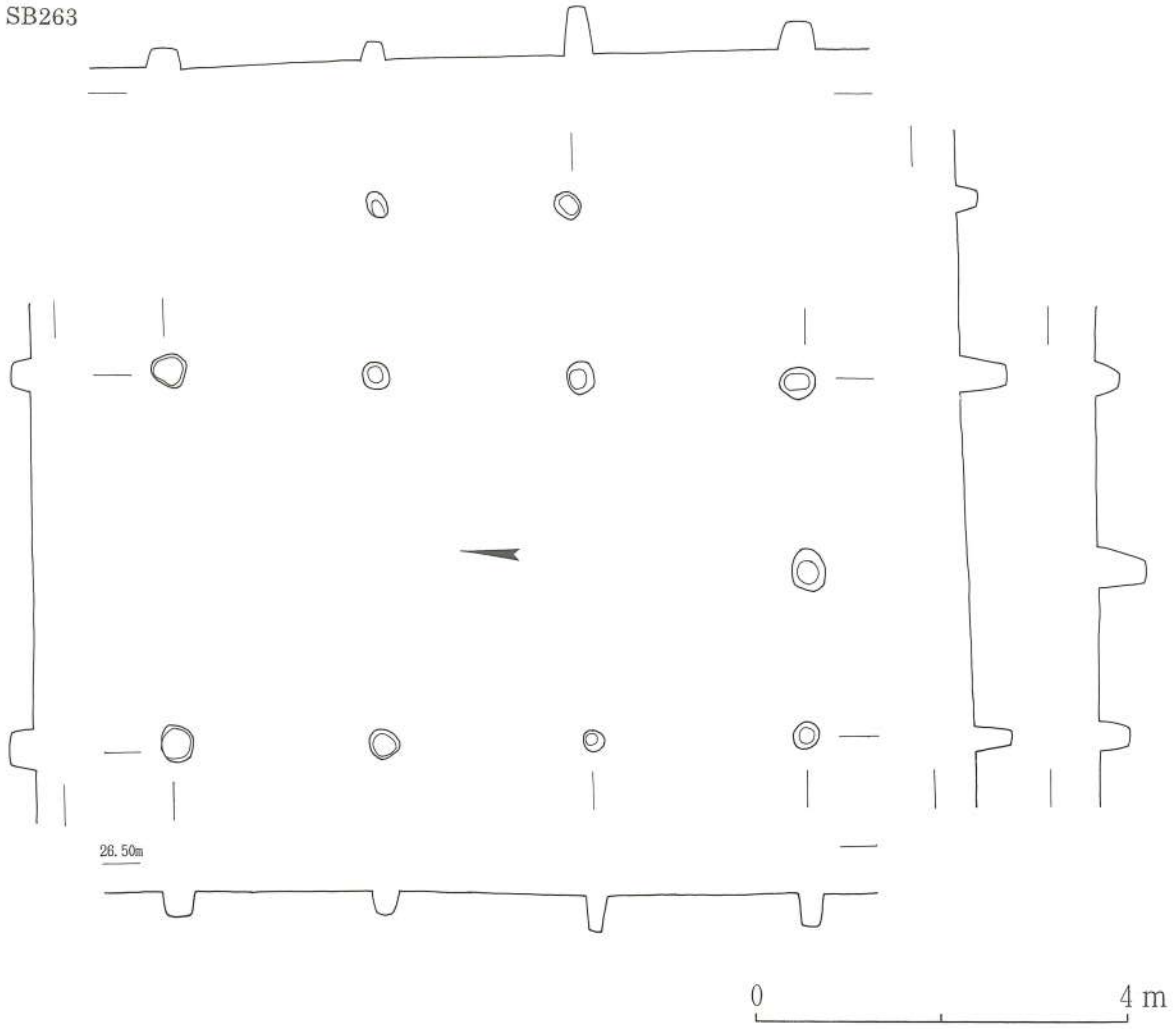


Fig. 29　屋形原遺跡2区 掘立柱建物址実測図（3）SB-263（1/80）

(3) 土壙（Fig. 31～34・PL. 17～21・Tab. 6）

土壙は、33基が検出された。出土遺物により時期が特定できるものとしては、それぞれ縄文式土器がまとまって出土したSK-216、SK-223が縄文時代後期、土師器、須恵器の甕や坏を出土した土壙のうちSK-215、SK-229、SK-248、が古墳時代後期、SK-207、SK-209、SK-211、SK-213、SK-230、SK-232、SK-230、SK-232、SK-236、SK-240、SK-243、SK-255が奈良時代、SK-254が中世の所産と考えられる。

以下、一覧表に形態、法量等を記し報告とする。

Tab. 6　屋形原遺跡２区 出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規模（上段：上面、下段：底面、単位：m・m²）				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-205	方形	※2.4 ※2.2	※2.2 ※2.9	0.12	※2.4		縄文式土器深鉢	住居址？
SK-207	不整形	※2.3 ※2.2	※2.0 ※1.8	0.22	※4.4		縄文式土器深鉢 須恵器甕・坏	
SK-209	不整形	3.32 3.14	2.90 2.63	0.44	5.3			

遺構番号	平面形態	規模（上段：上面、下段：底面、単位：m・㎡）				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-211	不整円形	1.54 1.34	1.24 1.14	036	1.0		土師器甕	
SK-212	不整形	3.40 3.02	2.43 2.15	0.37	7.2		土師器甕 須恵器坏・坏蓋	
SK-213	不整形	3.50 2.87	2.57 2.10	0.15	5.1		石槍・石鏃	
SK-214	不整楕円形	3.62 3.32	2.50 2.38	0.20	5.5		土師器？ミニチュア	
SK-215	不整方形	1.51 1.34	1.27 1.16	0.30	(1.3)		土師器高坏 石鏃	
SK-216	不整楕円形	4.96 4.70	2.98 2.73	0.21	10.0		縄文式土器深鉢・ 浅鉢・石錘・石鏃	
SK-223	不整方形	3.26 3.02	1.93 1.61	0.28	4.2		縄文式土器深鉢・ 浅鉢・須恵器坏他	
SK-224	不整形	2.60 2.34	0.86 0.49	0.37	0.9			
SK-230	不整方形	2.38 2.25	1.33 1.22	0.41	2.5		土師器甕	
SK-232	不整円形	2.22 1.96	1.94 1.75	0.24	2.4		土師器坏 須恵器壺	
SK-233	不整円形	1.23 1.09	1.11 0.94	0.20	0.8			
SK-234	不整形	1.16 1.03	1.12 0.98	0.40	0.8			
SK-235	不整形	1.76 1.50	1.02 0.71	0.34	0.6			
SK-236	不整形	2.49 2.34	2.04 1.87	0.35	3.2		土師器甕・高坏 須恵器甕・坏・高坏	
SK-240	不整形	4.33 3.36	2.75 2.52	0.48	6.2		土師器甕 須恵器坏・坏蓋・硯	
SK-242	不整円形	1.39 1.27	1.10 1.00	0.08	(1.0)			
SK-243	不整円形	2.76 2.60	1.91 1.78	0.17	(3.8)			
SK-244	不整形	1.52 1.38	(1.5) 1.45	0.12	1.3			
SK-245	不整形	3.84 3.16	1.75 1.55	0.67	2.9			
SK-246	不整円形	1.22 1.08	0.93 0.78	0.27	0.3			
SK-247	不整形	1.50 1.06	0.75 0.47	0.40	0.3			
SK-248	不整円形	2.03 1.75	1.68 1.52	0.39	2.3		土師器甕・須恵器坏・ 高坏・甕・鎚・砥石	
SK-249	不整方形	1.71 1.52	0.90 064	0.30	0.9			
SK-250	不整形	3.62 3.44	2.20 2.00	0.12	4.6			
SK-251	不整形	1.94 2.10	1.04 0.72	0.58	0.6			
SK-254	不整形	3.04 2.46	0.98 0.60	0.18	0.9		中世土器土鍋	
SK-255	不整形	1.87 1.66	1.40 1.24	0.43	1.2		土師器甕	
SK-256	不整形	1.42 1.22	0.78 0.63	0.25	0.6			
SK-257	不整方形	0.98 0.82	0.91 0.76	0.25	0.5			
SK-259	不整形	3.33 2.94	※0.8	0.55	※1.9			

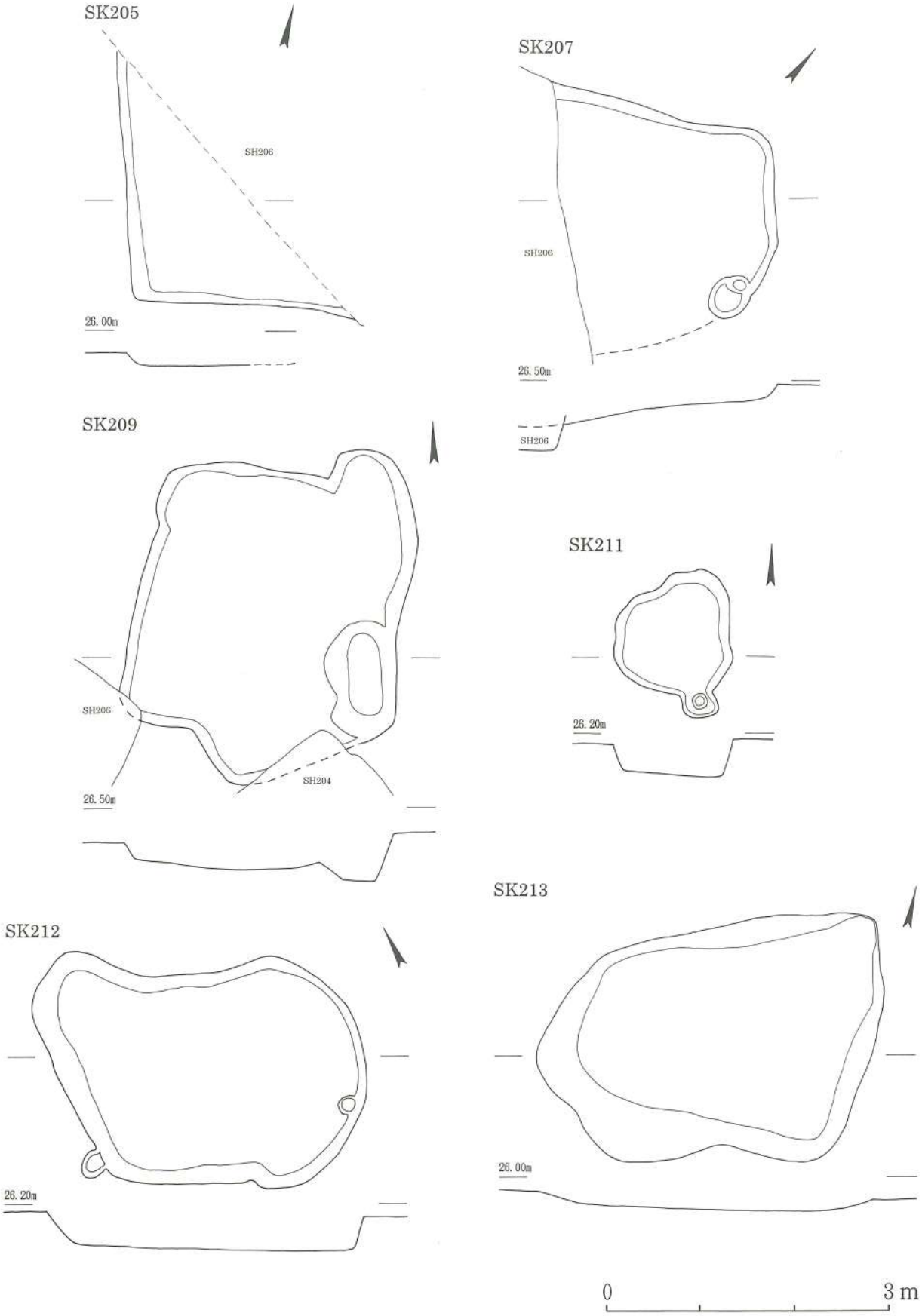


Fig. 30　屋形原遺跡2区 土壙実測図（1）SK-205・SK-207・SK-209・SK-211～SB-213（1/60）

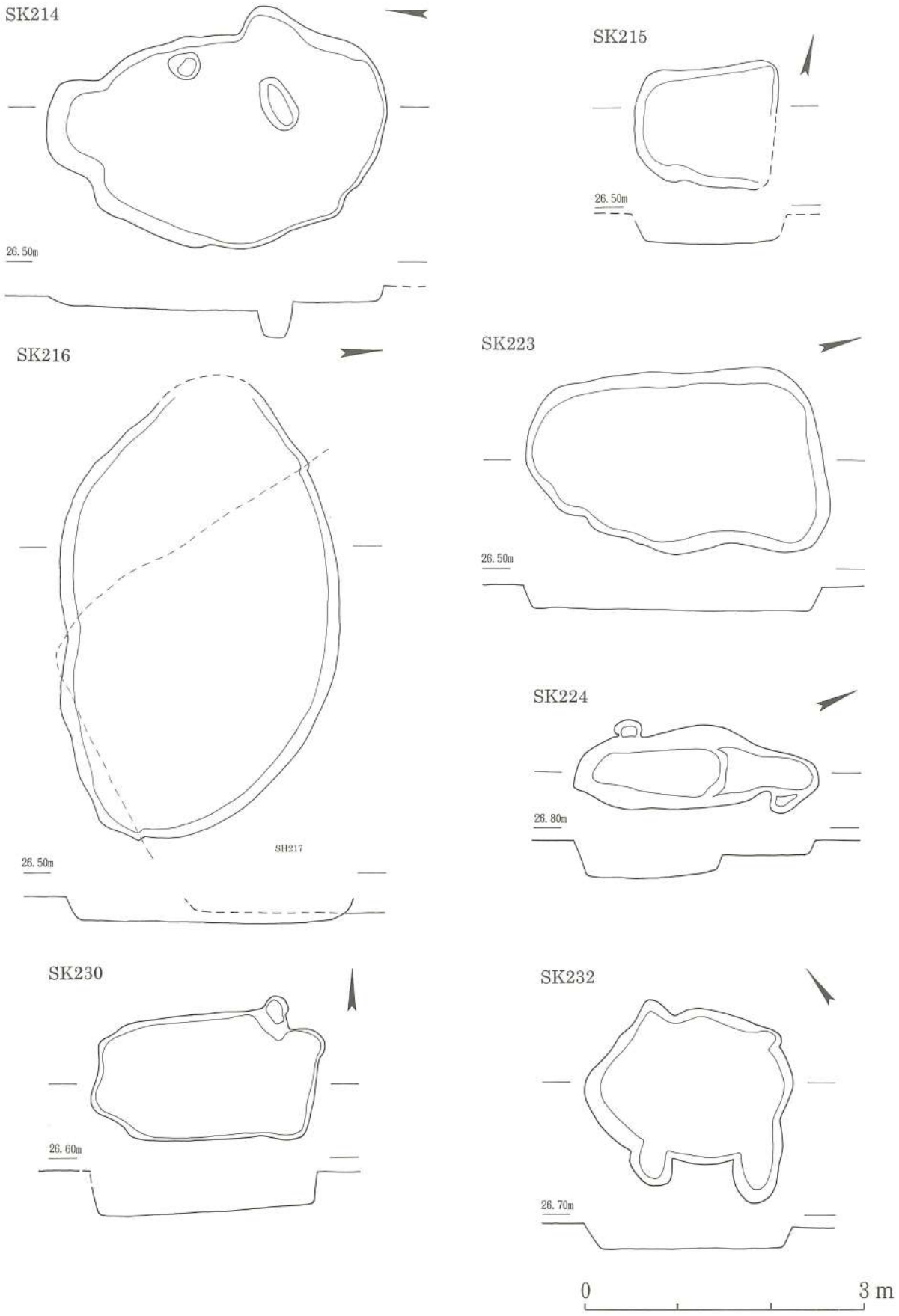


Fig. 31　屋形原遺跡2区 土壙実測図（2）SK-214～SK-216・SK-223・SK-224・SK-230・SB-232（1/60）

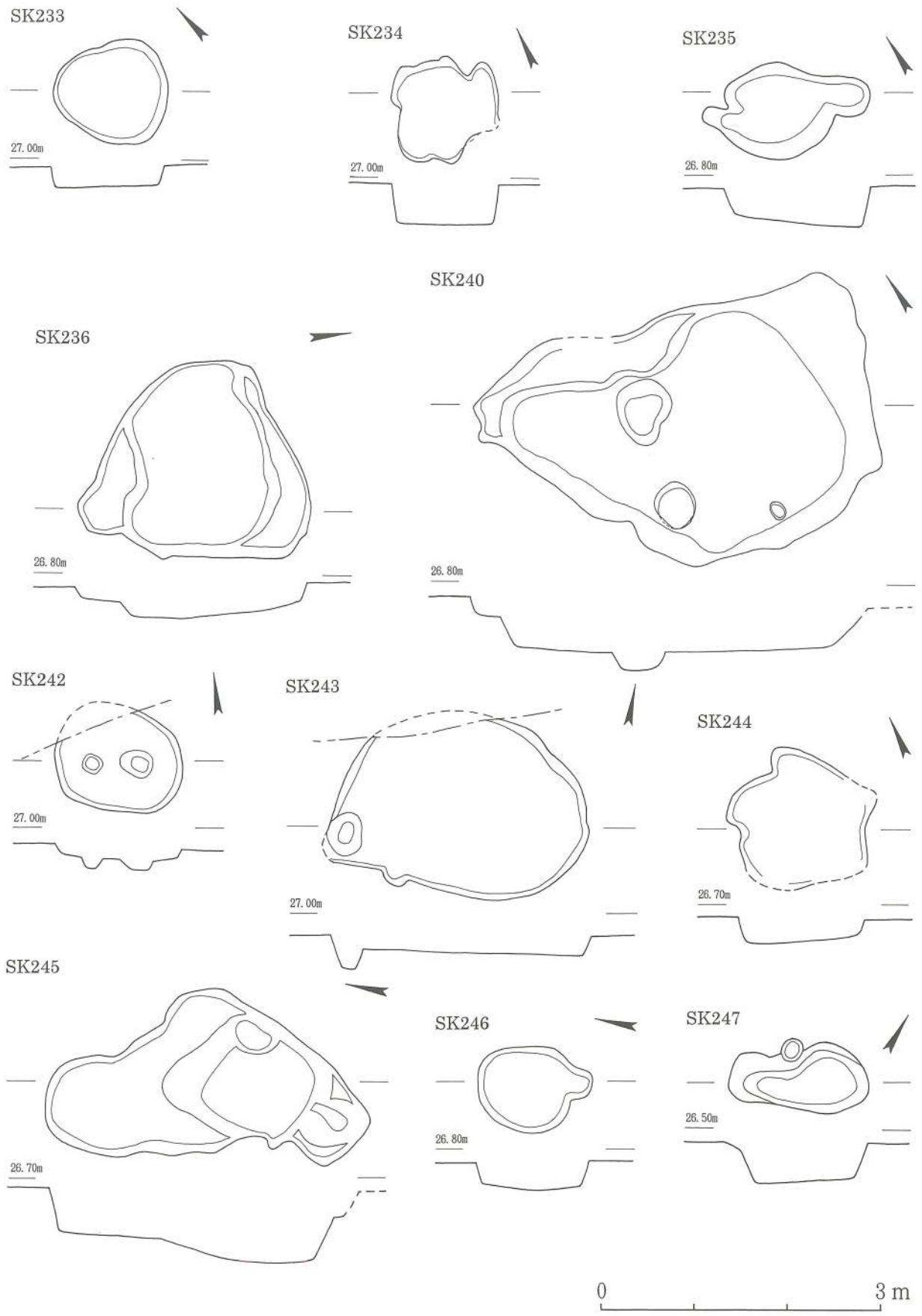


Fig. 32　屋形原遺跡2区 土壙実測図（3）SK-233～SK-236・SK-240・SK-242～SB-247（1/60）

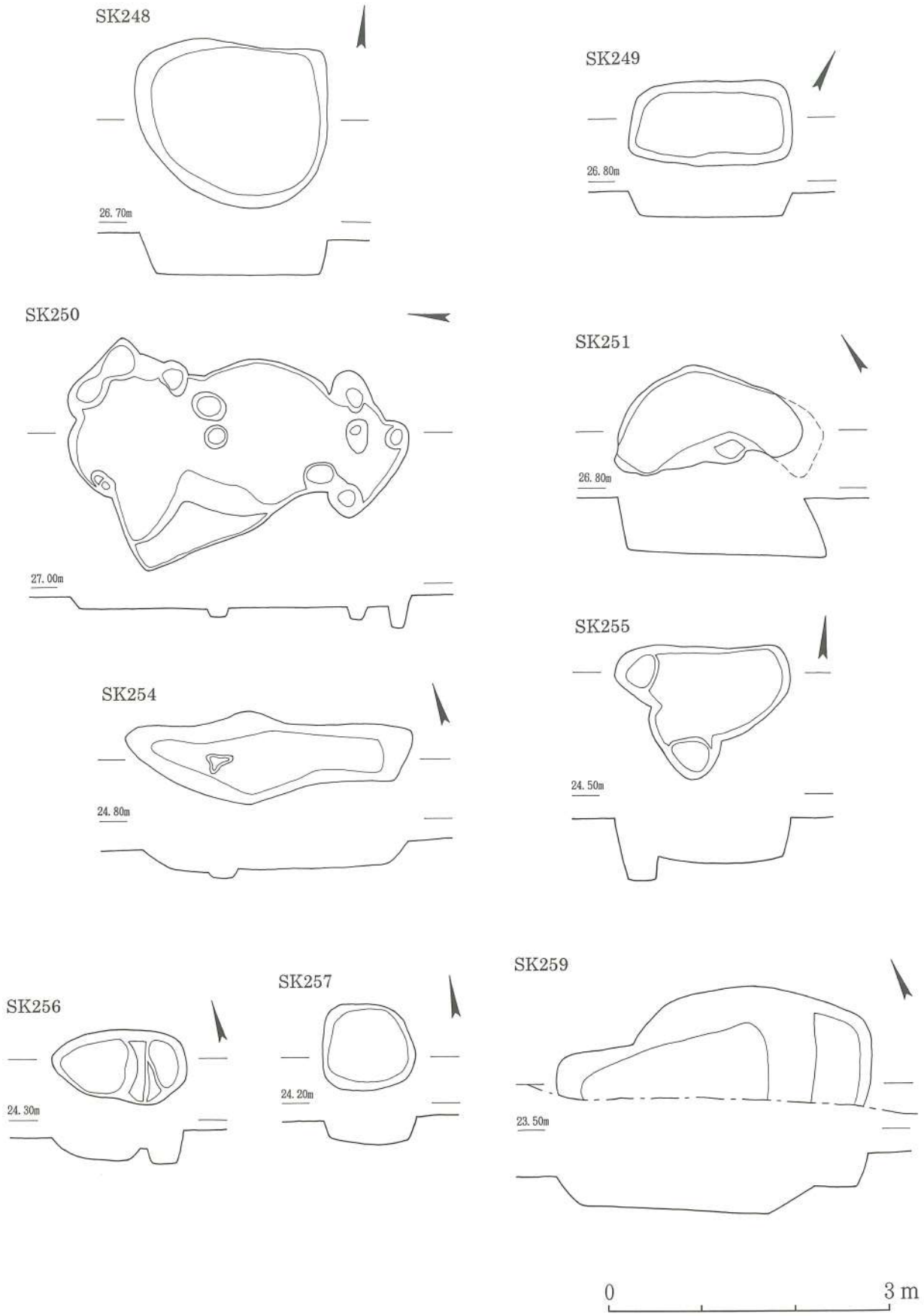


Fig. 33　屋形原遺跡2区 土壙実測図（4）SK-248～SK-251・SK-254～SK-257・SK-259（1/60）

4. 遺物 (Fig. 34～41・PL. 21～29)

屋形原遺跡２区の調査で各遺構から出土した遺物のうち図示できる遺物について、土器類・土製品については代表的なものを遺構ごとに報告し、その他の石器類は、器種ごとに報告したい。

SH-203出土土器 (Fig. 34・PL. 20)

１～５はいずれも縄文式土器の鉢類。１は浅鉢の口縁部、外反しながら開き、外面に細い沈線が３条めぐる。２は深鉢の口縁、外面に太く鈍い沈線が２条めぐる。３は浅鉢の口縁部で、短く直立し口縁端部が大きく外反する。４は鉢の腰部分、鈍く屈曲し胴部上位が開く。５は粗製の深鉢胴部、内面ナデ、外面に粗い条痕をもつ。

SH-204出土遺物 (Fig. 34・PL. 20、21)

６は須恵器の坏。浅い丸底の底部で、口縁は水平に張り出し、直立する断面三角形の短い受けをもつ。底面はヘラケズリの後ナデ。７は土師器の鉢または甕で、口縁は外反しながら大きく開き口縁端部は玉縁状を呈す。内面ヘラケズリ、外面ナデ。８は縄文式土器の浅鉢、浅く大きく開く体部が屈曲し、短い口縁が外反しながら開く。口縁部外面に２条の細い沈線がめぐる。内外面ともに丁寧なナデ。

SK-205出土土器 (Fig. 34・PL. 21)

９は縄文式土器の鉢。口縁下部に断面三角形の沈線が１条めぐり、内面には段をもつ。内外面ともに丁寧なナデ。

SH-206出土土器 (Fig. 34・PL. 21)

10は土師器の甑または甕の口縁部、口縁端部が小さく外反する。内外面ともにナデ。11は土師器の広口壺。肩部がすぼまり、短い口縁が直立する。内面ヘラケズリ、外面ナデ。12は須恵器の坏。底面は平底に近く、浅い体部は直線的に開く。口縁は小さく水平に張り出しやや内傾する断面三角形の短い受けをもつ。底面はヘラケズリの後ナデ。

SK-207出土土器 (Fig. 34・PL. 21)

13・15はいずれも須恵器。13は高台坏、体部はやや内湾しながら開き、口縁がやや外傾する。底面外周部分に太くしっかりとした「ハ」の字形に開く高台がめぐる。15は甕、頚部がくびれ、口縁は直線的に外反する。胴部内面同心円の、外面格子目の叩き目を残す。14は縄文式土器の鉢。算盤の珠状に屈曲する胴部で屈曲部上位に鈍い沈線が2条めぐる。

SK-209出土土器 (Fig. 34・PL. 21)

16～18はいずれも土師器。16は甑または甕の口縁部、頚部のくびれはなく、口縁が緩やかに外反し開く。内外面ともにナデ。17は広口壺？、肩部がややすぼまり直立する口縁がつく。内外面ともにナデ。18は高台坏。体部はやや外傾し立ち上がり口縁に至る。底面外周やや内側に鈍い高台が巡る。作りは大ぶり肉厚で、胎土、焼成ともに他の土師器類とは趣をことにしている。

19、20はいずれも須恵器。19は坏。底面は丸底で、浅い体部は直線的に開く。口縁は小さくやや上方に張り

出し内傾する受けをもつ。底面は回転ヘラケズリ。20は坏蓋。天井部は平坦で扁平なつまみをもつ。口縁端部は下方に小さくつままれている。

SK-211出土土器 (Fig. 35)

21は土師器の甕。頸部がくびれ、短い口縁が外反しながら開く。

SK-213出土土器 (Fig. 35・PL. 22)

22は土師器の甕。頸部のくびれはほとんどなく口縁が大きく開く。内面ヘラケズリ、外面ハケ目。

23～25はいずれも須恵器。23は坏。平底で体部は外傾し直線的に開き口縁に至る。24は高台坏。底部と体部の境界に明瞭な稜をもち、体部は直線的に外傾し立ち上がり口縁に至る。底面外周やや内側にシャープな高台が巡る。25は坏蓋。天井部は平坦で扁平なつまみをもつ。口縁は下方に折り曲げられ端部が小さく外側につまみ出されている。

SK-214出土土器 (Fig. 35・PL. 22)

26は土師器の手捏ね小型土器。厚い底部に短い口縁がやや外反しながら立ち上がる。灯明具として使用されたものか、口縁の遺存部内側2ヶ所煤が付着している。内外面ともにナデ。

SK-215出土土器 (Fig. 35・PL. 22)

27は土師器の高坏。太く広がる脚部は裾部でさらに広がる。坏部は平底で体部は深く直線的に外傾し口縁端部がやや外反し開く。体部の中位外面に断面三角形の凸帯が1条めぐる。内外面ともにナデ。

SK-216出土土器 (Fig. 35、36・PL. 22)

28～40はいずれも縄文式土器。28は外反し開く浅鉢などの口縁。口縁下部外面に浅い1条の沈線が巡る。29は外反しながら開く壺類の口縁。口縁は直下に1条の沈線がめぐり玉縁状を呈す。30は鉢類の口縁部、口縁直下に1条の細い沈線がめぐる。31は浅鉢の口縁部。浅く開く体部にさらに口縁が短く外反しながら開く。32は深鉢の胴部、算盤の珠の屈曲部を持つ。33も深鉢の口縁部、口縁端部を欠く。外反し開く頸部に直立する口縁がつく。口縁外面に2条の沈線が巡る。34は浅鉢？の口縁部。体部との境界で「く」の字形に屈曲、内径しさらに短く直立する。35は波状口縁の深鉢。広がる頸部に内湾する口縁がつき、「M」字形の突起を推定で4単もつ口縁外面には断続的に2条の沈線がめぐる。36も波状口縁の深鉢。外傾し開く口縁に推定で4単位の突起をもつ。口縁下部に1条の沈線がめぐる。37は浅鉢あるいは高坏の体部。浅く広がる体部に短く直立し端部が外反する口縁がつく。38は粗製の深鉢。胴部はほとんどくびれることなくやや外反する口縁がつく。39、40は深鉢などの底部。

SH-217出土土器 (Fig. 36、37・PL. 23・24)

41～49、56はいずれも須恵器。41、42は坏蓋。41は天井部がやや丸味をもち口縁がやや外反する。42は体部が深く天井部は丸味をもつ。天井部外面はナデ。遺存部の一部に鋸歯状のヘラ描きを持つ。43、44は坏。43は丸底で体部がやや内湾しながら立ち上がる。口縁はほぼ水平に張り出し内傾する受けをもつ。底部外面はヘラケズリ後ナデられ、ヘラ描きによる複数の線で「三」の字状の記号が描かれている。44は平底に近い浅い体部を

もち、口縁はやや上方に張り出し内傾する受けをもつ。45は高台坏。体部は直線的に外傾し開き口縁がやや外反する。底面外周やや内側に「ハ」の字形に開く短い高台がつく。46～48は坏蓋。46は天井部が垂れ下がった浅い体部で扁平な円盤状のつまみをもち、口縁端部が小さくつままれている47は天井部が丸味を帯び扁平なつまみをもち、口縁端部は下方に丸くつままれている。48は口縁端部が玉縁状を呈す。49は長頸壺などの胴部。底面外周に「ハ」の字形に開く高台がめぐる。56は球形の胴部にやや外反しながら開く口縁がつく甕。胴部内面には同心円の外面には格子目状の叩き目を残す。

50～54はいずれも土師器。50は丸底の坏。体部は浅く、口縁はやや内湾しながら立ち上がる。内外面ともにナデ。51は鉢。体部上位が内湾し口縁に至る内外面ともにナデ。52～54は甕。いずれも下膨らみの胴部で口縁が外反し開く。52、53は内外面ともにナデ。54は丸底で、内面ナデ、外面ハケ目。

55は鞴の羽口。やや胴が張った筒状の土製品で、先端部分は熱を受け灰色に変質し、一部に異物が溶着している。

SK-223出土土器 (Fig. 37、38・PL. 24、25)

57～66はいずれも縄文式土器の鉢類。57、58は浅鉢などの口縁部。端部が小さく外反する。それぞれ口縁外面には２条の沈線がめぐる。59は口縁部と体部の境界が「く」の字形に屈曲し口縁部が内傾する。60は算盤の珠状を呈す鉢の胴部。屈曲部上位に鈍い沈線が２条めぐる。61は朝顔状に開く体部に直立し端部が小さく外反する口縁がつく。口縁外面には２条の鈍い沈線がめぐる。内外面ともに丁寧なナデ。62・63はいずれも体部が大きく開き口縁に至る粗製の深鉢。62は遺存部に補修孔と思われる径３mmほどの焼成後の穿孔をもつ。64は鉢の底部。65は深鉢の口縁部で口縁外面に２条の鈍い沈線がめぐる。66は浅鉢あるいは高杯。浅い体部に大きく外反する段をもつ。遺存部では一段確認される。遺存部上端には粘土帯の接合部分で上位が欠落した痕跡が残りさらに上位に段をもち広がっていたものと思われる。また58の口縁破片が66と同一個体の可能性も高いが直接接合はできなかった。

67は須恵器の高台坏。体部はやや外傾し開き口縁がやや外反する。底面外周より内側に断面四角形のシャープな高台がめぐる。68は土師器の甕。下膨らみの胴部で頸部がややくびれ、内湾する口縁がやや開く。内面ナデ、外面ハケ目。69は一方の先端が小さく折り曲げられた棒状の把手様の形態を呈す土師質の土製品。断面は不整な楕円形を呈す。

SH-229出土土器 (Fig. 38・PL. 25)

70、71、74はいずれも土師器。70は小型の壺？、球形の胴部をもち口縁部は直立し端部が小さく外反し開く。内外面ともにナデ。71は甕または甑。胴部上位がくびれることなく口縁は外反し開く。内面ヘラケズリ？、外面ハケ目。74は、下膨らみの胴部をもつ甕、頸部がややくびれ口縁は外反し開く。内外面ともにナデ。

72は須恵器の坏蓋。天井部は丸味を帯び短い口縁が下方につまみ出されている。73は須恵器の坏。丸底で口縁は短くやや上方に張り出し、外反しながら内傾する受けをもつ。底面は回転ヘラケズリ。

SK-230出土土器 (Fig. 38)

75は土師器の甕。厚手のつくりで頸部はくびれることなく口縁が外傾し開く。

SK-231出土土器 (Fig. 38・PL. 25)

75は土師器の甕。底部は丸底を呈し胴部は下膨らみ頸部はくびれることなく口縁が外傾し開く。内面ヘラケズリ、外面ハケ目。

SK-232出土土器 (Fig. 38)

77は須恵器の瓶類の口縁部。78は土師器の皿。平底で口縁は外傾し立ち上がり、端部が小さく外反する。

SK-236出土土器 (Fig. 38、39・PL. 25、26)

79～87、91、92は須恵器。79、80は高台坏。79は体部がやや外反しながら開き口縁に至る。底面外周よりやや内側に「ハ」の字形に開く高台がめぐる。80は体部が直線的に外傾し開き口縁端部が小さく外側へつままれている。底面外周よりやや内側に「ハ」の字形に開く高台がめぐる。81は坏。平底で体部が直線的に外傾し開き口縁に至る。底面はナデ。82～84は皿。いずれも短い口縁がやや外反しながら外傾する。85～87は坏蓋。85は天井部が平坦で扁平なつまみをもつ。口縁端部が下方に小さくつままれている。内面にヘラ描きにより「×」字様の記号をもつ。86はやや深みをもつ体部で、天井部は平坦で扁平なつまみをもつ。口縁部は肥厚し玉縁状を呈し、口縁端部が下方につままれている。87は天井部が平坦で扁平なつまみをもつ。口縁端部が下方に小さくつままれている。91は甕の口縁部。92は高杯の坏部、体部は扁平で浅く、短い外傾する口縁がつく。

88～90、93、94は土師器。88～90は甕、88は頸部がくびれ口縁は外反し開く。内面ヘラケズリ、外面ハケ目。89は外傾し開く厚手の口縁部。90は、頸部のくびれがなく口縁が外反し開く。内外面ともにナデ。93は高坏の坏部と脚部上位。体部は浅く底面は平坦で短く上方につままれた口縁がつく。脚内部は中空。内外面ともにナデ。94は鉢。半球形の胴部に外反し大きく開く口縁がつく。内面ナデ、外面に一部ヘラケズリ痕を残す。

SH-237出土土器 (Fig. 39・PL. 26)

95～97はいずれも須恵器。95、96は坏蓋。体部は深く天井部は丸味をもつ。95はつまみをもつ。97は坏。丸底で体部は内湾しながら立ち上がる。口縁はやや上方に張り出し直線的に内傾する受けをもつ。底面は回転ヘラケズリ。

98は土師器の甑。胴部がそのまま開き口縁に至る。内面ナデ、外面ハケ目。

SH-238出土土器 (Fig. 39・PL. 27)

99、101、102はいずれも須恵器。99は坏蓋。体部は深く天井部は丸味を帯びる。口縁と体部の境界に1条の沈線がめぐる。101、102は甕の口縁部。102は肩部外面に細かい平行線の叩き目。

100は土師器の坏。丸底で体部が内湾し立ち上がり口縁に至る。内外面ともにナデ。103は土師器の甕。頸部のくびれは小さく口縁が外傾しやや開く。内外面ともにナデ。

SK-240出土土器 (Fig. 39、40・PL. 27、28)

104～111、119はいずれも須恵器。104、105は坏蓋。いずれも天井部が平坦で扁平なつまみをもつ。口縁端部が下方に小さくつままれている。106～108は高台坏。106は体部が大振りで深く、底面は高台より下に垂れ下がっている。体部はやや外反しながら開き口縁に至る。底面外周に「ハ」の字形に開く小さい高台がめぐる。

107は体部が内湾しながら立ち上がり口縁部がやや外傾する。底面外周よりやや内側に「ハ」の字形に開く高台がめぐる。108は体部が深く、体部は直線的に外傾して開く。底面外周よりやや内側に「ハ」の字形に開くシャープな高台がめぐる。109は坏。体部が直線的に外傾して開き口縁に至る。底部のみ明灰色を呈し体部位上は明黄褐色を呈す。110、111は皿。いずれも短い口縁がやや外反しながら外傾する。119は円面硯。硯部分の外周が一部遺存している。

112～118はいずれも土師器の甕類。112は頸部のくびれがなく口縁が外反し大きく開く。他は頸部がくびれ外傾あるいは外反する口縁をもつ。113、115、118は内面ヘラケズリ、外面ナデ。114は内外目ともにナデ。

SH-241出土土器 (Fig. 40・PL. 28)

120～122、125は土師器。120～122は坏。120、121は平底で体部はやや内湾しながら立ち上がり口縁に至る。122は平底に近い丸底で口縁部の外への張り出しは弱く内傾した受けがつく。125は甕、口縁が外反し大きく開く内外面ともにナデ。

123は須恵器の坏蓋。体部は浅く、天井部は丸味を帯びるが口縁が外へ開く。124は須恵器の高坏の脚部裾。遺存部には径２mm程の小孔が焼成前に複数穿孔されている。

SK-248出土土器 (Fig. 40、41・PL. 28)

126～136はいずれも須恵器。126～130は坏類。126は体部が内湾し口縁の張り出しは水平で小さく、外反しながら内傾する受けがつく。127は体部は内湾し口縁がやや上方に張り出す。内傾する直線的な受けがつく。128は口縁部破片。129、130は、丸底で体部は浅く、体部と口縁部の境界に稜をもち、口縁は外反しながら開く。131、134は高坏の脚部。134は124と同様に径２mm程の小孔が焼成前に複数穿孔されている。132、133は甕などの口縁部。135は瓶の口縁。頸部上位に櫛描きの細かい波状文が施文されている。136は器台などの一部であろうか朝顔状に開く口縁部外面に櫛描波状文が施文されている。

137は土師器の甕。頸部がくびれ口縁が外反しながらほぼ水平に大きく開く。内外面ともにナデ。

SK-254出土土器 (Fig. 41)

138は中世土器の土鍋。139は縄文式土器の底部。

SK-255出土土器 (Fig. 41)

140は土師器の甕。頸部がくびれ口縁は外反しながら開く。内面ナデ、外面ハケ目。

石器類 (PL. 29)

１～３は、石鏃。いずれもサヌカイト製。１は、平基式。２は柳葉形、３は凹基式。

４～６は石錘と考えられるもので扁平な蛇紋岩系統の石材。４、５は、上面観はやや不整な円形を呈す。石材の左右（写真）に、網に結びつけるための小さな打ち欠きをもつ。６は、上面観は矩形に近い形を呈すと考えられる石片。遺存部に1ヶ所糸を止めるための打ち欠きが残る。

７は、石槍などの先端。両側辺は細かな調整が加えられ刃部が作り出されている。断面は中央が扁平で両側辺が薄い凸レンズ形を呈す。サヌカイト製。

8、10はいずれも砂岩製の砥石と考えられる石製品。8は平面観、断面ともに長方形を呈す写真上方が厚く下方に行くに従って薄くなる楔状を呈す。携帯用の砥石と考えられる。写真下辺はアールをもち主にこの部分が物を磨くために使用されている。10は厚さ2cm程の矩形を呈す板状の石材で、写真左辺および下辺を欠く。表裏両面が砥石として利用されている。

9は花崗岩室の石材を用いた両刃の磨製石斧、素材を打ち欠きある程度形を整えた上で全体を磨いている。断面は楕円形を呈す。

各石器の法量などは、下記一覧表に記す。

Tab. 6　屋形原遺跡2区 出土石器等一覧表

遺物番号	器　種	出土遺構	法量（cm・g）				材質	備考
			長さ	幅	厚さ	重量		
1	石鏃	SK-213	3.0	1.7	0.5	1.7	サヌカイト	
2	石鏃	SK-215	4.4	1.5	0.4	3.8	サヌカイト	
3	石鏃	SK-216	2.7	1.4	0.4	1.2	サヌカイト	
4	石錘	SK-216	9.6	8.5	1.0	130.4	蛇紋岩系	
5	石錘	SK-216	9.5	8.7	1.2	134.1	蛇紋岩系	
6	石錘	SK-216	※7.3	※4.9	1.8	※77.5	蛇紋岩系	
7	石槍	遺構外	※6.9	※5.4	1.3	※47.0	サヌカイト	
8	砥石	SK-213	※7.1	2.7	0.9	※28.5	砂岩系	
9	石斧	SH-217	10.3	4.9	1.8	140.1	花崗岩室	
10	砥石	SK-248	※14.6	※11.7	2.1	※647.0	砂岩系	

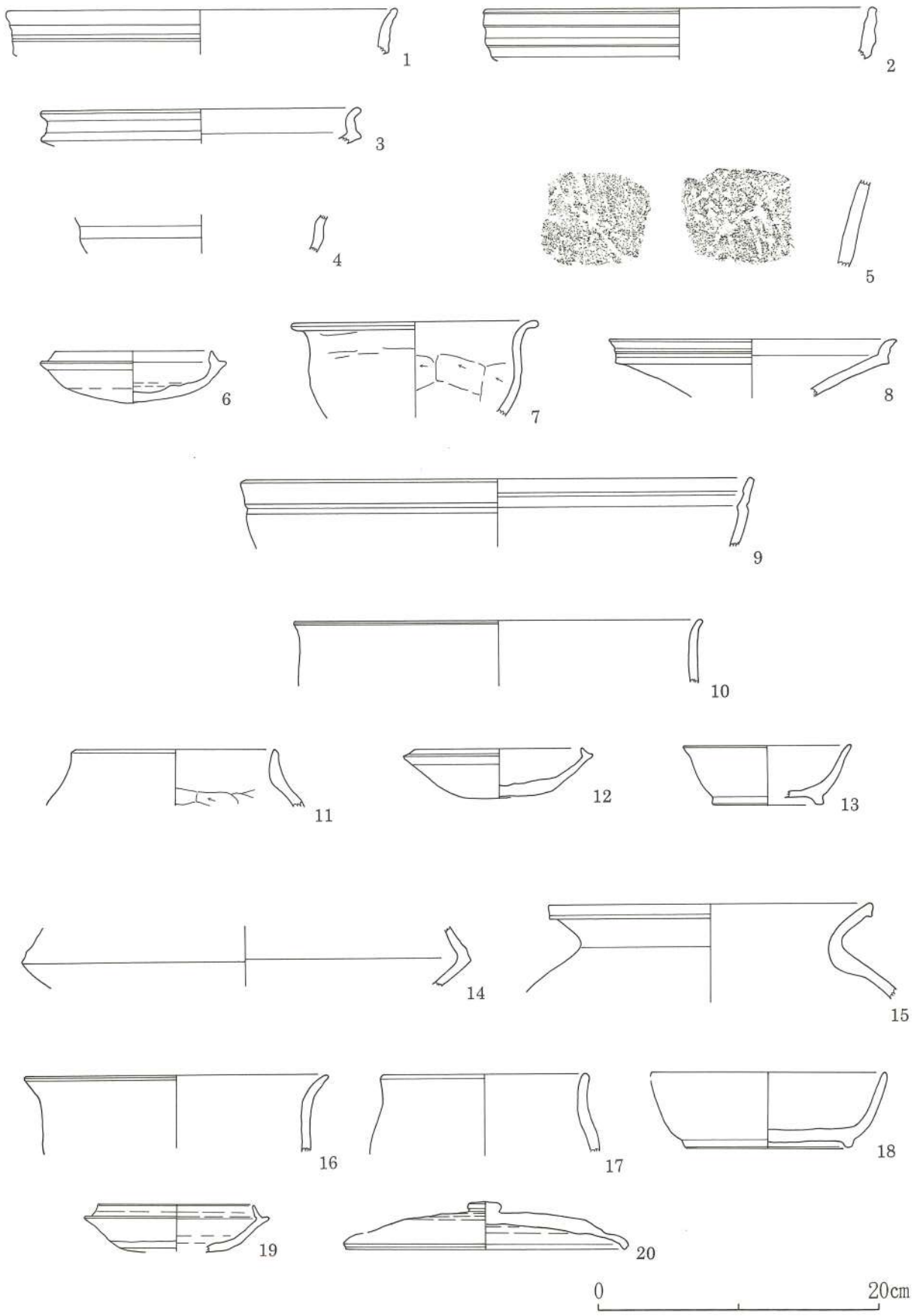


Fig.34　屋形原遺跡2区 出土遺物実測図（1）（1/4）

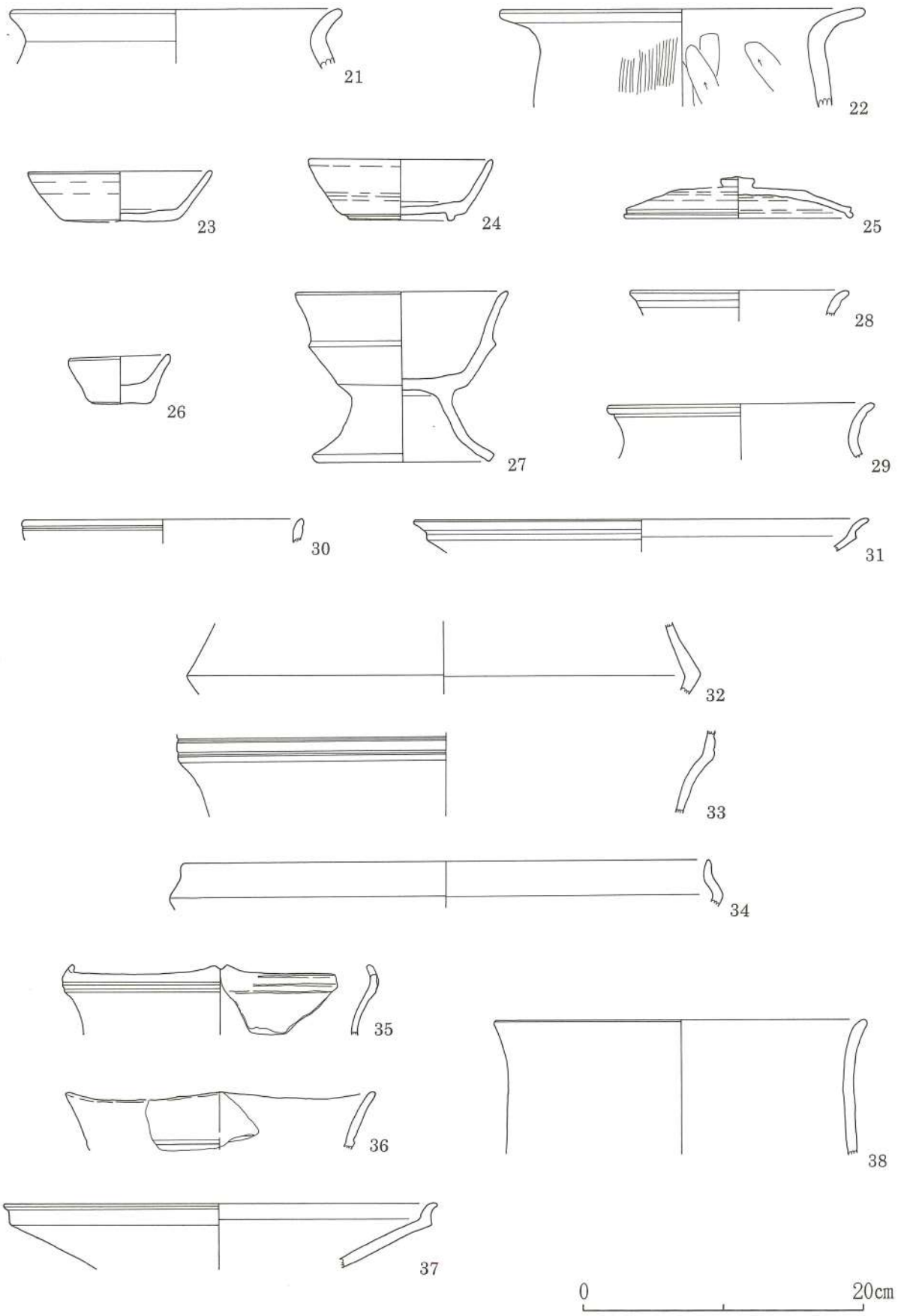


Fig.35　屋形原遺跡2区 出土遺物実測図（2）（1/4）

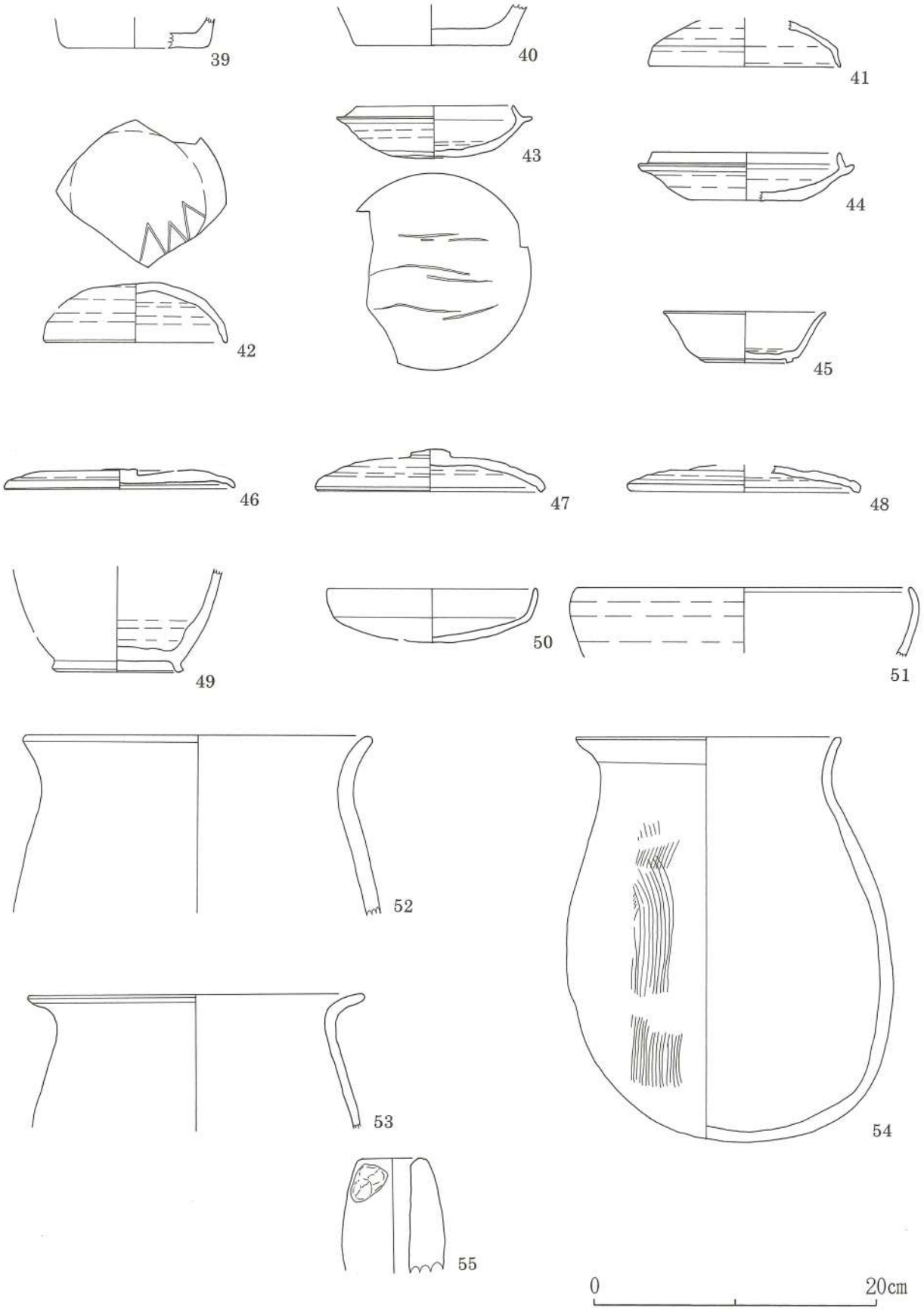


Fig.36　屋形原遺跡2区 出土遺物実測図（3）（1/4）

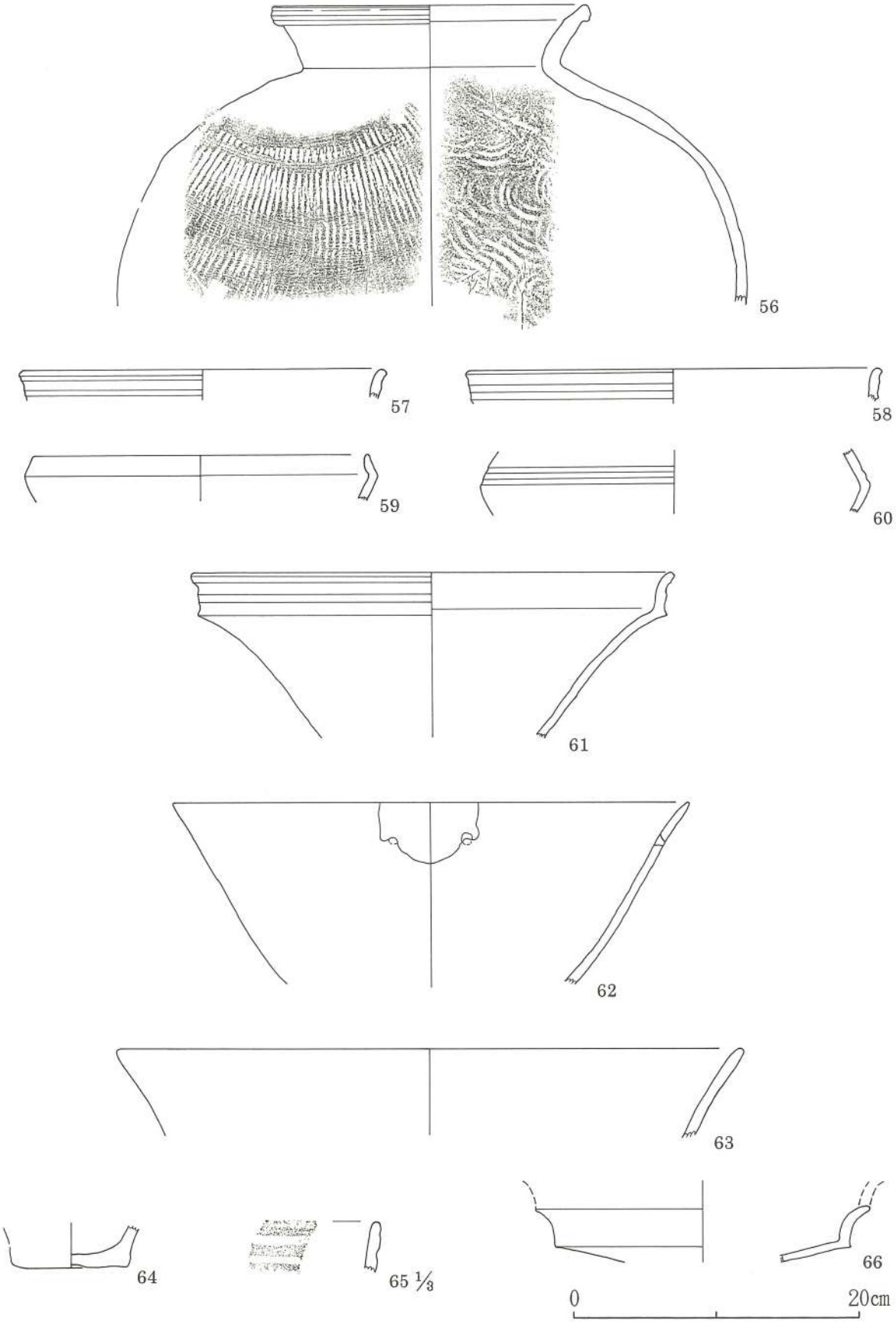


Fig.37　屋形原遺跡2区 出土遺物実測図（4）（1/4）

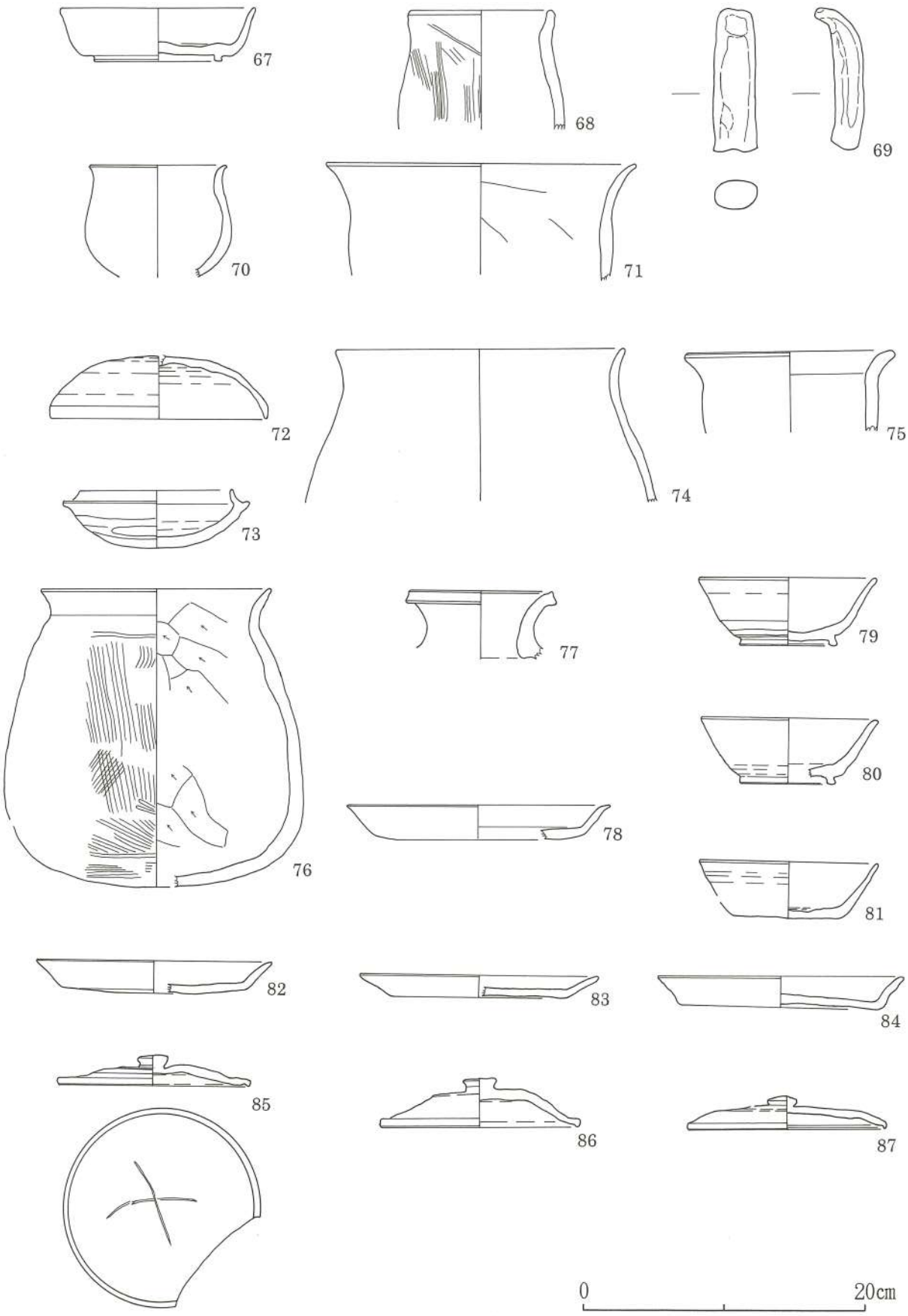


Fig.38　屋形原遺跡2区 出土遺物実測図（5）（1/4）

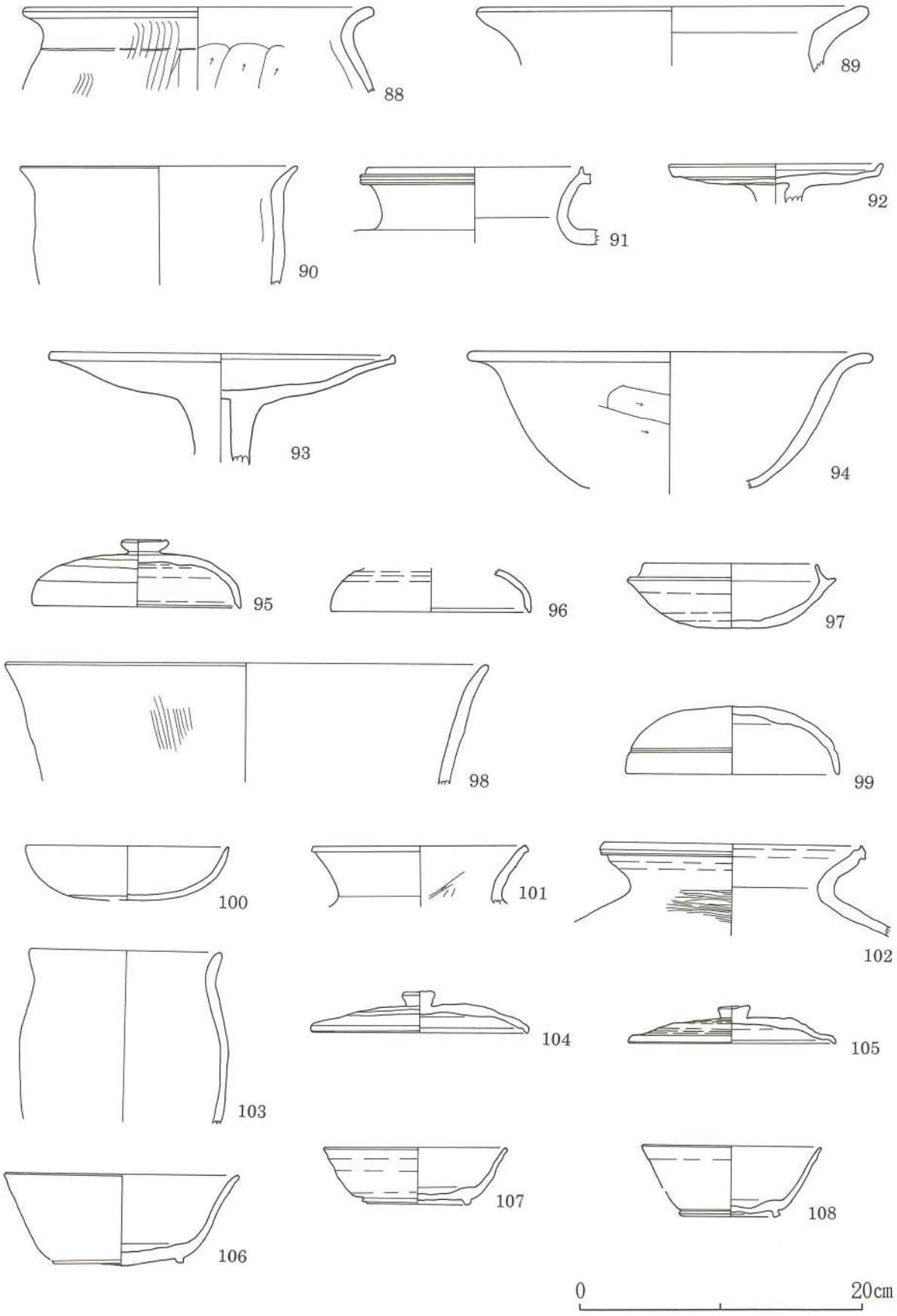


Fig.39　屋形原遺跡2区 出土遺物実測図（6）（1/4）

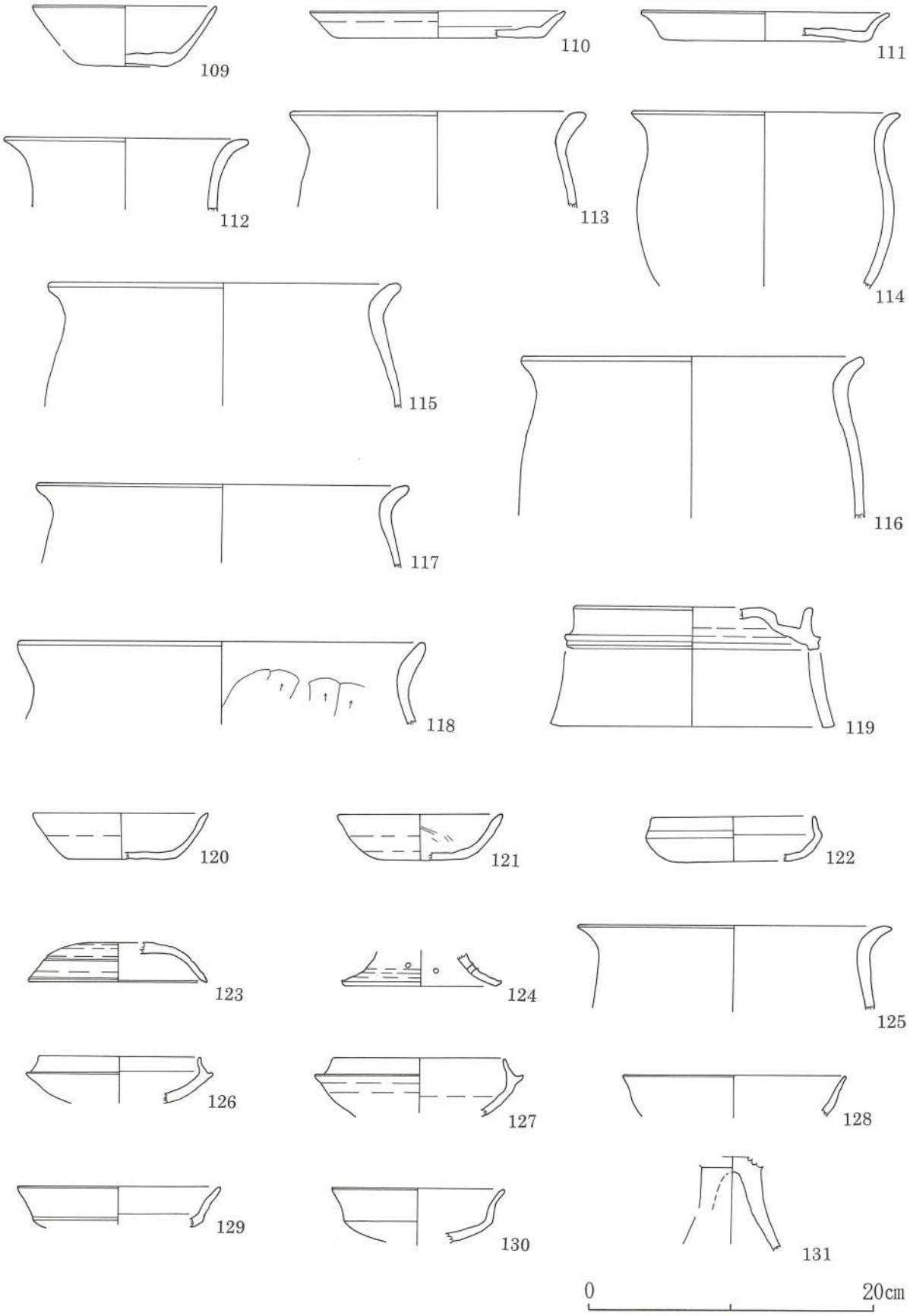


Fig.40　屋形原遺跡2区 出土遺物実測図（7）（1/4）

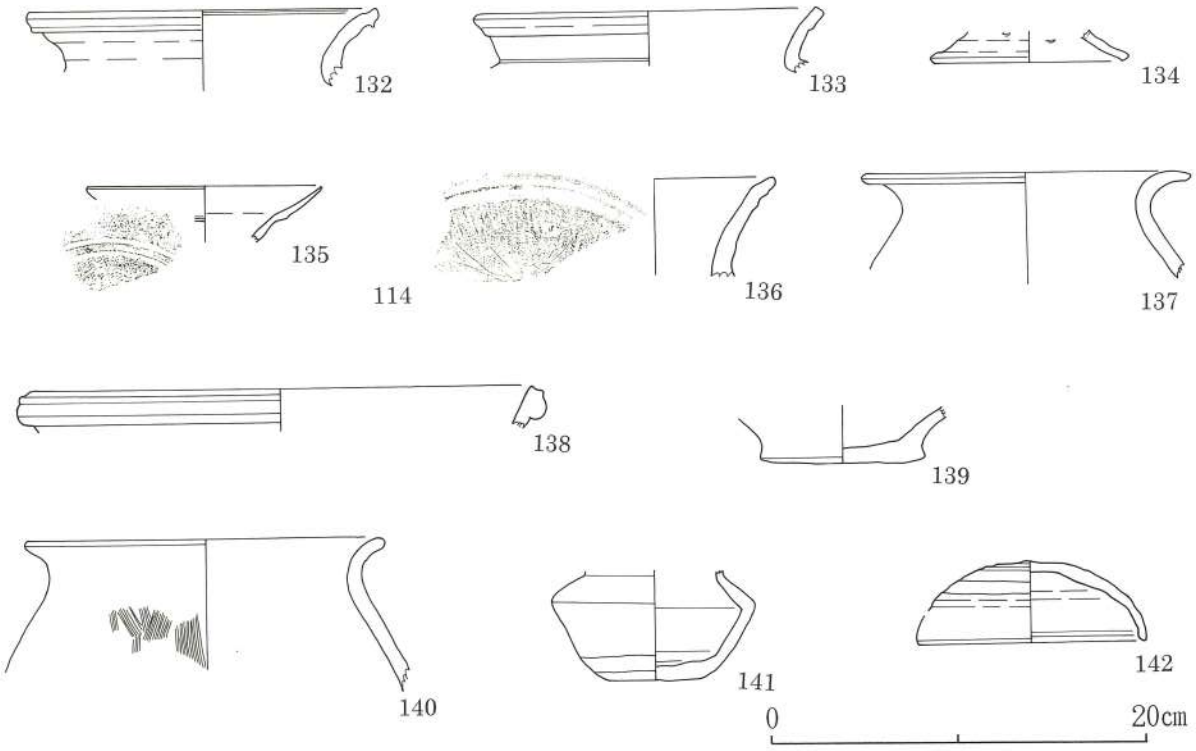


Fig.41　屋形原遺跡2区 出土遺物実測図（8）（1/4）

Ⅵ. まとめ

今回の堤六本谷遺跡および屋形原遺跡の調査で検出された遺構や遺物は、量的には決して多いとはいえないが、縄文時代、古墳時代、それに奈良時代以降の遺構、遺物が検出された。以下に調査の所見を列記しまとめとしたい。

堤六本谷遺跡の範囲と堤土塁跡について

前述のように堤六本谷遺跡は、堤土塁北方の青柳丘陵からヤツデの葉状に派生する低位段丘の支丘上に位置しており、今回の農業基盤整備事業に伴う確認調査で、新たに広がりが確認された遺跡であるが、遺構、遺物の検出範囲が標高25mの等高線とほぼ一致している。

ここで堤土塁の施設のうち、東側土塁の東端、八藤丘陵と接する部分にある「野越し」と地元で呼んでいる呼ばれる溝状の施設の基底部の標高が24.5mであることに注目したい。「野越し」は溜池などの水位調節の施設の当地での呼称であるが、堤土塁にも同様の呼称で呼ばれる溝が存在する。これを仮に、増水時に堤防（土塁）の決壊を防止するため、余分な水をオーバーフローさせるための施設と想定した場合、堤土塁の北側の谷底平野部一帯に標高24.5mの等高線を水際線とした人造湖を想定できるのではないだろうか。

確認調査においても標高24m以下の耕地部分では、遺構、遺物はほとんど検出されず、耕作土の下部には、砂層、砂質粘土層などの水性堆積物が堆積していたことなど考え合わせると、堤土塁の後背地にはある時期まで水が貯えられていた可能性が高いといえよう。

堤六本谷遺跡において出土の「藥」の文字をもつ土師器について

平成２年度の５区の調査において、「藥」のヘラ描き文字をもつ土師器が2点出土した（本文ｐ24・Fig.13参照）。「藥」のヘラ描き文字をもつ遺物は、平成５年度の八藤遺跡11区の調査においても住居址や土壙から出土している。今回39として報告した土師器は、八藤遺跡で検出された土師器と酷似しており、同一の性格を持つものと考えられる[註]。

註　　『八藤遺跡Ⅲ』　上峰町文化財調査報告書第16集　上峰町教育委員会　1999

堤六本谷遺跡において検出された近世「大鳥居」集落について

今回の堤六本谷遺跡の調査では、ここに報告してきた中世以前の土壙などの遺構のほか、近世後期（18世紀後半～19世紀前半）の所産と考えられる土壙、溝跡のほかピットなどかなりの量の遺構が検出されている。これらは、かつて堤集落から派生し、以前この区域にあったと言われている近世「大鳥居（ううどい）」集落の遺構であろうことは想像に難くない。

本来ならば、この近世の遺構、遺物についてもここで報告すべきではあったが、誌面の都合で割愛させていただいた。これらについては、調査に携わったものの責務として、今後折を見て報告していきたい。

屋形原遺跡の縄文時代の遺物について

SH-203やSK-216から縄文時代後期から晩期にかけての土器がまとまって出土した。特にSK-216から石錘と考えられる石器がまとまって出土しているが、上峰町内で過去に漁撈具が発見されたのは、不時発見の例を含め

ても今回が初めての例であり、比較的縄文時代遺跡の調査例に乏しいこの地域にあって、今後、当時の生業のあり方を考える上で貴重な資料と言えよう。

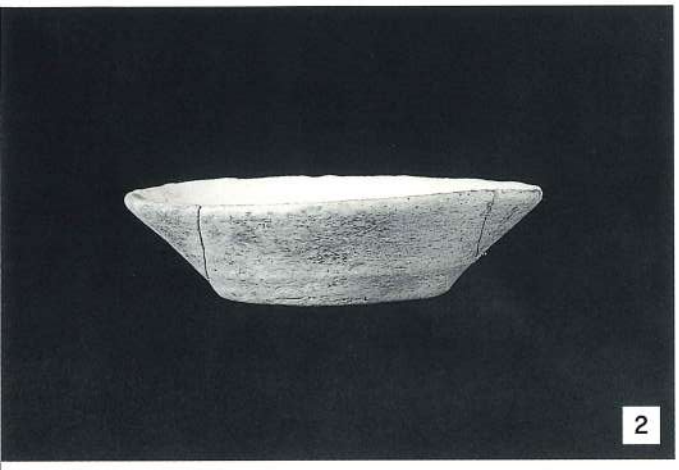
屋形原遺跡の古墳時代の遺構・遺物について

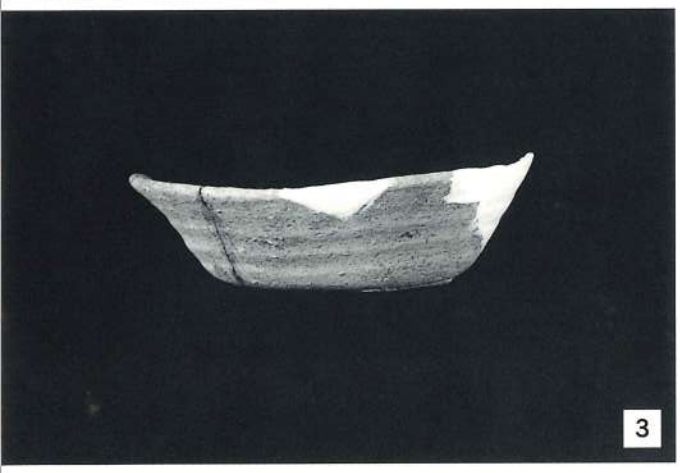
鳥栖市から大和町にかけての佐賀県東部では、山麓部から南へ向って派生する中位、低位の洪積世段丘上に、弥生時代の集落・墳墓を中心に各時代の遺跡が立地している。そして、これらの遺跡が立地する中位、低位の段丘の後背地にあたる北方の高位段丘や山麓部には、古墳時代後期の円墳が点在し、尾根や谷を単位として古墳群を形成している。上峰町内においても、県道鳥栖川久保佐賀線、九州横断自動車道付近に屋形原、奥の院、鎮西山南麓、青柳、新立、谷渡などの古墳群の存在が知られている。しかし、これまで、町内のこれらの古墳群を残した集団の集落については、調査例も少なく不明な点も多かったといえる。

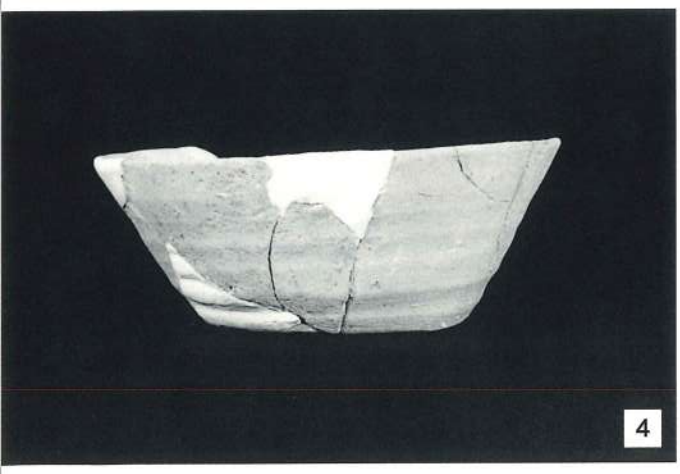
このようななか、今回の調査においてSH-204、SH-206、SH-217、SH-237、SH-241、SK-209、SK-215、SK-248から古墳時代後期の土師器、須恵器がまとまって検出されていることから、古墳時代後期にここに当時の集落が営まれていたものと考えられる。さらに想像を逞しくすると、本遺跡北側の同一丘陵上の屋形原古墳群を残した集団の集落の一部と考えることができよう。町内では、古墳時代の集落の調査例が弥生時代や奈良時代の遺跡に比べて少なく当時の状況についても不明な点が多いのが実情である。今回のような調査例の増加をまって、上峰町内の古墳時代の社会の動向や山麓部に残された古墳時代後期の各古墳群とそれらを残した集落との関連を考えていきたい。

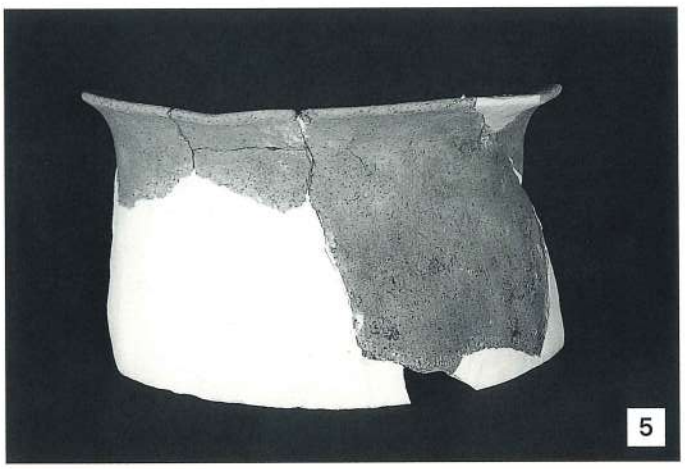
図　　版

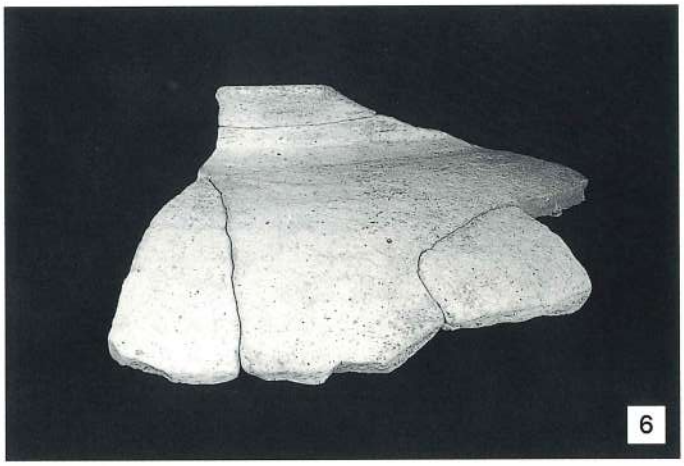
1. SD-406（西より）
2. SK-407（北より）

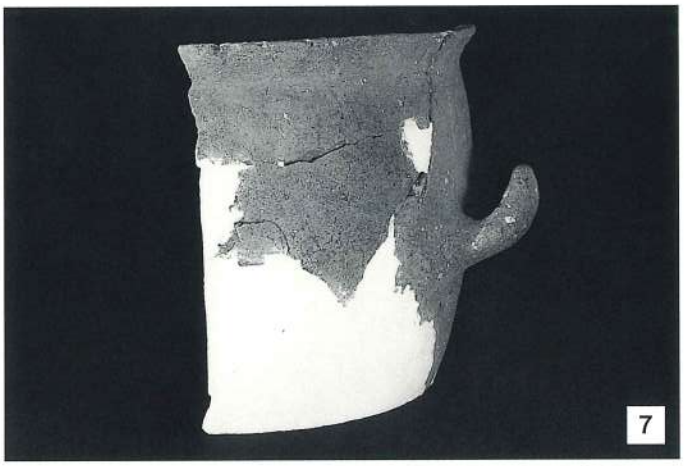


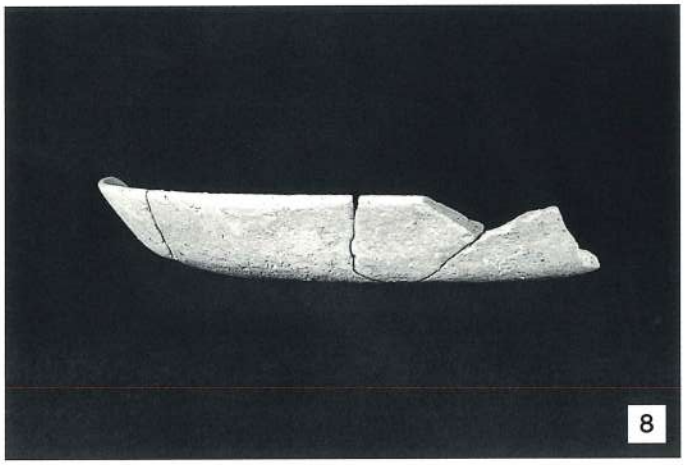






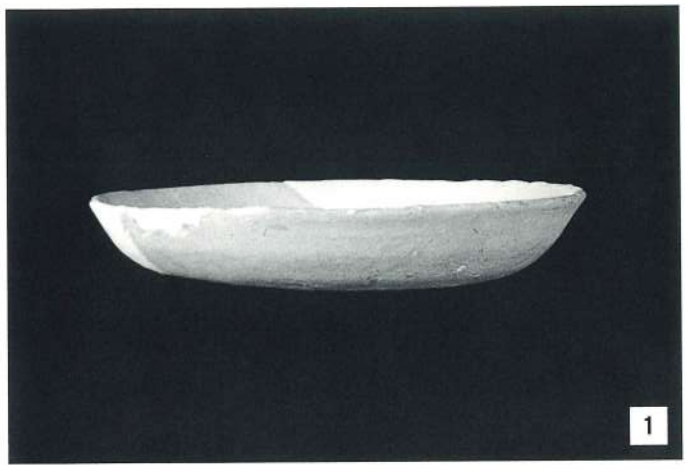


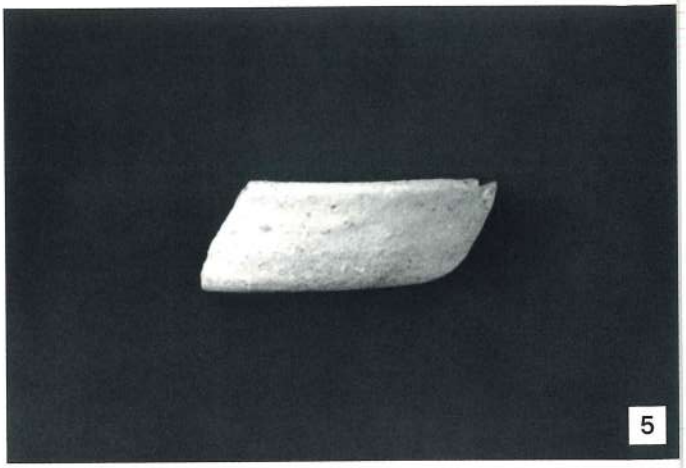


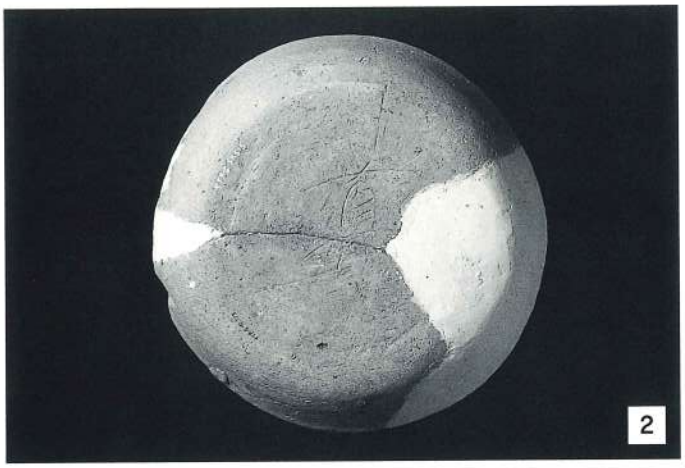


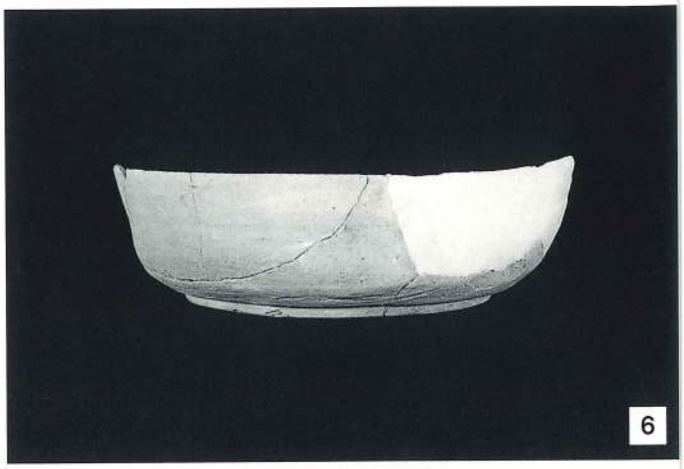
1. 1　SK-502
2. 2　SK-502
3. 4　SK-502
4. 5　SK-502

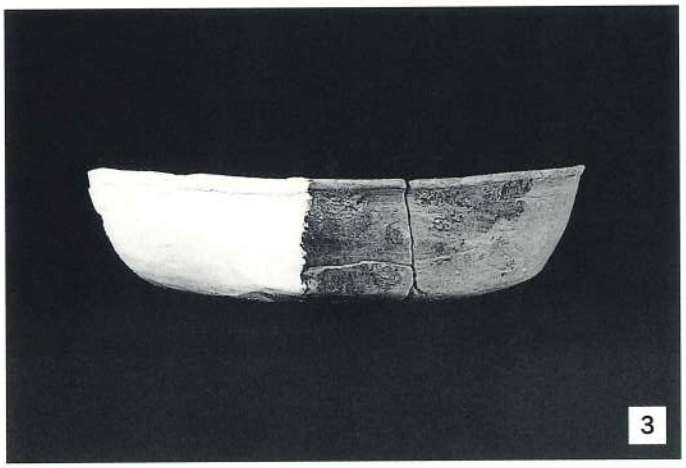
5. 23　SK-515
6. 32　SK-515
7. 35　SK-515
8. 38　SK-515

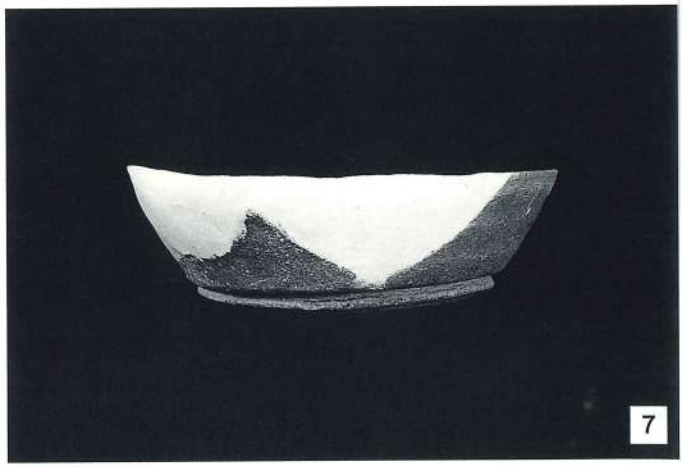


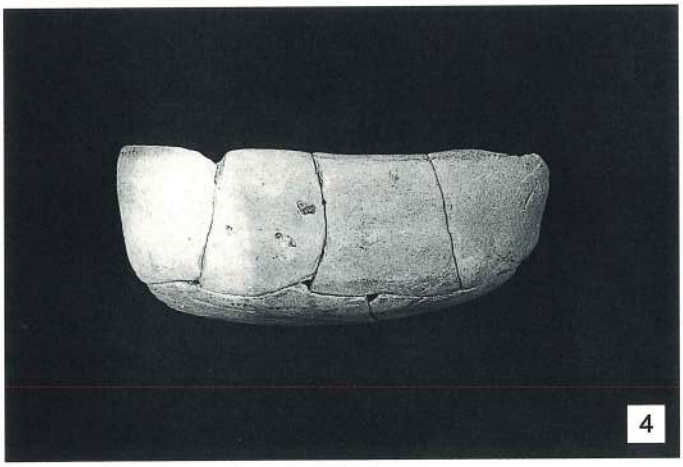


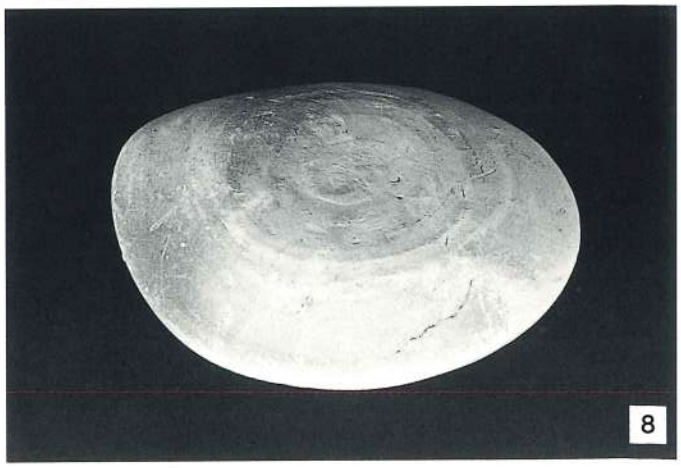




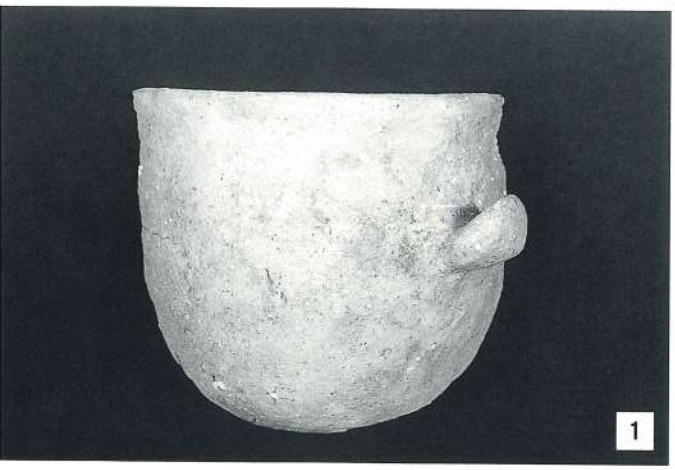


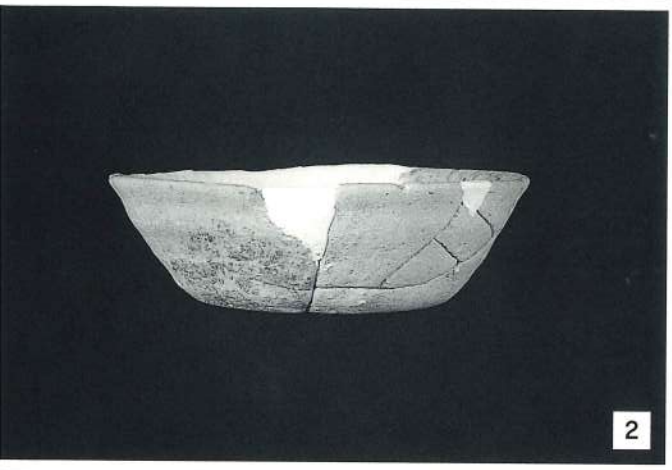


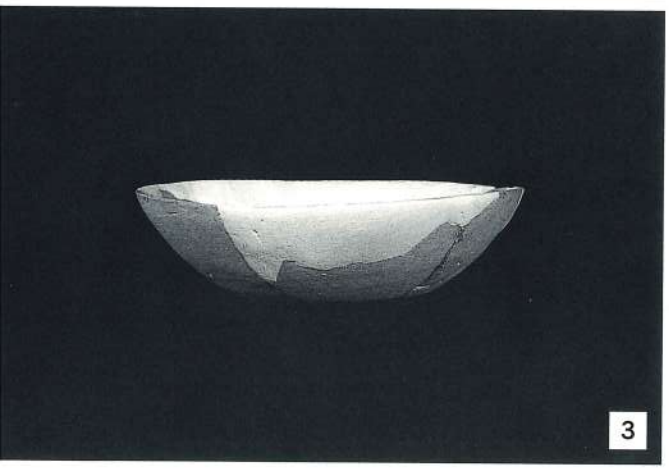


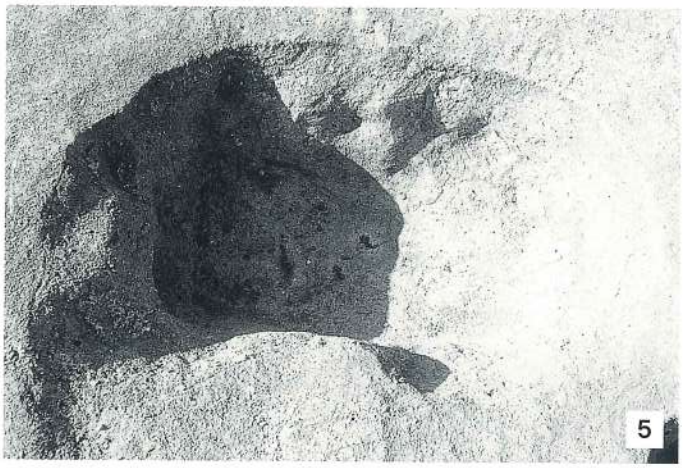


1. 39　SK-515
2. 39　SK-515
3. 41　SK-515
4. 43　SK-515
5. 44　SK-515
6. 50　SK-515
7. 51　SK-515
8. 53　SK-515









1．1　SK-607

2．4　SK-608

3．5　SK-608

4．SK-901（北西より）

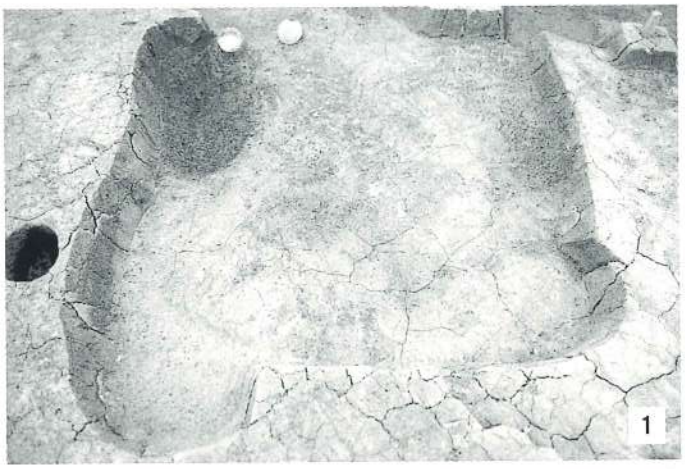
5．SK-902（南東より）

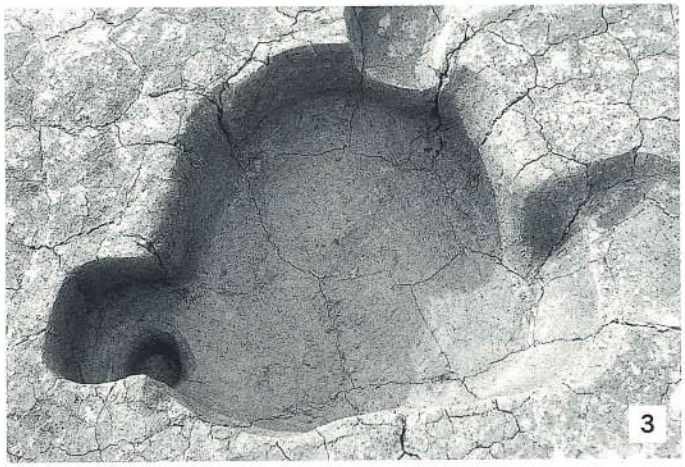
1. SH-203（南東より）
2. SH-204（南東より）
3. 前）SH-206・
   奥）SK-204（北より）

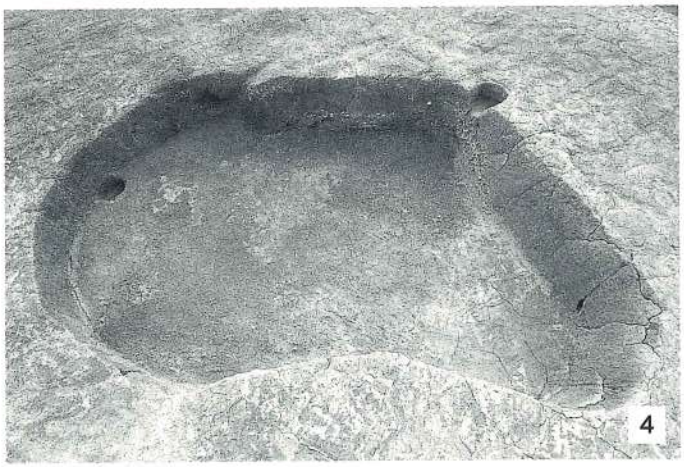
1. SH-206（南東より）
2. SH-217（南東より）
3. SH-229（南東より）

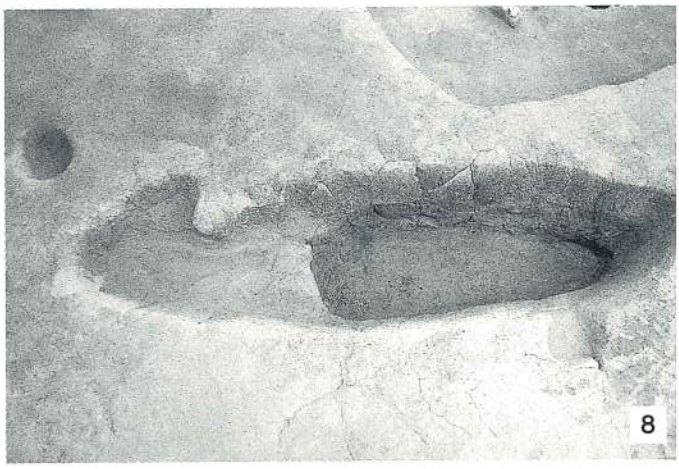
1. SH-231（南東より）
2. SH-237（南より）
3. SH-238（東より）

1. SH-241（南東より）
2. SB-236（北西より）

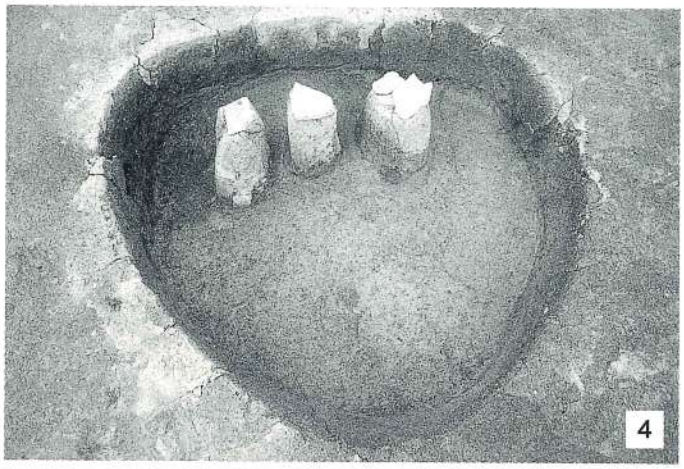


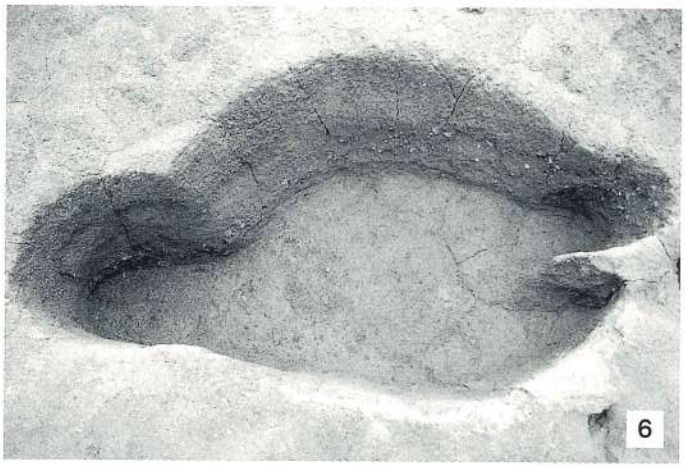


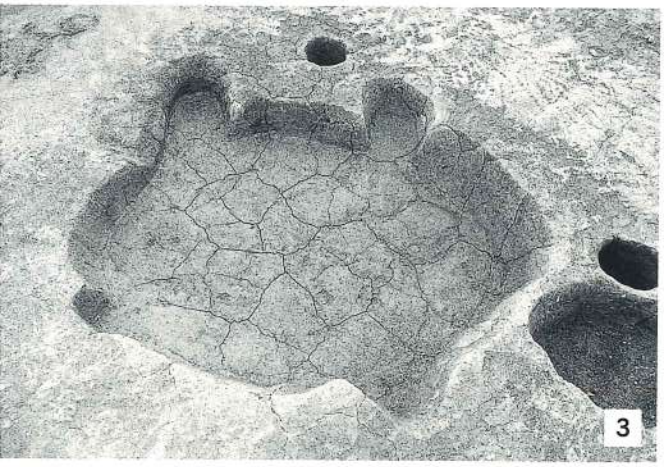




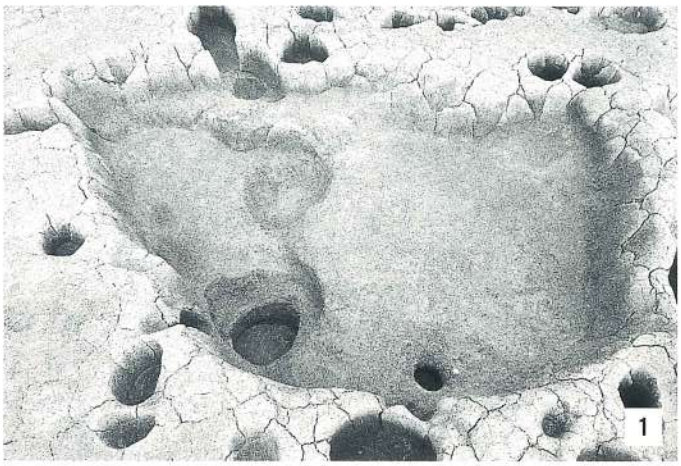
1. SK-209（北より）
2. SK-209遺物出土状態
3. SK-211（東より）
4. SK-212（北より）
5. SK-213（南西より）
6. SK-214（南東より）
7. SK-215（北より）
8. SK-224（北西より）

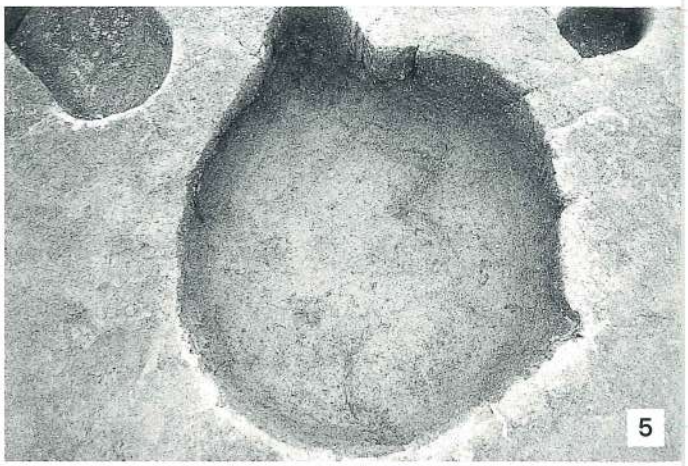


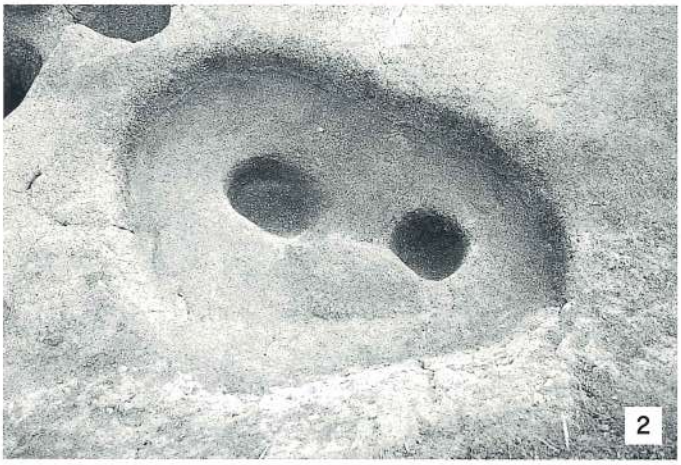


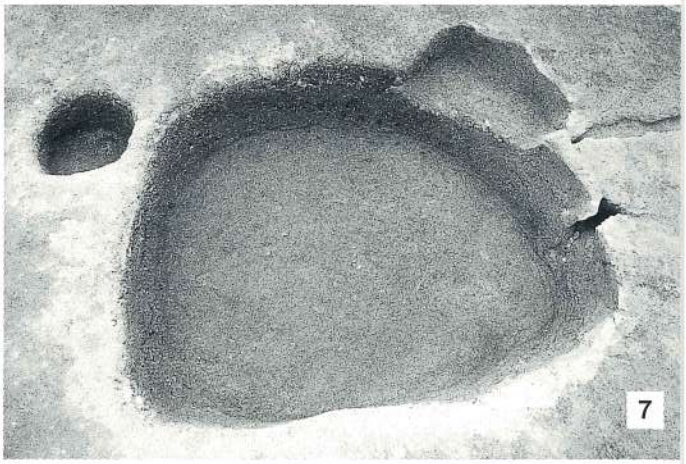


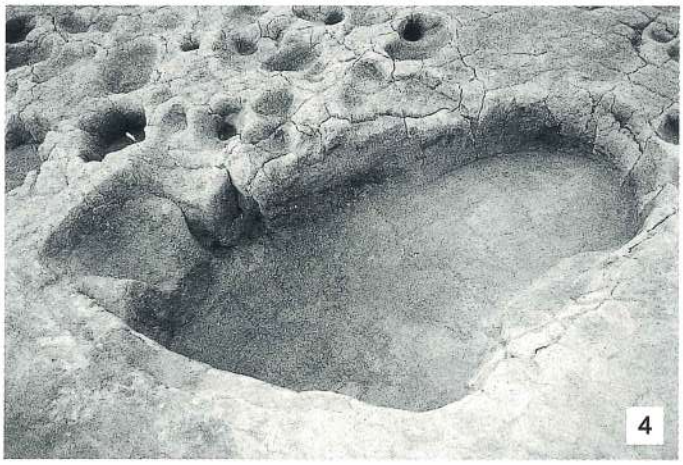
1. SK-223（北東より）
2. SK-230（北西より）
3. SK-232（南西より）
4. SK-233（南西より）
5. SK-234（南西より）
6. SK-235（北東より）
7. SK-236（南東より）

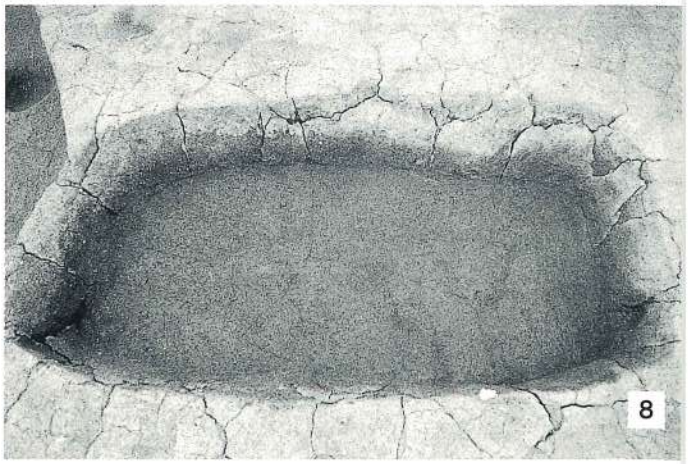




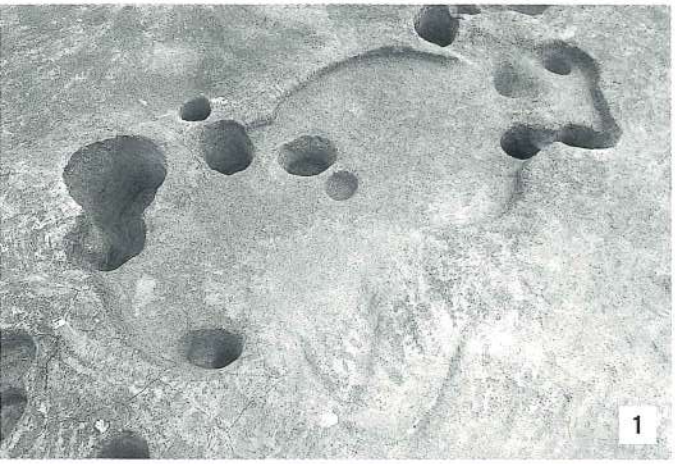


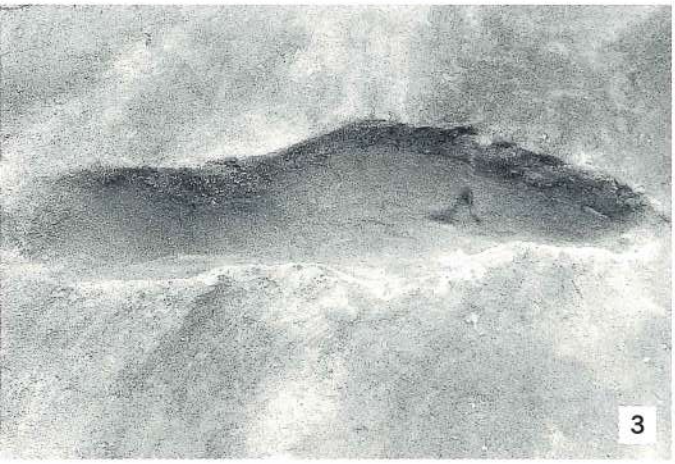


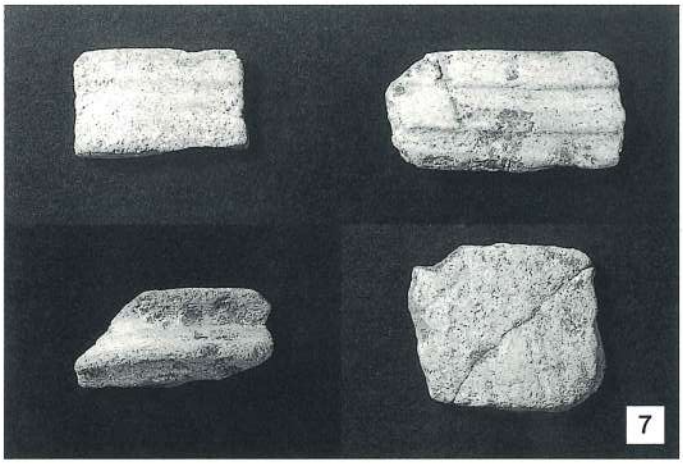


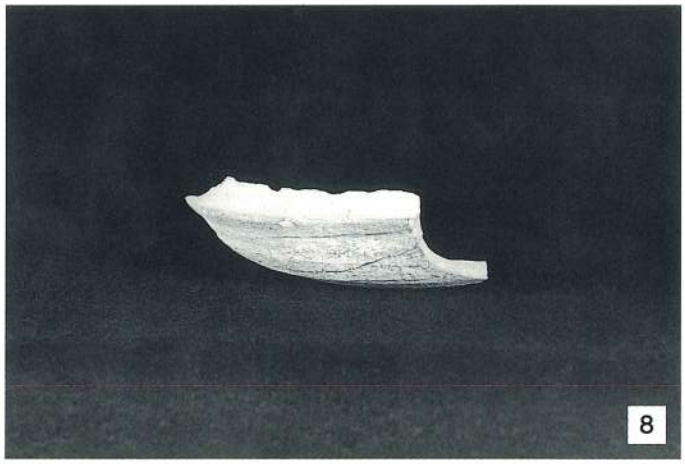


1. SK-240（南より）
2. SK-242（北より）
3. SK-243（北より）
4. SK-245（東より）
5. SK-246（北より）
6. SK-247（南東より）
7. SK-248（北東より）
8. SK-249（南東より）

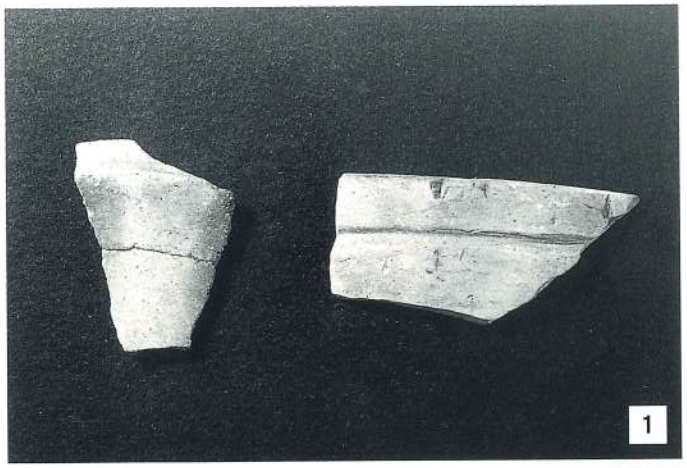


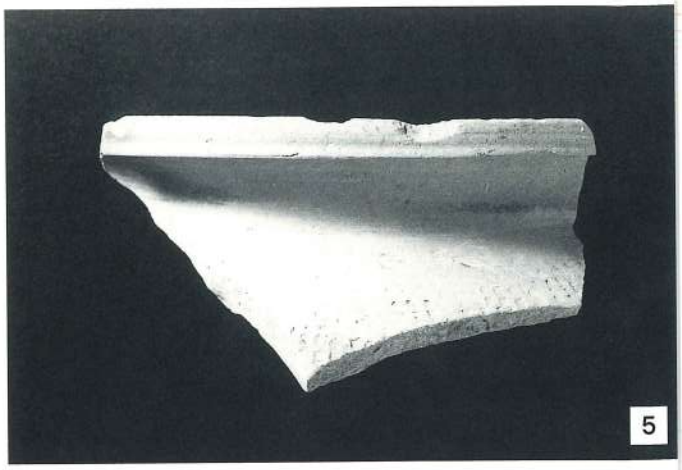


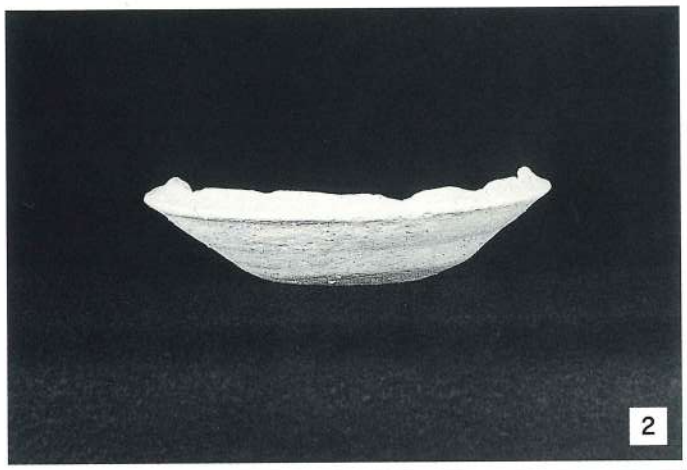


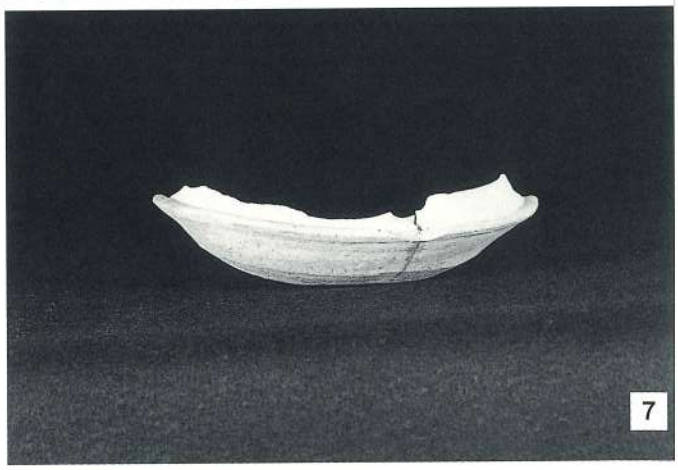


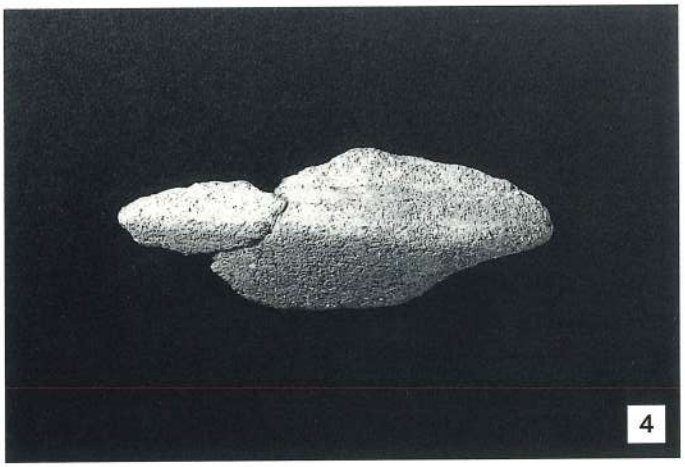
1. SK-250（北西より）
2. SK-251（南西より）
3. SK-254（北東より）
4. SK-255（北東より）
5. SK-256（北東より）
6. SK-257（北東より）
7. 上）1・2　下）5・3　SH-203
8. 6　SH-204

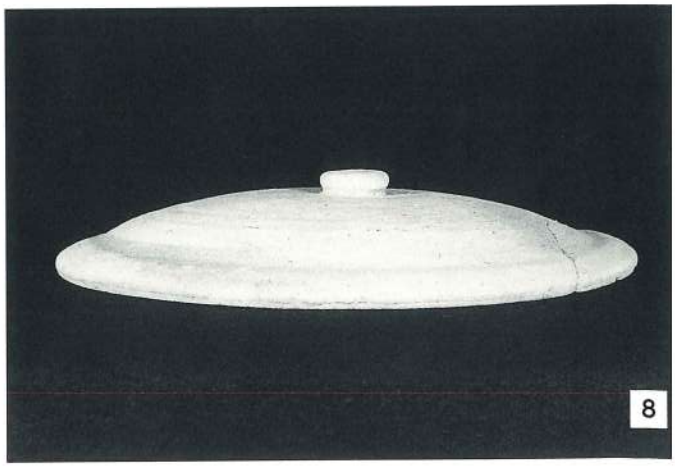




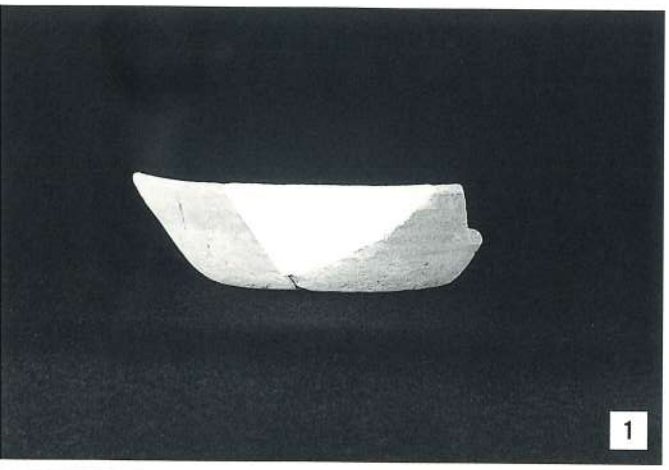


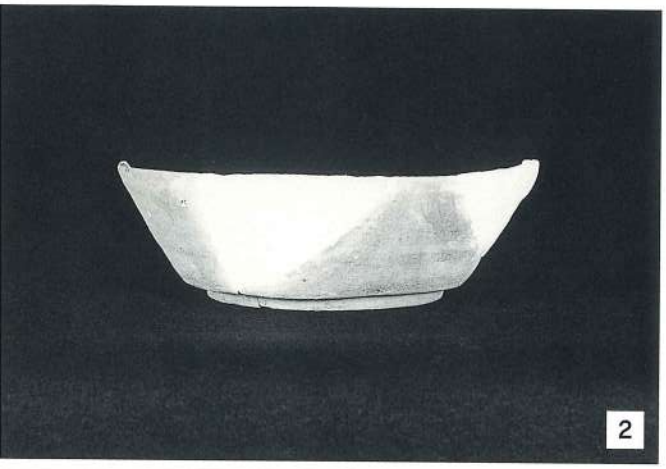


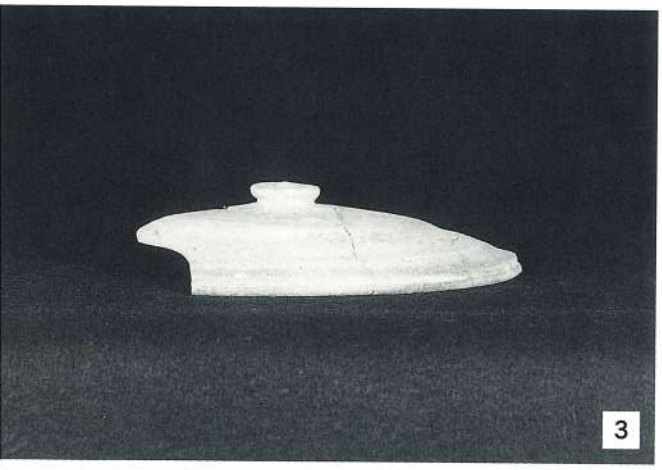


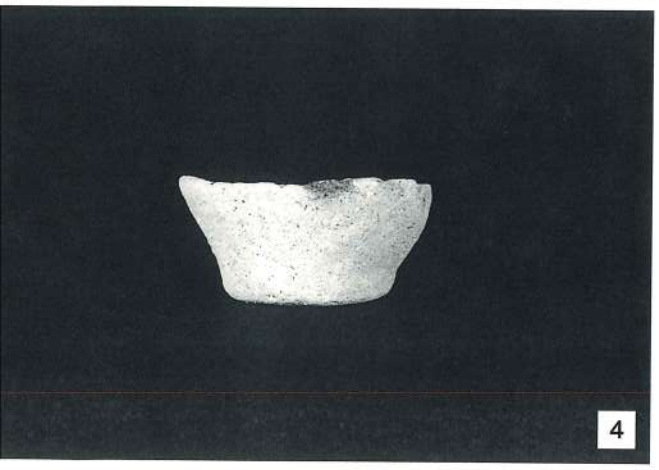


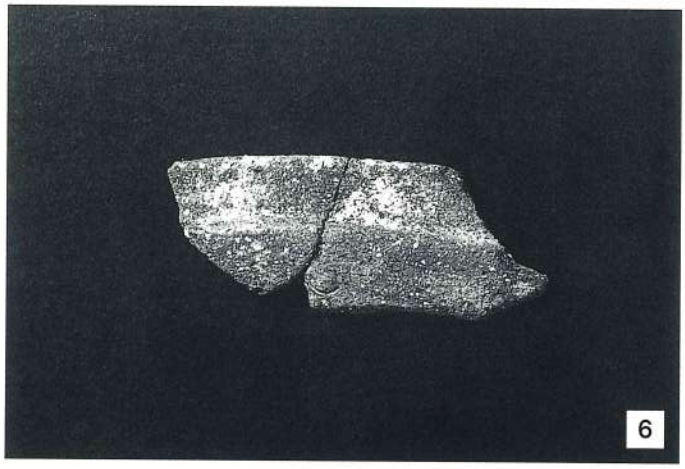
1. 8　SH-205・9　SH-204
2. 12　SH-206
3. 13　SK-207
4. 14　SK-207
5. 15　SK-207
6. 18　SK-209
7. 19　SK-209
8. 20　SK-209

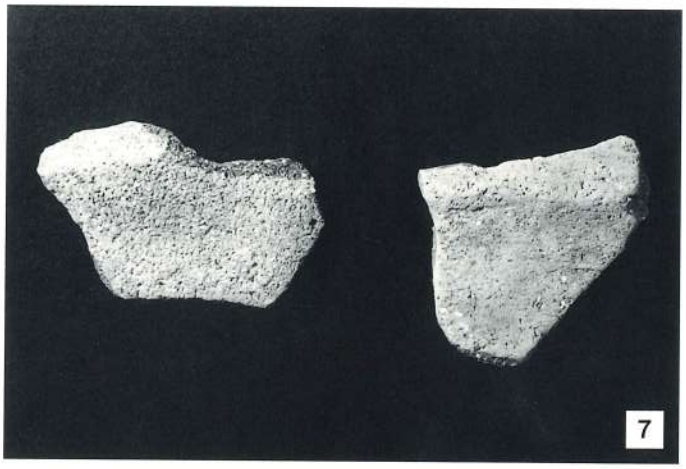


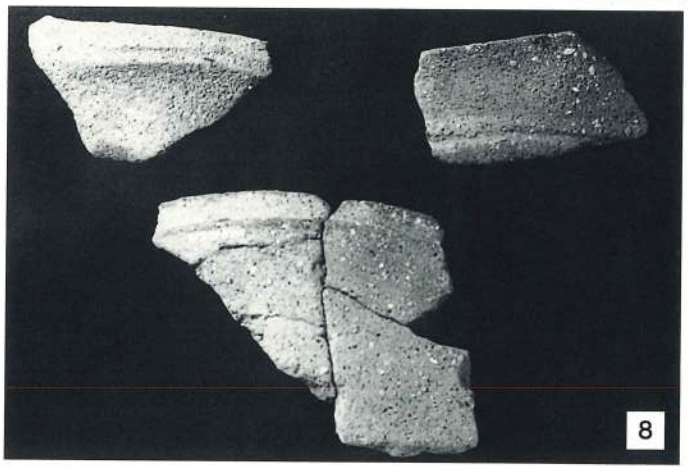






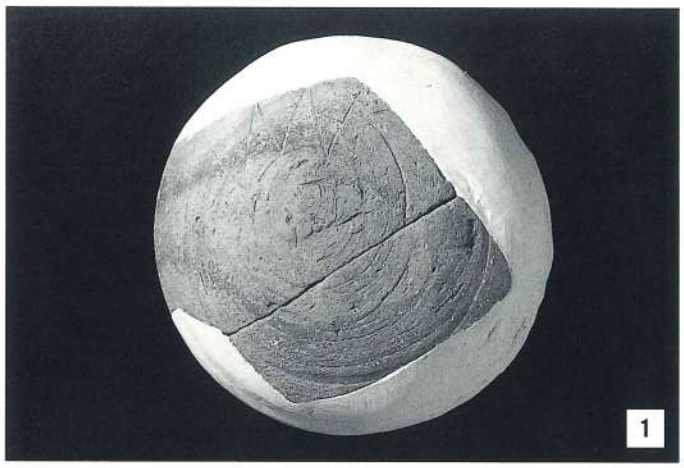


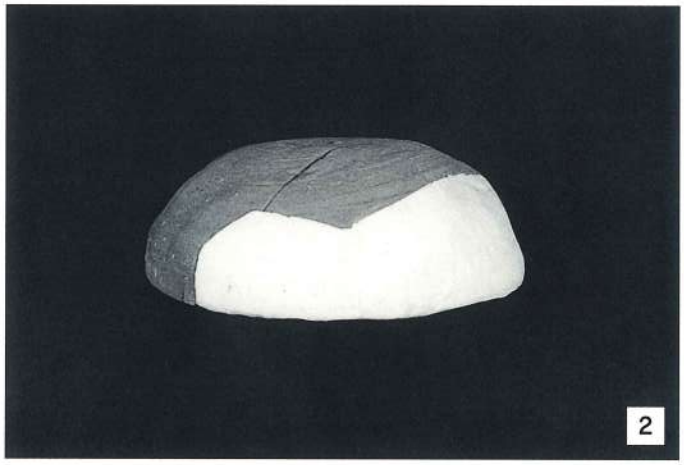


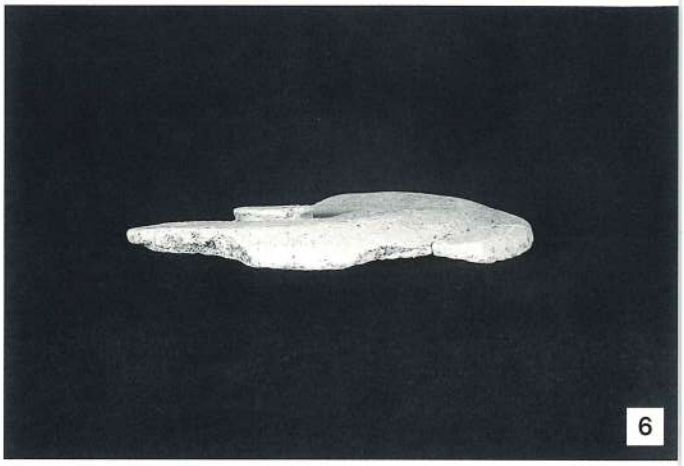


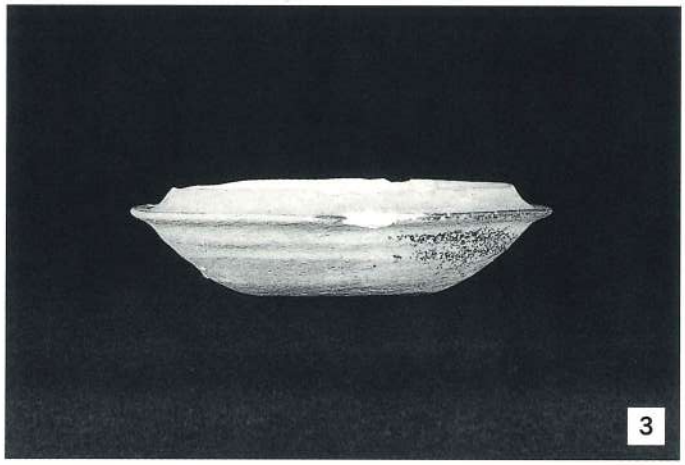
1. 23　SK-213
2. 24　SK-213
3. 25　SK-213
4. 26　SK-214

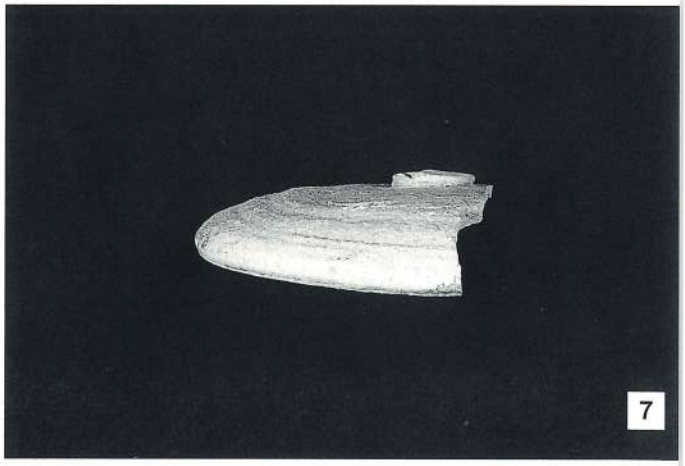
5. 27　SK-215
6. 31　SK-216
7. 32・33　SK-216
8. 上) 35・36　下) 37　SK-216

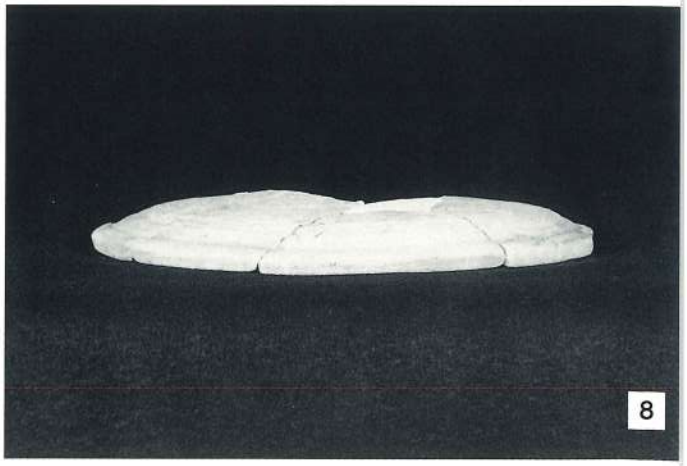




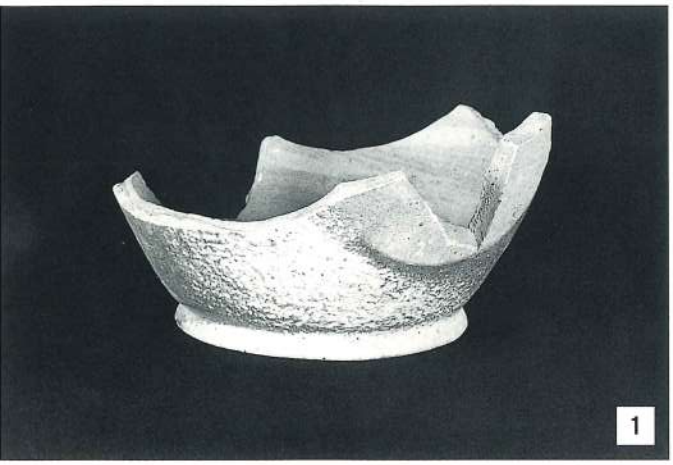


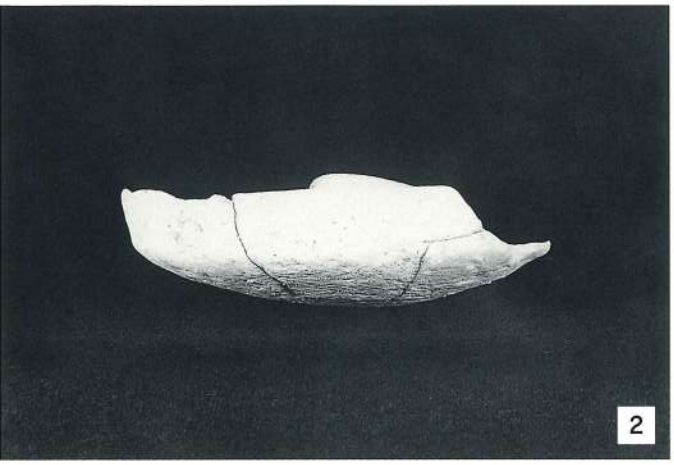


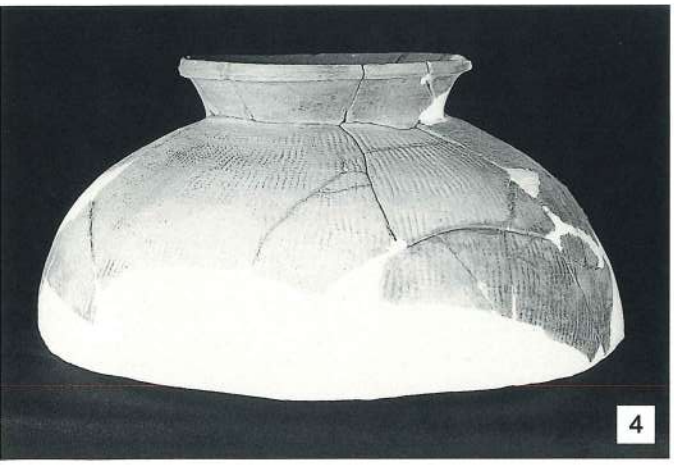


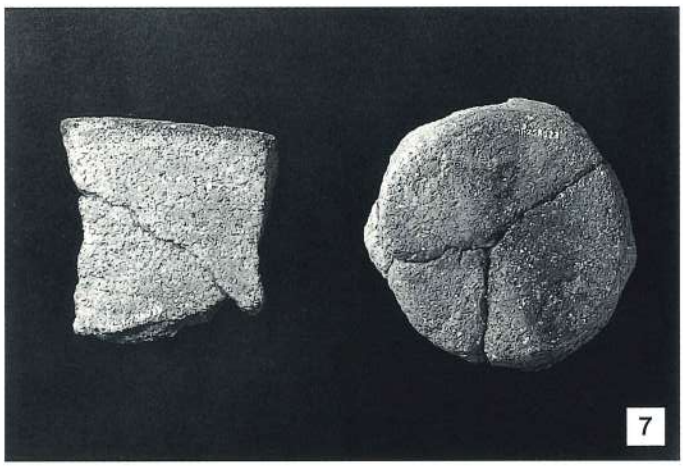


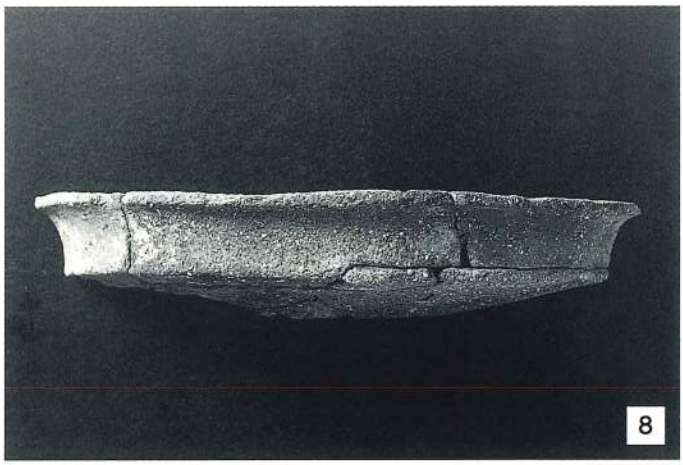
1. 42 SH-217
2. 42 SH-217
3. 43 SH-217
4. 43 SH-217
5. 45 SH-217
6. 46 SH-217
7. 47 SH-217
8. 48 SH-217



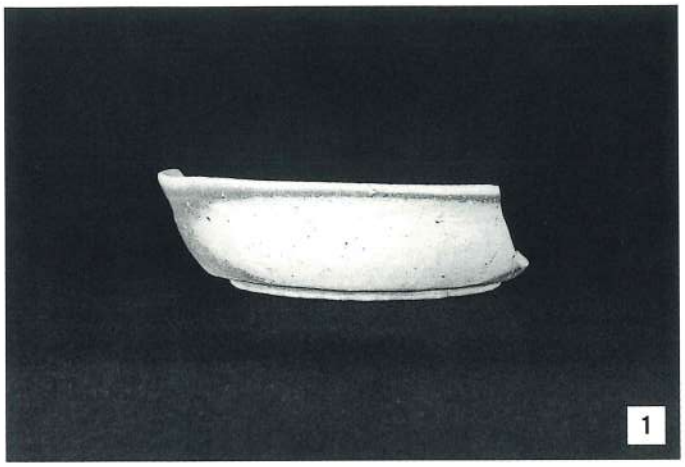


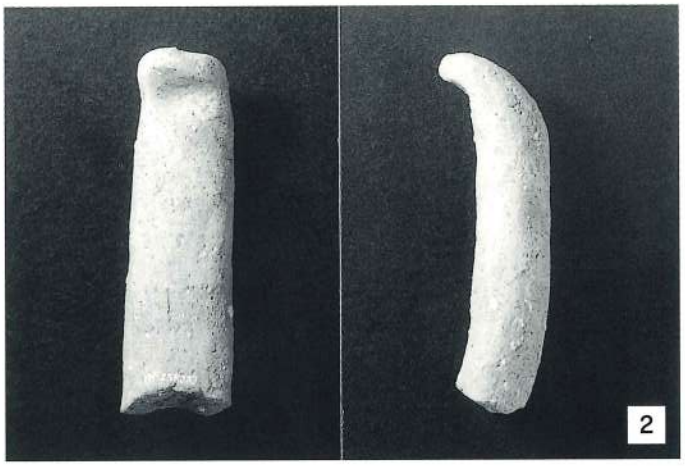


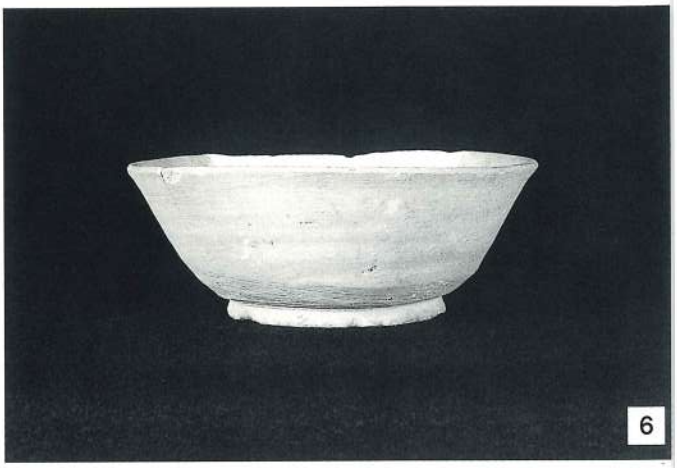


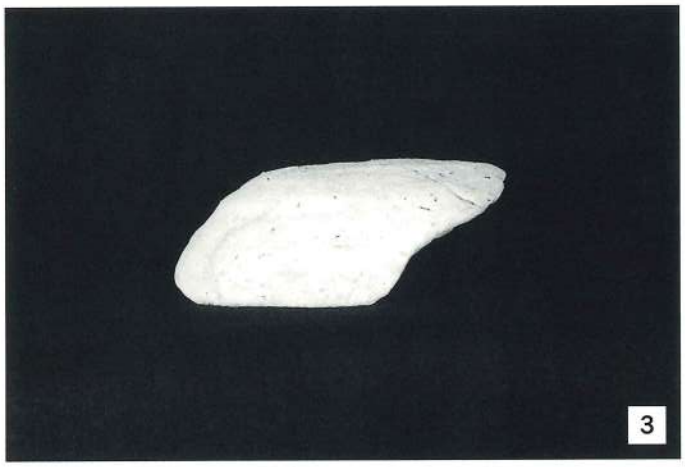


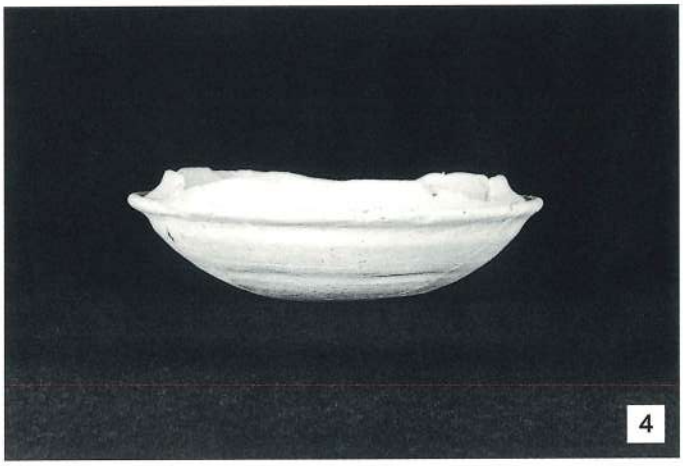
1. 49　SH-217
2. 50　SH-217
3. 54　SH-217
4. 56　SH-217
5. 61　SK-223
6. 62　SK-223
7. 63・64　SK-223
8. 66　SK-223

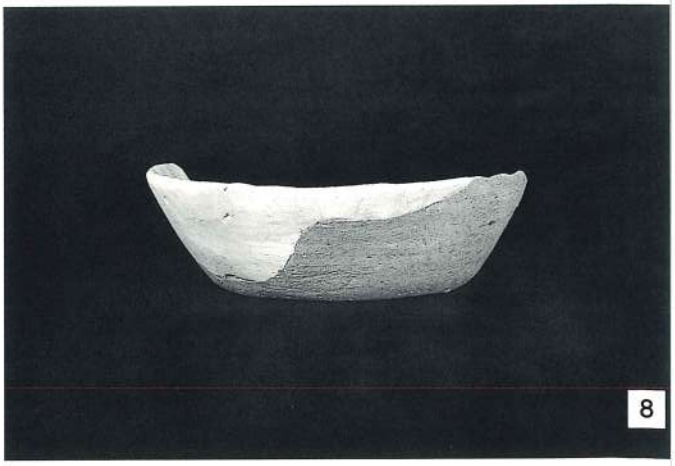




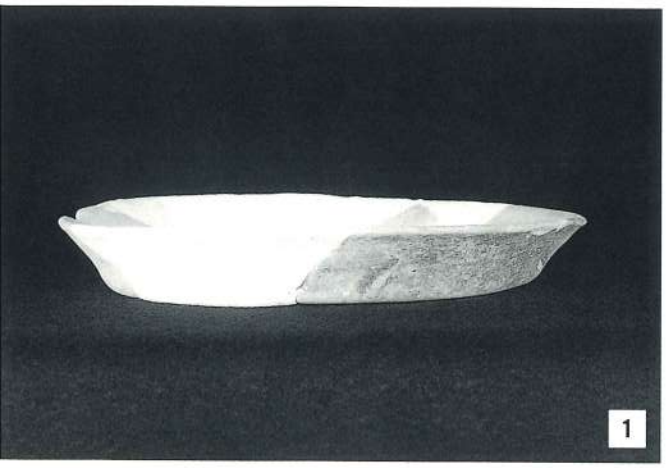


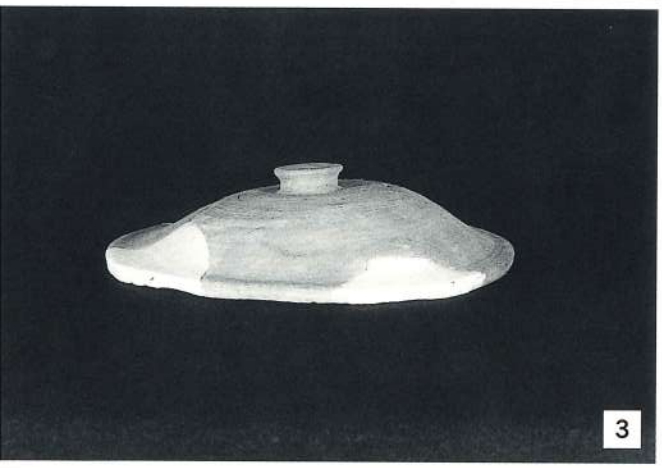


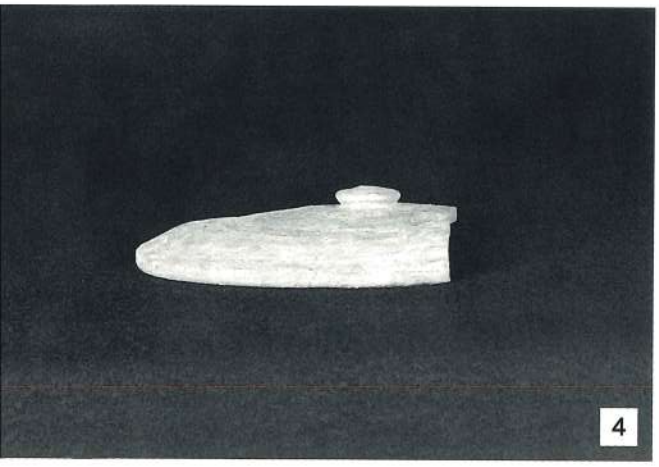


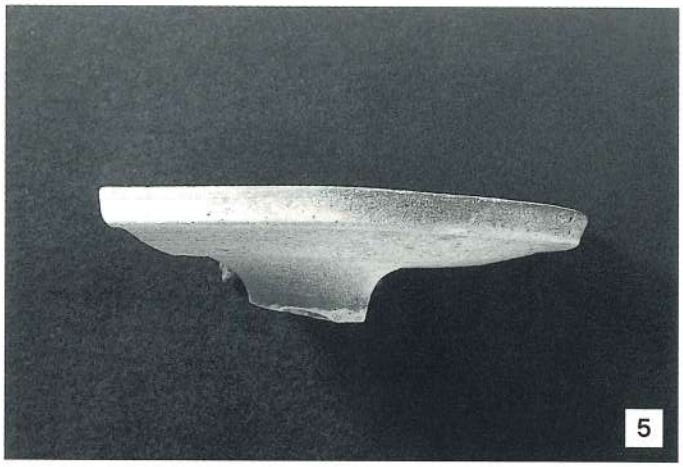


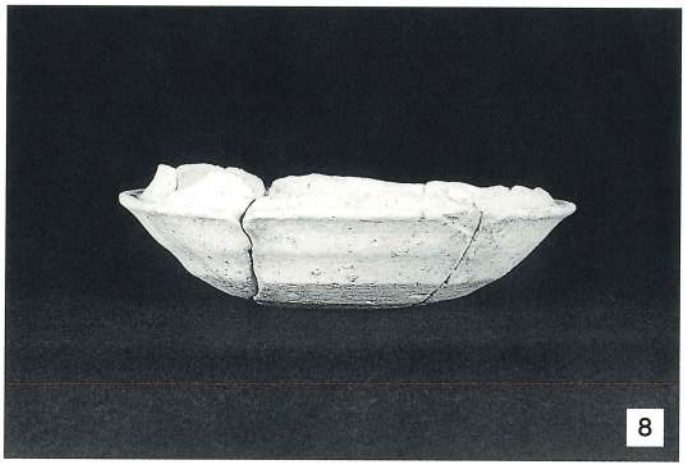
1. 67　SK-223
2. 69　SK-223
3. 72　SH-229
4. 73　SH-229
5. 76　SH-231
6. 79　SK-236
7. 80　SK-236
8. 81　SK-236





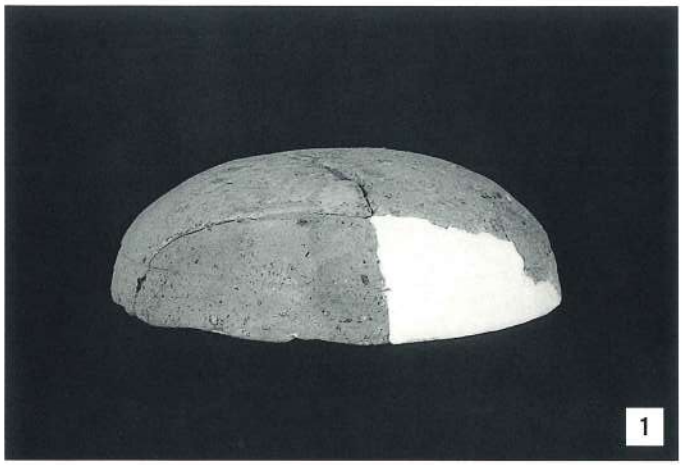


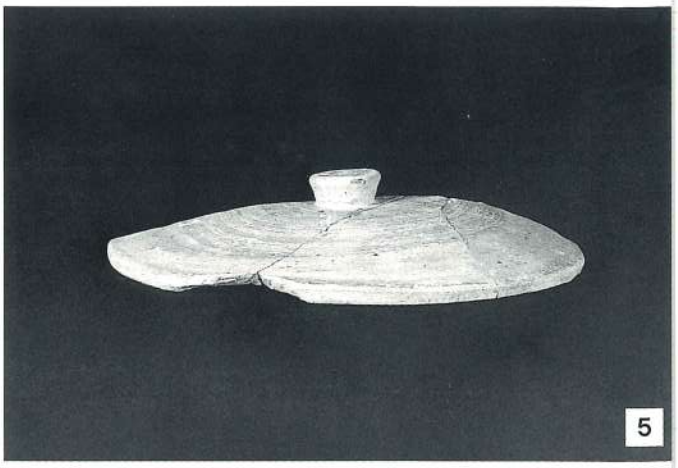


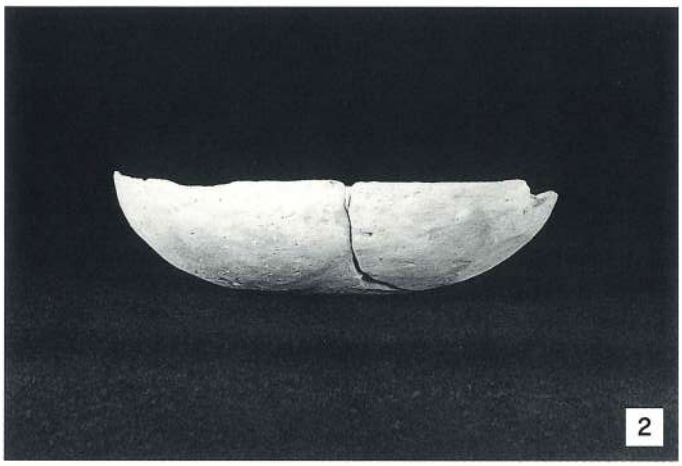


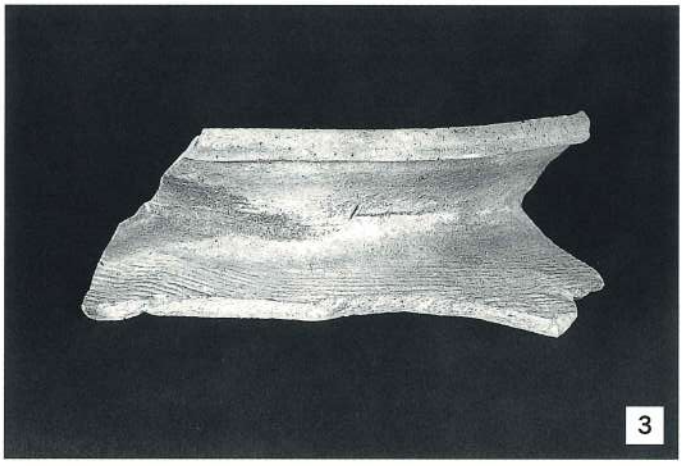
1. 84　SK-236
2. 85　SK-236
3. 86　SK-236
4. 87　SK-236

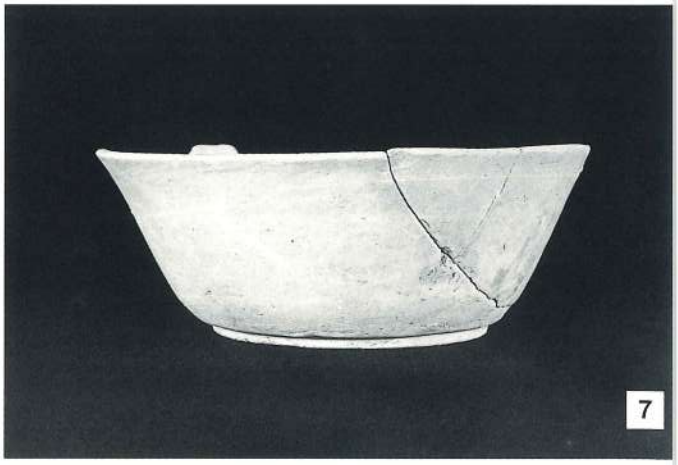
5. 92　SK-236
6. 93　SK-236
7. 95　SH-237
8. 97　SH-237

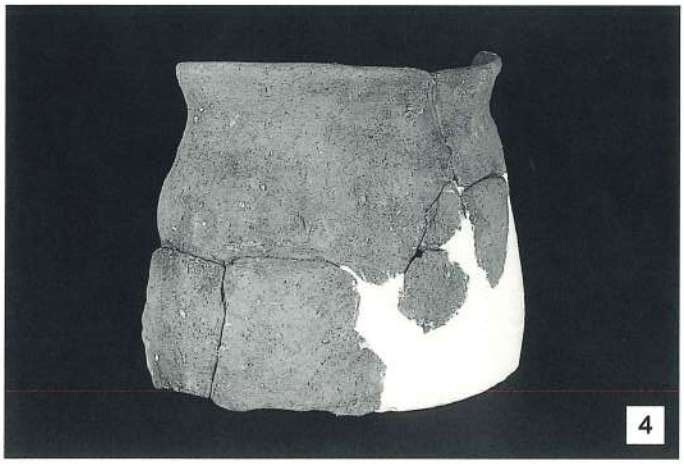


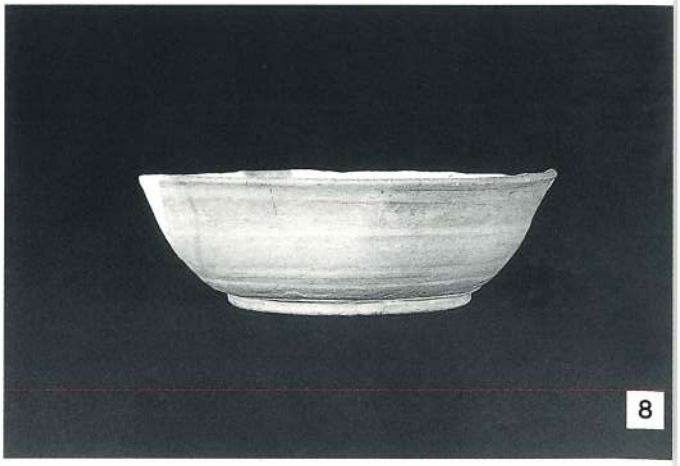




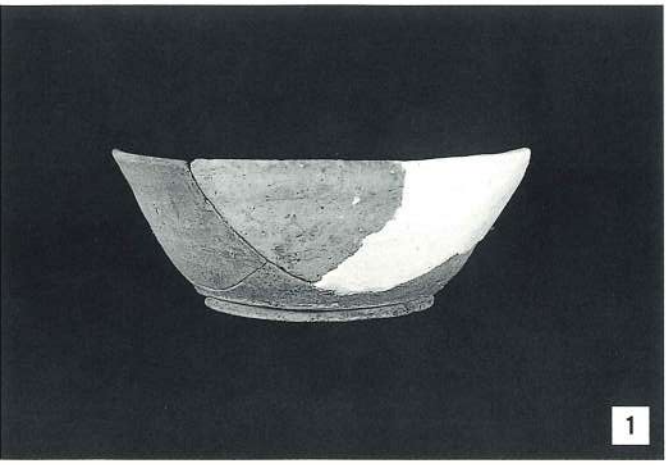


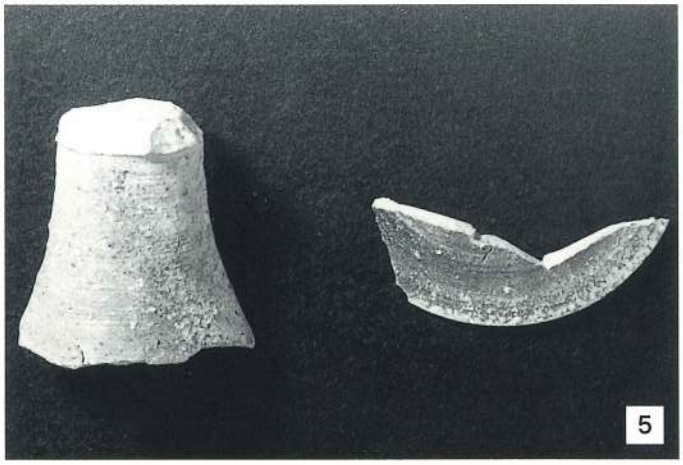


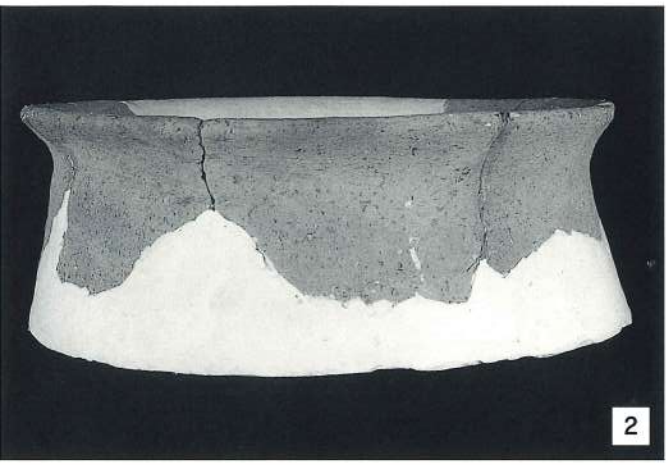


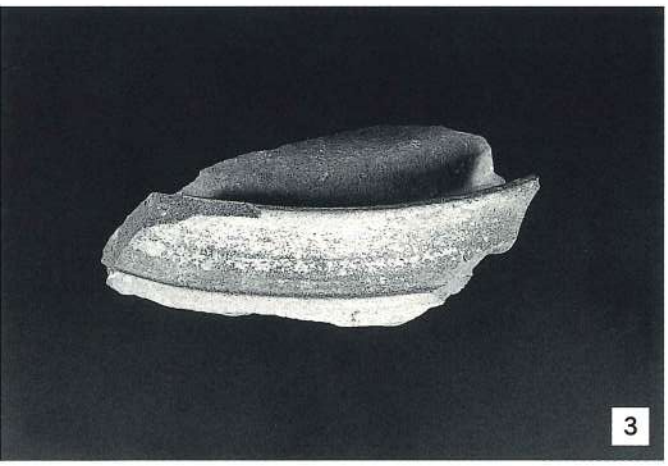


1. 99 SH-238
2. 100 SH-238
3. 102 SH-238
4. 103 SH-238
5. 104 SK-240
6. 105 SK-240
7. 106 SK-240
8. 107 SK-240

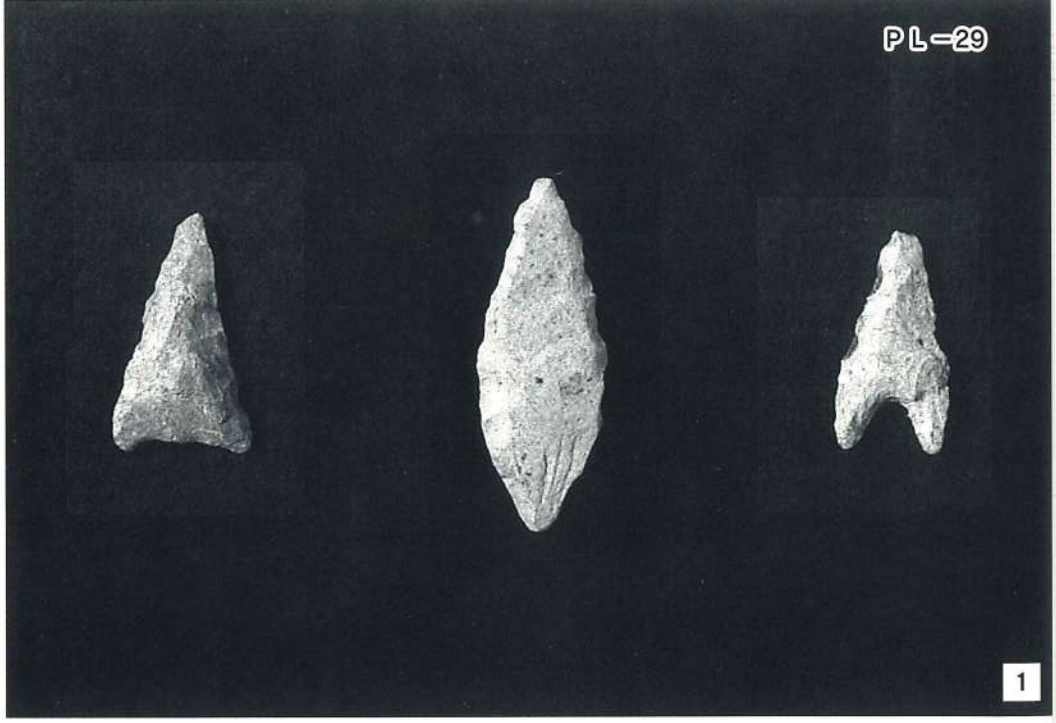


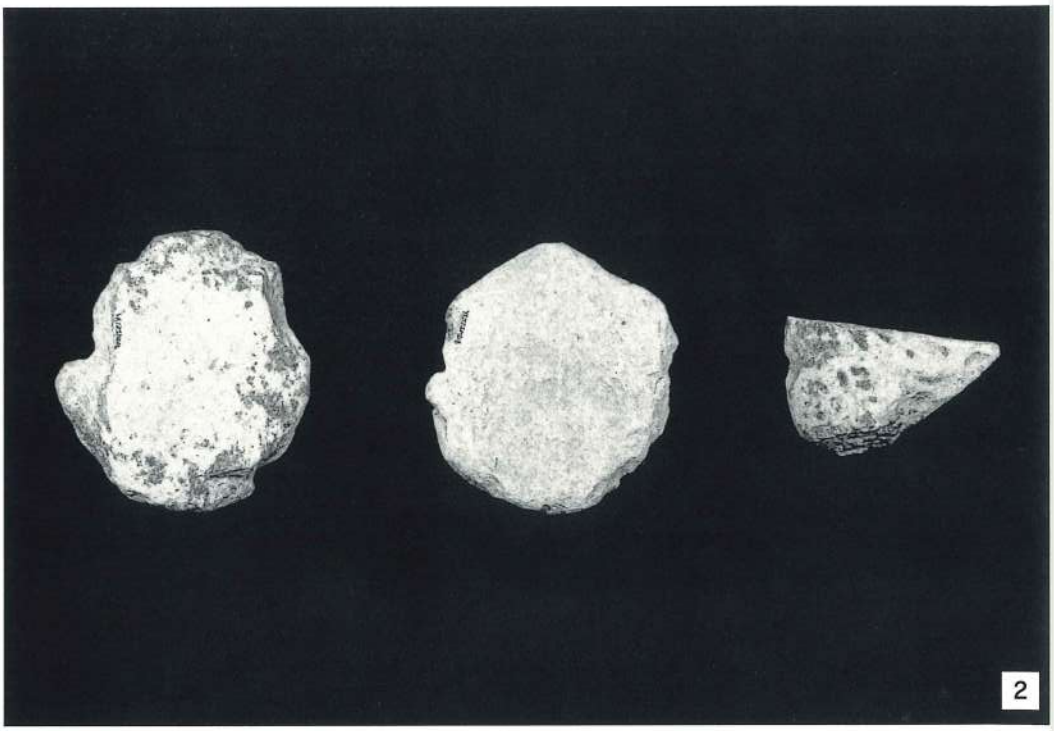


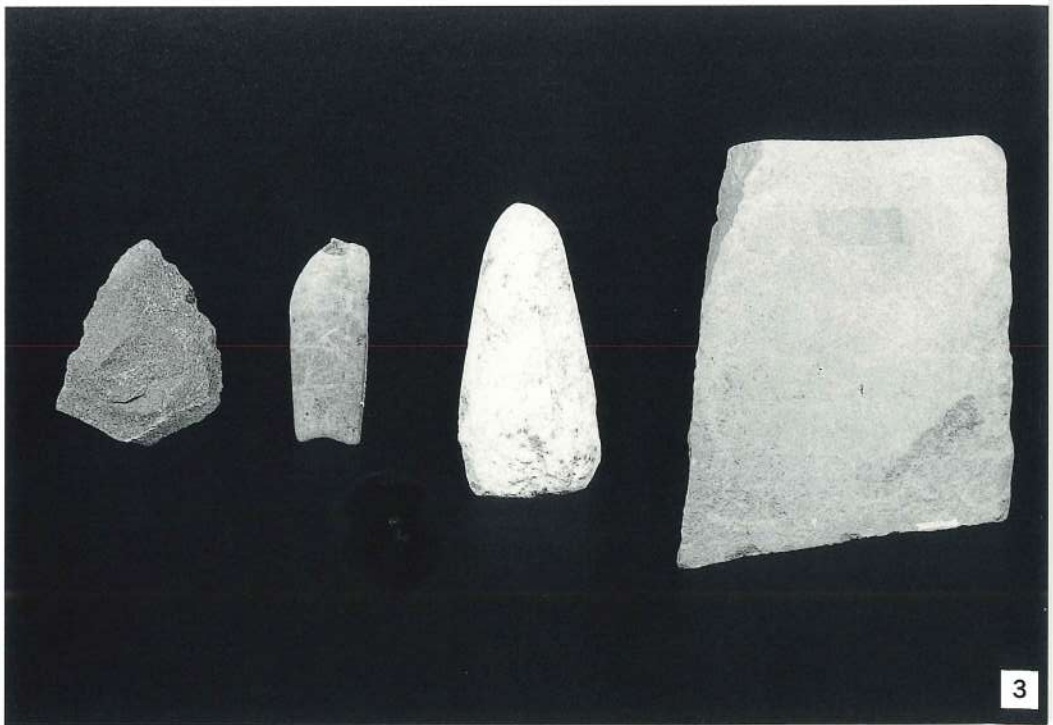




1. 108　SK-240
2. 113　SK-240
3. 119　SK-240
4. 124　SK-241
5. 131・134　SK-248
6. 135　SK-248
7. 136　SK-248







LP. 29

1. 石鏃　1・2・3

2. 石錘　4・5・6

3. 石槍　7・砥石　8

　石斧　9・砥石　10

報告書抄録

ふりがな	つつみろっぽんだにいせきII　やかたばるいせきIII
書名	堤六本谷遺跡II　屋形原遺跡III
副書名	平成２・６年度佐賀県農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	上峰町文化財報告書
シリーズ番号	第18集
編著者名	原田　大介
編集機関	上峰町教育委員会
所在地	〒849-0123　佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4　上峰町民センター内　Tel/Fax 0952-52-3833
発行年月日	2000年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
堤六本谷遺跡（つつみろっぽんだにいせき）	佐賀県三養基郡（さがけんみやきぐん）上峰町大字堤（かみみねちょうおおあざつつみ）字一本柳（あざいっぽんやなぎ）	41345	3035 4005 5011	33°21′00″	130°25′25″	1990.6.21 1991.3.7	2,800㎡	農業基盤整備事業
				33°21′04″	130°25′18″	1994.7.20 1995.1.31	2,000㎡	
屋形原遺跡（やかたばるいせき）	佐賀県三養基郡（さがけんみやきぐん）上峰町大字堤（かみみねちょうおおあざつつみ）字一本松（あざいっぽんまつ）		2002 3014	33°20′56″	130°25′07″	1994.7.20 1995.1.31	3,250㎡	農業基盤整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堤六本谷遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 奈良時代 中世・近世	竪穴式住居址　2軒 掘立柱建物址　2棟 土壙　55基	縄文式土器 弥生式土器 石器類 土師器・須恵器 中世土器・陶器 土製品 近世陶磁器	
屋形原遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 奈良時代 中世	竪穴式住居址　9軒 掘立柱建物址　5棟 土壙　33基	縄文式土器（後期） 石器類 土師器・須恵器 中世土器	

上峰町文化財報告書第18集

堤六本谷遺跡Ⅱ・屋形原遺跡Ⅲ

平成12年 3月20日 印　刷
平成12年 3月31日 発　行

編　集
発　行　上峰町教育委員会
佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4

印　刷　株式会社 三 光
佐賀県伊万里市大坪町乙4161-1